チャールズ・デンビイ著

オートメーションと闘う アメリカ労働者

―労働者の声をきかせてやろうではないか！―

はじめに …… 1

一、自動車工場のなかで …… 4

二、極限に達する疎外労働 …… 22

三、鉄鋼工場で …… 28

四、炭坑で …… 34

五、出口はどこか …… 43

あとがき …… 58

前進社・学習資料 1

9743

はじめに

生産労働者として、同時に労働者新聞『ニュース・アンド・レターズ』の編集者として働きながら、ぼくは一〇年以前にオートメーションに対する闘いが開始されていらい、ずつとこの闘いに参加してきた。

オートメーションは、大量生産工業に、―つまりまず炭鉱業に、ついで自動車工業や製鋼工業や電機工業やゴム工業に導入されたが、現在ではホワイト・カラー労働者の働く事務所にも入つている。

科学者であろうと、技術者であろうと、あるいは著述家であろうと、知識人はオートメーションとは直労働の排除を意味するものと考えるかもしれない。だが、生産労働者は、オートメーションを労働者の排除と考えているのだ。

工場のなかにいないので、知識人は、労働者はオートメーションのなかで技術者にかえられようとしていると考えるかもしれぬ。ところが、生産労働者は、つぎのような単純な事実を知つている。つまり、彼は、失業者の群のなかに投げだされないとしても、機械の非人間的なスピードに従わされるのだということを。

オートメーションが「科学上の成果」だということは疑いない。だが、この「科学上の成果」は生産の外部ではなんらの生命をもたないものだ。鉱山や工場の内部では、オートメーションは決して労働の苦役を軽減しはしなかつた。事実はまさに反対だ。工場の人時計は、いまでは怪物のように巨大な機械のペースにつなぎとめられている。作業時間調査によつて定められた生産を遂行させるものが会社の職長であろうと、組合の職場代表であろうと、そんなことはどうでもいい。

自動車労働者でも、製鋼労働者でも、炭鉱労働者でも、オートメーションと闘つている一切の労働者は、彼らの生死にかかわるオートメーションのもつ意味―つまりオートメーションによるスピード・アップや、オートメーションの非人間的な労働様式や、オートメーションによる超過労働によつてもたらされる死亡や、失業や、オートメーションが導入されたために、うまれた系統的な不況地域や、オートメーションによつて生まれた幽霊の町などのヒルをよく知つている。

オートメーション下の現実の関係をしめすために、たとえばぐがどんな産業をとりあげようとも、話は全く同じなのだ。つまり、生産労働者たちは、職場の内外でオ

トメーションに反対して闘つているが、彼らのそくする組合の指導者たちは、会社側が「進歩」だと称している ものを擁護して会社の味方にたつているのだ。

一九四九年から五〇年までつづいた炭鉱労働者のストライキを例にとつてみよう。このストライキは一定の時期までは、ジョン・L・ルイスに指導され、組合に公認されたストライキだつた。ところが、彼ルイスはおそろしく熱心に「自動採炭機」の使用を「進歩」だと保証し、ストにたつていた労働者に職場にかえれと命令した。だが、労働者たちは、労働条件の変更に関する彼らの要求がいれられるまでは職場にかえることを拒否したのだ。

あるいは、一九五四年の例をとつてみよう。この年、ノオード会社の一重役ははじめて、労働者たちが山猫ストを行つて反対している当のものについて述べるために、オートメーションという言葉をつくりだしたのだ。ウォルター・ルーサー（自動車労組の委員長でAFL・CIOの副会長）は、労働者を支持することを拒絶し、彼らにむかつて「進歩に反対して闘つてはならない」と命じた。

ルーサーでもルイスでも、労働者たちにたいして、彼らが流れ作業の列中からオートメーションをどのように見ているかを尋ねることによつて、心をわずらわせようとは決してしなかつたのだ。

こうしたオートメーション反対闘争は、一九五九年の製鋼労働者のストライキのなかで一応の最高点にたつした。そして、デービッド・マクドナルド（当時の製鋼労働組合委員長）はこのストに勝つたと考えられていた。だが、実際のところは、労働者がストがすんでからかえつていつた職場の労働条件と労働者がストによつて反対した労働条件とはチットもちがわなかつたのだ。組合支部のだした数々の苦情は全然とりあげられていなかつた。通労働時間短縮の要求は一度も団交の卓上には上らなかつた。労働者たちがミシガン州エコースのグレート・レーク製鋼会社で職場にかえつたのち、ほんの一ケ月しかたたないうちに二人の死者がでた。

いまこそ「すべての労働者が技師になれる」といつたお伽話の背後にあるうそをバクロすべきときだ。生産労働者にとつては、こういつたふうな話は「繁栄」についての話と同様に、全くのインチキだ。利潤は上るかもしれぬ。だが、労働者たちのポケットのなかのゼニは一向にふえぬし、ましてや彼らがそのゼニで買うことのできる食料品は決してふえない。生産統計は上るかもしれぬが、失業者軍の数は決してへらない。

もしオートメーションが現状のままにとどまるものとするならば、失業者の大群も永続する。会社の経営者や労働官僚や技師にとつてオートメーションがどんな意味をもとうと、それは生産労働者にとつては、苦汗制工場のような状態へかえることを、スピード・アップの増大を、そして機械を人間に従わせるかわりに人間を機械に従わせることを意味する。組合の労働協約は、労働者か

ら労働条件にたいする支配をうばいとることによつて、経営者にたいして生産性の増大を保証している。

過去十年の間に、全世界にわたつて果しない一連の危機がパクロされた。が、その基礎はまさに生産のなかにある。これこそが最大の問題なのだ。

もし自由のための闘いが生産点で開始されないならば、全体的な自由というものは決してえられないだろう。機械は石炭を掘り、自動車を組立て、鋼を圧延するかもしれぬ。だが、機械がそうした作業をしたあとでもたらす危機は、人間によつてしか解決されることはできない。生活手段を失つた数百万に上る炭鉱労働者や自動車労働者や製鋼労働者も、いまでも怪物のような機械のもとで働いている労働者たちも、ともにこの本のなかに彼ら自身の身の上話を発見するだろう。たとえ労働者たちがどんな産業のなかで働いていようとも、彼らは、他人の経験が、生産の内部の混沌とした状態に対処する新しい方法にたいしてなにものかをつけ加えてくれることを知るだろう。

いまこそ労働者の声がきかれるときだ。

9746

一　自動車工場のなかで

ぼくは一九二六年いらいの自動車労働者で、一九二九年から三九年までつづいたあのおそるべき恐慌のなかを生きぬいてきた。ぼくはCIOの生誕をこの目でみ、それが、この組織をつくつたぼくたちのためにかつてどんなに大きな約束をしてくれたかを知つている。だが、これと同時にぼくは、ぼくたちがつくつた数々の組合が、とくに一九五〇年いらい労働官僚の手にさらわれ、ぼくたちに反対するようになつたことをもこの目でみた。ぼくは、いまぼくの全身の骨や心臓のなかで、オートメーションによつてもたらされた苦痛にくるしんでいる。そして、ぼくは、こうした状態を今後もつづけさせることは絶対にできぬことを知つている。とにかく、何とかして、ぼくたちはこうした状態を変革しなければならぬ。

以下に述べる話は、決してたんにぼくだけの話ではない。それは、ぼくが知つている数百人の労働者の話であり、ぼくが個人的には知らないが、実はそれでも知つている数百万に上る労働者の話なのだ。なぜなら、彼らのオートメーションについての経験や生活や必要や思想はぼくたちのそれと全く同様だから。

△　諸君の背後にある作業時間調査（タイム・スタディ）

オートメーションはクライスラー会社では一九五六年に導入された。これよりさき、一九五四年にフォード会社は、すでにオートメーションを導入していた。ぼくはフォードの労働者たちがストライキにたつたことを思いだすことができる。だが、クライスラーがオートメーションを導入したのは、フォードとゼネラル・モーターズかすでに生産をオートメ化したあとのことだ。

会社側は、職場のなかに、作業時間調査員を坐らせておき、彼は作業をあらゆる角度から計算する。ぼくたちは、以前には一年に一度作業時間調査員におめにかかるのが普通だつたが、今日では、諸君は一日に四〇回も彼の姿を目にしている。彼はしよつちゆう職場にたつている。ぼくは、かつて実地にしばしばこうした作業時間調査員たちが一方の手でストップ・ウオッチをにぎりしめ、片方の手を背中にまわして、一人の労働者のうしろにつつたつて、この労働者の作業時間を記録している現場をみつけた。こうしたときぼくはいつもこの労働者のところまでとかけていつて、彼に、作業時間調査員がそこに

たつていることを知らせるのだが、たいていの場合、労働者たちは、つぎのようにいう。「おれたちは、奴かせとにつつたつていることは知つてるが、そんなことなんかチットも気にしない。おれたちは、これ以上はけしくこれ以上遠く働くことなんかできんのだ」。ぼくにも、このことは分つている。

会社側は、予定生産高をひどく高めたので、諸君がそれだけ生産することができぬことはよく承知している。だが、会社側は、一日中一秒もやすまず諸君を働かせつづけておくことはできるし、また会社側が関心を払つているのはまさにこの点なのだ。会社側は、毎時間まる六〇分諸君をひきつづいて職場にひきとめておく。もし、諸君がほんのしばらくの間作業をやめて誰かに話しかけると、さつそく職長がいそぎ足でやつてきて、諸君に、「一体どうしたんだ？　作業か中断されるじやないか」と詰問する。

オーメーションが導入される以前には、諸君が一定量の仕事を割当てられ時間内にそれだけの仕事をやつてしまいさえすれば、チットも文句はいわれなかつた。諸君が割当てられた仕事をしてしまうなら、諸君は毎時間二、三分間は休息することができた。ところが、現在のやり方によると、作業時間調査によつて、ひとつの作業は、諸君が一時間の間にできるだけ多数の一定の部分にまで、つまり最後の一秒まで計測されているのだ。

この点をも少し具体的に説明させてもらいたい。ぼくたちは、この仕事にかかつているとき、「流れ作業台について」一時間に一二〇回作業をするように時間を計測されている。生れてはじめて、ぼくには、監督が何をしやべつているのかサッパリ分らぬように思われた。だがまもなく、ぼくは彼が何をいおうとしているかを了解した。彼はたえず、流れ作業台がチットも停止しないで動きつづけるようにぼくたちかカッキリ一時間に一二〇回作業することをのぞんでいるのだ、といいつづけていたのだつた。彼は、「もしきみたちがこんな具合に働かないたら、おれたちは機械をストップさせねばならんだろう」といつた。流れ作業台に列をなして並んでいる労働者たちに仕事をあたえる機械のスピード・アップが導入されるのは、まさにここだ。こんな具合に労働することは、人間にとつてはとんど不可能なことだ。もし、それがいくらかの軽作業—つまり諸君かたやすくすることができる仕事だとしても、たぶんそうだろう。だか、たとえそうした場合でも、さきにのべたような具合にやることになる。たが、重作業をひきうけるだんになると、それはまさに殺人だ！　諸君は、生命をすりつぶしながら流れ作業台の傍につつたつているのだ。

以上にのべたことが実際に意味することは、諸君が、時計の針の動きと全く同様に、諸君の身体を動かせて機械との調整をはからねばならぬということだ。

会社は、労働者が彼らの工場にいるときはいつも、こうした機械が人間の運命の成行きをひきうけていること

をのそんでいるのだ。

△ 人間の一断片

仕事にかかつているときには、諸君はその仕事について好感をもちたいと思う。諸君は、「これはまさにおれがやつている仕事だ」と感じたく思い、諸君がやつている仕事に誇りをもちたく思う。ところが、ぼくたちが強制的に働かされているような場合には、諸君は、なにをやつても、それについて好感をいだくことはできぬ。

職長が、はじめてぼくにむかつて、「おまえは一人の人間の数十分の一、いや数千分の一だぞ」といつたとき ぼくは奴は気違いだと思つた。ぼくは彼を相手に議論をふつかけた。ぼくは彼に、人間とは全体的な人間的な存在だぞといつてやつた。諸君は一人の人間を多くの断片に分割することはできぬ。だが、会社がはぐたちにむかつて現にやつていることは、まさにそうしたことなのだ。

ある仕事についているとき、職長は「作業時間調査の示すところによると、きみたちは一時間に九回と十分の一の作業をせねばならぬ」といつた。彼は、「生産をうまく進行させるには、まさにそれだけの人間 労働の時間と、まさにそれだけの十分の一の時間が必要なのだ」といつた。これが、なぜ人間が十分の一に分割されねばならなかつたかという理由なのだ。会社は、ぼくたちを多数の断片に分割した。ぼくたちは、まさにもはや全体的な人間ではないのだ。

人間の肉体は、機械のように働くように調練されねばならない。機械は人間の肉体にどうして働いたらいいかを告げてくれる。ぼくたちは二時間働き、それから休息時間があたえられる。すべての労働者は、二時間働いたあとでは洗面所にゆくことができねばならぬ。ぼくは、諸君が自分自身をならすものとみなされていると、推測する。ぼくたちには二つしか洗面所がない。およそすべてで三五〇人の労働者が十二分でこの洗面所をつかうものとみなされているのだ。

他日、会社はぼくを工場のなかで最悪の流れ作業台の列に編入した。ぼくは職長にむかつて、なぜぼくはここで働かねばならぬのかと尋ねたが、職長は、会社側は労働者たちを停止的な作業から流れ作業へとたえず回転させねばならない時期にたつしていたのだ、会社側がこうしたことをはじめたのは、きみたちが流れ作業から充分な成果をあげることができぬからだ、といつた。ある月曜日の朝、少くとも労働者の三分の一が会社に病気だと しらせてきた。彼らは、先週の金曜日にやつた流れ作業の疲労がいまでもひどく、大きいので出勤できないのだといつた。

会社側はブザーをならすと同時に流れ作業台の運転を開始し、ついで、すべての作業が終つたと思われるときも一度ブザーをならす。ところで、諸君よ、諸君はそのとき流れ作業台をとびのくか、そうでなければ重傷を蒙

るおそれがあるのだ。

会社側は機械をおそろしく早く運転させている。ぼくはまわりを見廻して、二、三フィートうしろに水飲場をみつけた。ぼくはその水が一口のみたくてたまらなかつた。ぼくは機械をまかすことができるかもしれんと考え、うしろの水飲場のところにかけつけて一口飲むことができるように、ブザーとブザーの間大いそぎで働いた。だが、ぼくが溶接ランプを床におろすときはいつでもすかさずブザーが鳴りはじめるのだつた。水を一口飲む機会はごく手近かなところにあつたのだが、ぼくはまるで砂漠の上にいるようだつた。ぼくは決して一口の水にありつくことができなかつた。

一人の労働者は、ぼくに、つぎのようにのべた。「自分の身体はこの工場にやつてきてこの機械について作業すること、にしか適応しないように思われる。自分は毎晩もう二度と工場へは働つてやらないぞと誓うのだが、一夜あけるといつも前の晩に床についたときよりも一そう疲れて床をはなれ、再び職場にでかけてくる。そして自分の筋肉は、わずか半時間作業をつづけると、もうゆるみはじめるように思われる」と。

△ ぼくたちが機械をつかうのではなく、機械がぼくたちをつかうのだ

オートメーションは機械だ。こんなことぐらいはトックに分つている。だが、オートメーションは同時に、人間をも機械にしようとしているのだ。機械は人間がいなければ働くことはできぬ。つまり、誰かが機械に原料をあてがつたり機械をとめたりすることができねばならぬ。もし誰かがそうしなければ、機械はだめになるだろう。ぼくたちの間には、修理を必要とする製品がたくさんである。ぼくは、二五%が修理を必要とする製品だといいたいが、きみたちは同様にその他の一〇%はスクラップだといわれるかもしれない。ぼくが知つている一人の労働者は、会社側はたえず一人の人間を必要とするだろうと感じている。彼はつぎのようにのべた。「こうした機械はたえず監視されていなくてはならぬ。なぜなら、もし誰も監視しなかつたなら、万事がうまくゆかないからだ」と。もし機械がだめになるなら、労働者たちはその結果にくるしむことになる。なぜなら、会社側は労働者たちを帰郷させるが、やがて何とかして機械が再びすえつけられるときには、労働者たちは生産のうらあわせをせねばならないから。

たとえば、いま、ぼくが作業している機械について考えてみよう。この機械は監視されなくてはならぬが、この機械か一体何人の労働者にとつてかわるかを知る方法はない。実際に機械を監視する労働者は、一日にあまりはげしい労働はしない。そこには、電気技師や、修理工や、機械工がおり、機械は電子頭脳をもつている。

機械は、労働者を駆使するが、若干の人々を前面にお

しだす。右にのべた三人はいい仕事口を手に入れる。彼らは熟練工で、十分な自分の時間をもつている。誰も、彼らのまわりをうろついて、彼らをどなりつけたりはしない。彼らは、自分の知識にたいして適当な支払いをうけている。

機械の矢面でにたつているのは貧乏な労働者だ。機械が右のように働くかぎり、こうした貧乏な労働者たちは奴隷状態におかれ、汗水流して働いている。一つのジグには三人の労働者がついており、こうしたジグはおよそ一六ある。各グループは一日に三七回作業せねばならぬ。かれらには遊ぶ時間なんかとてもない。

生産労働者が疎外されるということは、彼が彼の思考からきりはなされた労働に駆りたてられているということだ。このことは、ぼくたちが働かねばならぬおそるべきペースとともに、一日の労働が終つたとき労働者を二倍にも疲労させる。

数年前には、会社が生産を高めようと思うときには労働者は、自分たちの労働の速度や、自分たちが必要だと感ずる賃金の量について何らかの意見をのべることができたのだが、この当時は生産労働者の間の関係は人間的に親密なものだつた。

彼らは自分たちの労働についてたがいに助けあうことができた。彼らは一グループをなしている労働者のすべてにとつて労働を容易にするような方法で労働した。だが、今日では、オートメーションは、何人にも他の労働者を助けることをゆるさない。いくつかの機械はひとくぼう大なので、きみたちは、きみたちのすぐとなりにいる労働者以外の者の姿をみることすらできない。ぼくたちは、全く機械のなかの歯車にまで堕落させられている。ぼくたちが機械をつかうのではなく、機械がぼくたちをつかつているのだ。

△ 機械の孤独

こうした怪物のような機械によつてもたらされる孤独は、全くおそるべきものだ。すべての労働者がこのことを感じている。きみたちがこれらの機械のひとつについて働いているときには、諸君には話しかける相手がない。以前には、八人ないし一〇人の仲間が同じ仕事にかかるのが普通のことだつた。

ある労働者は、自分はむしろ「メリー・ゴー・ラウンド」を動かしている方がましだとまでいいきつた。「それは一番つまらん仕事だけれど、それでもきみたちは誰かのごくちかくで働いている。このことは仕事を現在とはちがつたものにする。きみたちは、誰かと話しているときには、きみたちがそのもとで働いている緊張と抑圧とを忘れている。ときには、ぼくは、日や時かすぎてゆくのさえ忘れてしまう」。

司法当局が監獄に収容中の囚人にあたえる罰もひどい刑罰は、彼らを独房にとじこめることだ。だが、毎日の

労働にさいして、オートメーションはきみたちを無理矢理に独房にとじこめているのだ。

ぼくには、イギリスの労働者たちが、はじめてオートメーションに遭遇したとき、「孤独給与」を要求してストライキをやつた理由がよく分る。

きみたちがひとりでこうした機械について働いているとき、きみたちは自分自身の心中でたえず孤独と闘つているのだ。そして一分ごとに、いまは何時だかを知るために目をあげるのだ。こうした日々を送つているとき、いつか何ごとかが爆発するだろう。なぜなら、きみたちはそれほどまで永くきみたちの心中で闘うことはできないし、きみたちがそうなら、同じ職場の他の仲間もすべてそうした状態にあることを、きみたちはよく知つているからだ。

△ ぼくたちの精神をうちくだくこと

生産を停止することにもまして経営者の命をちぢめるものは、労働者たちがたがいに気持ちをはぐすために数分間のひまをみて一しよに語りあつているのをみることだ。経営者側は、ぼくたちが、休息もせず、なんらかの方法で労働を中断することもせず、一日中一秒もむだづかいせずに働くことをのぞんでいる。彼らは、ぼくたちの肉体と同時に精神をもうちくだこうと欲しているのだ。もしぼくたちが、ぼくたちの欲するようなやり方で機械をよりゆっくりと運転させることができるなら、事態はちがつてくるだろう。現在のようなスピードでは、すべての労働者が一切合切を次の労働者のノドにつめこんでいるのだ。一人の労働者が、先日、職長にむかつて、これまでのところこの組ではまだ機械はチントもまともな仕事をしてはいないと告げた。職長はいつた。「機械を運転させろ」と。

この労働者はいつた。「なぜですか？　検査員が機械をとめるでしよう」と。そして、たしかに検査員たちは機械をとめてしまつた。そこで彼はいつた。「ぼくはあなたにそういわなかつたかしら？」と。職長は彼の方をふりむいていつた。「ここに部分品を山積させておくかわりに、あつちで働いて完全なフレームをくみたてる方が容易だ」と。

会社側は、労働者を何という馬鹿な奴だと考えているのだろうか？　ぼくたちは、完全なフレームを解体するよりも部分品でくみたてる方が容易だということを知らないのだろうか？　だが、その結果、労働者は一日一〇時間ないし一二時間死ぬほど働くことになる。

同様に機械はきわめてしばしばこわれる。そんなに永く中断しはしないがときどき二時間ほど中断することがある。たとえば、ある日のこと、機械が一時間と四五分間動かなくなつた。だが、会社側はそれでも、旧来のやり方で組立工にとつてやれるよりも多い、一千をこえる仕事を完成した。会社側は以前よりも組立工をへらした

が、以前よりも生産高をふやす。なぜなら、労働者たちは終日跳びはねねばならないから。

こうしてつくられた自動車で一時間六五マイルのスピードをだして路上をつつ走つている友達や家族のことを考えるのはかなわない。それがぼくがつくつた自動車のひとつだということは悲しいことだ。ぼくは、粗悪な車が走りすぎていることを目にするが、ぼくにはそこで何とかするために、車をとめることなんかできない。会社は余りにも速いスピードで自動車を生産している。ぼくは、もし会社が毎時間最少限九九台の車をつくらねば会社側は、プリマス工場を経営することすらできないのだと告げられた。

ある労働者は次のように語つた。「ぼくたちは毎分一台ぐらい自動車みたいなものをつくつている。ぼくたちの時間はすべてそうしたことにつかわれてるのだが、ぼくたちが一分間につくりだすのと同じものを買うためには、ぼくたちには三年間の重労働が必要なのだ」と。

△ 一〇セント以下の賃金のために

今日では、一日がどのようにはじまりどのように終るかを知つている労働者なんか一人もいない。はんのしばらく前、他の部門で働いているある労働者がつぎのようにのべた。「ぼくたちは働きにでたらいいのかとうか、ここでは何にも分らぬ。会社側は今日は働きにこいと要求したが、たつた五分前には、ぼくにむかつて次の火曜日に職場にかえつてこいといつた」と。

もとの第九一部門は、自動車工場のなかで、人間が機械によつておきかえられた典型的な事例だ。一九五五年型の車のためには、一組九五〇人の労働者が必要だつた。ところが、一九五六年には九〇〇人が必要だつたし、一九五七年型のためには七四〇人が必要だつた。そして五八年型については、一九五五年に九五〇人の労働者が生産した台数よりもより多くの車をつくるために、わずか四五〇人しか必要でなかつた。

労働者たちは、翌年はどうしてはじまりどうして終るのだろうかとあやしんでいる。ぼくたちは—いやぼくたちだけではなくすべての労働者は一体どうして生き残ろうとしているのだろうか？ きみたちか、家賃や身の廻り品や食料などへの支払い用の小切手をあたえられて、一週間雇されるとき、きみたちは一体どうするのか？

一人の労働者は、クライスラー会社がオートメーションを採用していらい、たえず毎年毎年、前年よりも情勢が悪くなつたといつていた。

「一九五六年は、悪い年ではなかつたが、一九五七年は悪い年たつた。一九五八年は、一九五七年よりもつと悪かつた。そして、ぼくはまだ一九五九年に入つてからは一九五八年よりも少ししか働いていない。この三年間ひきつづいて、オートメーションはぼくの一週間の労働時間をへらした。昨年は、ぼくは、ぼく自身と女房と三

人の子供を養うために四〇〇〇ドルかせいだ。アメリカでは御存知のように、それつぽっちでは五人がくつて浮くのに一分ではない」。

今年の初めに後、会社側は「上昇する六〇年代」について全労声をあげて叫んでいた。ところが、いまでは、奴らは、われわれは次の不況にむかつてつきすすんでいるんだとぼくたちにむかつて告げている。会社側が一月にいつたことは、失業者の数が空たかく上昇するだろうということだつたのだ。

会社にとつてみれば、人間は機械のように有益ではない。会社側は機械がだめになればひどく心配するが、人間がだめになつたつてチッとも気にしない。会社側は、きみたちに、労働者の採用を掲示するには一〇セントもいらぬといつている。彼らは、一〇セント以下で、人間一人をクビ切ることも雇入れることもできるのだ。

△「ぼくたちはまだ強制労働収容所をもつていない」

会社側では、やりたいときはいつでも、超過勤務のスケジュールをくむが、一たんクビにした労働者をよびもどしたり、組をふやすスケジュールをくんだりは決してしない。彼らは、超過勤務については、ぼくたちが選択することをゆるしもしないし、ぼくたちに予告することさえもしない。彼らは、退出時間のほんの数分前にやつてきて、「もう二時間」といいつける。それで十分なのだ。

ぼくは、一日に一〇時間働かねばならぬことについて、労働委員を相手に議論をやつていた。法律には、ぼくたちは八時間以上働いてはならないとかかれている。だが、現在会社側はぼくたちを一〇時間働かせている。ぼくはいつた。「一体会社はどうしてこうしたことをぼくたちにおしつけることができるのか？」と。

委員はいつた。「会社側は生産のスケジュールをくんでいる。そして労働協約には、諸君がスケジュールに応じて働くことになつたとかいてあるんだ」と。

ぼくは彼に尋ねた。「会社側に、彼らの欲するときはいつでも、一二時間でも一四時間でもその他すきなだけの時間の間勝手にぼくたちを働かせるといつたことをやめさせることができるものは、一体何なのでしようか？」と。

委員は、サッサと立ち去つた。彼は答えることができなかつたのだ。超過勤務に反対した一人の男は、五日間職場からはつぽりだされた。このことは、すべての労働者を脅やかし、誰一人あえて一言も発言しなかつた。

労働者の一人がいつたように、「オートメーションとはまさに強制労働収容所のための抜け穴のごときものだ。まだアメリカには人々が銃をつきつけられて労働を強制されるような強制労働収容所はない。会社側はぼくたちに鎖をつきつけたりはしない。だが、彼らは『もしきみ

9754

たちがおれたちの命令通りにしなかつたら、きみたちは街頭で飢えることになるぞ」ということによつて、ぼくたちに労働を強制するのだ」。

「こんなふうな労働に従事して生きてゆくことと、監房のなかに収容されていることとの違いは、ただ、ぼくたちが動きまわる余地をより多くもつている点だけだ。だが、会社側はいまジツとまちかまえている。彼らがきみのもつている自動車や住宅やほんのチョッピリの金をとりあげてしまえば、きみの生活は牢獄のなかにいるのと全く同様だ。きみは、いずれにせよ動きまわることはできない」。

「ぼくはつぎのように自問しつづけるのだ。ぼくは六五才になるとき、一体ぼくの社会保障金をとることができるのだろうか？　ぼくは、工場で働きながら、六五才まで生きることが果してできるのだろうか？　ぼくには疑わしい。あのオートメーションの機械がたえずぼくを殺そうとしている。ワシントンに尻をすえている連中はどれだけ多くの労働者が社会保障金をとりにこれないかを知つて、ひとりではくそえみながら愉快なときをすごしているにちがいない」。

△　二セントの賃上げと同時に、医療保険料の一九％のひきあげ

ぼくたちがほんのチョッピリ一セントか二セントの「生活費」のひきあげを獲得するときは、いつも一切の物価が上る。ぼくたちが七月いらい二セントの賃上げを獲得したら、一切の必需品の物価が上りはじめている。たいていの労働者が参加している医療保険は保険料をはゞんど一九％ひき上げようとしている。

ミシガン大学の一教授は、会社側がぼくたちにくれる二セントの増額を撤回することをのぞんでいる。彼は、そうした賃上げをインフレの原因だと非難するのだ。彼は、一体、ぼくたちは、インフレがはじまつて物価が上つたあとでヤットそうした賃上げを獲得したのだということを、わずか二セントぽつちでは、値上りした物価の八分の一さえ支払えないことを知らないのだろうか？　政府当局は健康保険の保険料をひどくひき上げるだろうから、もちろんもし組合が会社に保険料を全額負担させるために闘わないなら、労働者には保険料を支払う余裕はないだろう。

労働者がゼニをもたず、保険にも入つていなければ医療さええられないなんて全くみじめに思われる。労働者たちが、この世は一体何て世の中なんだと尋ねるとき、彼らのいうことは全く正しい。

南部の一白人労働者はつぎのようにのべた。「おれたちが住んでいるこの世は、まるで地獄みたいだ。大の男がこんな具合にくらさねばならぬなら、そこには何か間違つたことがあるのだ。諸君がまる一週間働けば、諸君は翌週には三日間休んで、病気にかかつて苦しみながら

医者への支払いをせねはならぬ。誰かに訴えたつて、おれたちには全然助けになるとは思われない」。すべての労働者が彼の意見に賛成した。

△オートメーションによる死亡

きみたちがオートメーションは人殺しだときいても、それは決して言葉の綾ではない。グレート・レークス製鋼会社で山猫ストがおころうとしていた頃はまさにその通りだつた。

一一六日にわたるストライキが労働者の勝利に終したと思われたのち、製鋼会社は、自動加工設備を工場の内部にそなえつける、新しい攻勢にでた。超過労働による過度の緊張が原因で、一人のクレーン運転士が足場からおつこちて死んだ。労働者たちが、この運転士のおとむらいにでかけたとき、彼らは、同じ週に突然の打撃とスピード・アップによる緊張が原因で、ほかに三人の運転士かすでに死んでいたことを知つた。このことを知つたとき、労働者たちはスッカリ頭へきた。彼らが山猫ストに入つたのは、こうした理由によるものだつた。

製鋼工場でと同様に、自動車工場でも、オートメーションによるスピードがきつくなるにつれて、工場安全の条件は会社側によつてふつとはされてしまつた。ぼくは、いつ会社側がはじめてオートメーションの機械をぼくたちの働いている部門にもちこんだかを思いだすことができる。ぼくは、最初の日に果してどれだけ多数の労働者が、あるいは手をくだかれ、あるいは指を切断されて、負傷させられたかをおぼえていない。

ぼくたちの働いている部門のなかには、いたるところに安全に作業せよという注意書きがはつてあつた。二、三時間のちに、労働者たちはこれらの注意書きの下につぎのような落書きをした。「これらの機械は安全には処理できぬ」と。

今年の二月一〇日に、一人の自動車労働者が工場の門のところでバスから敷石の上に転落して死んだ。彼は心臓マヒで死んだのだ。仲間の労働者たちは、彼が再三職長にむかつて作業時間調査や機械によつて定められたペースについてゆくことはできないと苦情を訴えていた、といつていた。だが、彼の訴えは経営者にとつてはなにものをも意味せず、組合は組合でただ肩をすくめるはかりだつた。

昨年の一二月三〇日、水曜日に、クライスラー会社の組立部門のひとつで団結した山猫ストとロック・アウトが勃発した。この山猫ストは、フレーム組立作業中に、一人の労働者が重傷を負つた結果ひきおこされたものだつた。

クライスラー会社の、労働者をオートメーションの非人間的なペースにしばりつけて、ひたすら増産をめざす気違いじみた突進は、フレーム組立作業に従事している労働者の生命にとつては危険この上もない。労働者たち

は、フレームが溶接されうる以前に、それからとびだすクロス・バーによつて重傷を負わされてきた。罪い怪我なぞ日常茶飯事だ。

一九五九年のつい最後の水曜日に、バーがとんで一人の労働者の背中と頭とを強くぶち、彼は意識を失つてぶつたおれた。

この意識を失つた労働者が担架にのせられいそいで病院にはこびさられた後、職長は、別の労働者にむかつてすぐここへきて同じ作業をしろと怒鳴つた。この労働者は、「あんたは全くの気違いだ。ぼくは賃金を二倍くれてもそこでは断然働かないだろうぜ」と。いつて、職長の命令を拒絶した。こんなことは、機械が普通のペースで運転しているときには決しておこらぬことだ。

自動車工業の生産労働者にとつては、オートメーションとは、肉体的ならびに精神的な緊張、疲労、心臓マヒ、つまりオートメーションによる死亡を意味する。

△ 血のように赤い小便

死者がでるはかりではない。ぼくは、現在のように多数の労働者が病気にかかり、応急手当をした上で自宅におくりかえされるのを見たことがない。なんらかの方法で人間の健康を害さないような職場は、どの工場のなかにもはとんどない。たとえ労働者が胸の中に余りにもたくさんの塵を吸いこんでいないとしても、彼は余りにもたくさんの煙や化学薬物その他を身にうけている。労働者の身体の内部に入りこむこうした煙や化学薬物などは余りにも多量なので、諸君が年をとればとるほど、諸君の抵抗力は一そう弱まつてくる。この職場の上にはまだ太陽は輝いていない。職場の外部が九〇度ないし九五度になるまでまとう。

ちようど三〇才ぐらいになる一人の青年がフレームを機械のところにつりあげる重労働をやつていた。彼はある日、洗面所から出てきて、ぼくに、「大そう気分が悪いんだ。小便をしたら激痛を感じ、ぼくの小便はまるで血のように真赤だつた!」と話した。だが、こうしたことは今日のオートメ化された工場では毎日おこる出来事なのだ。

ぼくは、一人の労働者から、手紙で、人間の身体は一体どれだけの疲労にたえることができるのだろうかとたづねられた。彼の質問を掲載した『ニュース・アンド・レターズ』が三部か四部、洗面所にかかげられた。その翌日、ぼくは、さらにぼくたちの新聞の医療側の担当者に答えてもらいたいという、二、三通の手紙をうけとつた。以下にかかげるのは、こうした質問と、それにたいする医師の解答だ。

△ 人はどれだけの疲労にたえることができるのだろうか？

わたしは、ひとつのことをお医者さまに承りたいと思います。それは、一人の人間は毎日彼の身体にとつて正確にどれだけの空気を必要とするかということです。自動車工場では、わたしたちは、それほどたくさんの空気を吸つてはいません。わたしたちは塵をすい、そして我労しています。一人の人間の身体は、正確には一体どれだけの疲労にたえるものと考えられているのでしょうか？

一年間には、こうした疲労は、一人の人間の上にどんな影響を及ぼすのでしょうか？　疲労はかりではありません。工場にはガスがあるのです。ぼくたちはアーク溶接をやつていますが、この溶接棒はたえずガスを放散しています。こうしたことは人間にたいしてどんな作用を及ぼすのでしょうか？

この作業は現にますます悪化しようとしています。太陽は、私たちの頭上にはまだ輝くことはできません。たゞこの夏は、会社側は、誰がこうした状態にたえることができるかをしることができるでしょう。だが、労働者たちの一部はたえることができるでしょう。四五才をこえた連中はどうしてもこれにたえることができないことをわたしはよく知つています。

夏はキツクなろうとしています。当地は暑くて、戸外の温度は二五度でしたが、戸外の温度が九五度になるときには、一体どのようなことがおこるのでしょうか？　繊物は、それよりもつと暑くなろうとしています。繊物はまつたく人殺しになろうとしています。

わたしは、たとえ人間かこれにたえうるものとしてもこうしたすべてのことは、人間にたいしてどんな作用を及ぼすかを承りたいと思つています。

△ 医師の答

デトロイトの一自動車労働者が、ガスや疲労や高温が強制のもとで働いている人間にたいしてどんな作用を及ぼすかを尋ねてきた。労働者を労働にかりたてる流れ作業台からうける肉体的な疲労や消耗は、生命のエネルギーの貯蔵を減少させ、したがつて有害な化学薬物の圧迫にたいして人間を一そう敏感にする。こうして、神経の緊張や怒りや欲求不満などのストレスが生ずる。

高温は、バランス状態を維持するために、肉体のエネルギーをより多く貯えることを必要にし、過度の発汗は大量の水分と塩分とを失わせる。過熱された環境のなかでの心臓の鼓動と呼吸とのたかまりは、血液と直接に接触する場合に肺臓のなかにある吸収可能な数百平方メートルの表面を通じて化学薬物をより急速に吸収することを助成する。

溶接が隣接した地域の高温のもとで行われるときは、窒素の酸化物や金属からの蒸発気と同様に、肺臓を刺激するガスが発散される影響は、犠牲者々は、有害化学薬物による被害をますますうけいれやすくする傾向がある。

9758

このような高温で金属が熔せられる場合には、窒素の酸化ガスはしばしば解放されるのだが、こうした窒素の酸化ガスは、たんに肺臓を刺激するにかりでなく、肝臓や血液にたいしても多分に有害な影響を及ぼしうる。

溶接工あるいは溶接工のちかくで働いている人々は、ときには、溶接用アークから発する、いわゆる「内光」をうける。こうして眼を刺激するものは、濃厚な紫色の光である。この光は眼の表面を焼くことができるし、現にこれを焼いており、充血して赤い眼をした、きつい炎症をおこし、膿をだし、砂粒や異物が眼の中にあるような感じをあたえる。

ひとは、右にのべた被害にどれだけたえることができるのだろうか？　私には分らない。だが、私にとつて確実だと思われる唯一つのことは、石油の燃焼から生ずるガスはすべて、生命にとつておそるべきものだということだ。こうしたガスは少量でもひとを病気にするし、大量ならばひとを殺すのだ。過度の労働速度、高度の緊張、労働の職場にある他の化学的刺激物や有毒物質の作用は、感受性に影響を及ぼすだろう。

一酸化炭素が大量に肺臓に吸入されるとともに、刺激的な薬物が注入され、急速な窒息やこん睡状態が生ずる。だが、自動車の排気ガスの濃密な雲にみたされたガレージを通りぬけるとき、私はしばしば、一酸化炭素や鉛や、砒素や、その他の石油製品や、ガソリンのしたたりが、肺臓や血液や造血機関や背髄や脳の中枢部に達するとき、数ケ月ないし数ケ年にわたつて行われる緩慢な、慢性的な有害な被害についてあやしんだ。

頭痛や、身体虚弱や、めまいや、吐き気や、消化不良や、胸の痛みをはじめ、その他の漠然とした苦痛のような徴候は、こうして反復して有毒物にさらされた結果だと、私は確信している。

△ も一度スピード・アップについて

機械は大いに人間を助けることができるだろう。だがスピード・アップはこれを不可能にする。いまフレーム作業をとつてみよう。フレーム用の機械を製作した技師でさえ、この機械が一二秒毎に一回以上の作業をすることを考えてはならないといつた。クライスラーはいつた。九秒毎に一回の作業をすることが、会社がこの機械を購入したときに売り込まれた速度だつたと。このスピードでは、一人の溶接工は、できそこないの部分を溶接しなおす機械をすぐうしろにして作業していた。

会社は自制力を失つていつた。会社側は、右のようなスピードでは余計なコストがかかるといいだし、作業時間調査員に機械の速度を計測させえした。作業時間調査員は、ダイヤルを九秒までまきもどすだろう。そして溶接箇所は再び分離しはじめるだろう。工場の技師長はつぎのようにのべた。自分は、機械の中でダメになつたところを修繕する知識をもつてはいるが、もし彼は作業

が九秒毎に一回という速度をまもれないのなら、会社側は、この機械を会社に売り込んだ人物をよんだ方がましだろうと。半時間にわたつて機械をくまなくしらへたのち、機械会社から派遣された男は、この機械は完全に運転している、といつた。そこで、作業時間調査員はこの機械のダイヤルを九秒にまきあげ、そして溶接箇所は分離しはじめた。

機械会社から派遣された男は、ダイヤルを毎秒一二秒にまきもどし、これがもともと定められたところだと推察されるといつた。ところでいまひとつの白熱的な議論が行われた。会社側が機械をそうしたスピードで運転させることができないとき、会社側は、機械のスピードをあげることによつて人間が「品質管理」をすることをどうして期待するのだろうか？

ひとは、それを信ずるか、あるいは私たちがいま話していることを理解するためには、このフレーム作業を実地にみなくてはならないだろう。会社側は、労働者は彼の職場にとどまつていて、機械をストップしてはならぬという。さて、こうしたことは、私たちが話していることを理解しない人々にとつては悪いひびきはもたぬかもしれぬ。たが、諸君は、機械の一切の動きに歩調をあわせねばならぬ。そして、会社がそのペースをきめるのだ。自動車のフレームは、きわめて厚い鋼でできていてなかなか重いのだ。

こうしたフレームは、一台又一台とつぎつぎに、前の車から一フィートはなれて、コンヴェイヤー・ラインにのせられる。こうした一切の作業は、オートメーションによつてやられる。実際上たがいに肩を接している労働者たちは、コンヴェイヤー・ラインの両側で、溶接作業をしている。フレームはこれらの労働者の下におかれている。そして労働者たちは、作業をしあげるのに約一二秒あたえられている。警報用のブザーがなりわたつて、—あるいは、労働者たちの言葉によれば「カエルがないて」—労働者にこれがきみたちにあたえられている時間のすべてだということを知らせる。フレームは、労働者の頭上をこえて床からとび上り労働者の頭上二、二フィートのところにおかれる。

これと同時に、次のフレームが、きみたちがたつたいま作業していたフレームのおかれていた場所におかれる。ところで、会社は、この作業を七秒間にスピード・アップしつつある。会社がこうしたスピード・アップをこころみることに、何か危険なことがおこるのだ。フレームが、たいへんな力でとびはなれ、ときには溶接されてなかつた部分がはずれてとんでゆく。会社側はもし労働者が危険を発見するとき、コンヴェイヤー・ラインをとめるために緊急用のボタンをそなえている。誰かがこのボタンをおすときは、自動車が高速度で走つているとき反対の方向に自動車を動かすようなものだ。いく台かのフレームはストップするし、いく台かは逆行するし、またいく台かは前進をつづける。そこで、ちようど二台の貨物

9760

自動車が正面衝突するように、フレームはすさまじい音をたてて粉砕する。監督ははせつけてきて、誰かとめたかを知ろうとする。彼は、労働者に何がおこつたかには全然関心をもたない。大事なのは、ただ生産高だけなのだ。

△「もしこれが進歩だとするならば」

もし、こうしたタイプのオートメーション—つまり数百万人の労働者を職場からなげだし、職場にのこつた労働者の身体を目茶苦茶にする機械—が進歩だとするならば、こうした種類の進歩には反対だ、そして、他の誰だつて、たとえ彼が機械の奴隷でなくてはならぬとしてもこうした進歩には反対だろう。ぼくの友達の一人のジョーは右のようにのべた。

ジョーはさらにいつた。「いまでもまだオートメーションが進歩だといつている連中は、ぼくがフレーム作業をやつているところへさてみるべきだ」と。組合がつくられる前には、フォードの鋳鉄工場の労働者は世界中の一切の工場のなかで最も劇しく働いている労働者だといわれていた。だが、この工場はオートメ化されてはいなかつた。オートメーションと同時に、諸君は機械の動きにきびしく歩調をあわされている。そこには休息はない。

オートメーションは進歩的ではなく、かえつてそれについて作業せねばならぬ労働者にとつては破壊的だ。それは、夫と妻の間の関係を破壊する。多数の労働者たちは、妻との規則的な性的関係をもつことができぬ。なぜなら、彼らはひどく疲れてしまつて、職場から帰宅するやいなやすぐさま眠つてしまうからだ。オートメーションは、これと同様に、両親と子供との間の関係を破壊し、まさに家族全体を破壊する。ごく最近、ぼくはビッツバーグの一製鋼労働者の妻君からつぎのような手紙をうけとつた。

「当地ではとてもたくさんの人々が職場からはつぽりだされています。すべての人間の力が浪費されてゆくのを見るのはまつたく恥しいことです。もし私達が職場からはつぽりだされるならうちあけて申しますが私たちは当地を去らねばなりますまい。なぜなら、ここには誰にとつても何にもないからです」。

「あなたも御存知のように、少年少女たちが学校を卒業しても、当地ではそこら辺にブラブラ腰をおろしていたり、厄介な問題をひきおこしたり、あるいは町をはなれたりする以外に、彼らにとつて何にもすることがないのをみているのは、ほんとに悲しいことです」。

△ 機械に鎖でつながれて

会社側が彼らの機械に追加した最新の機械は、いまや、労働者を機械に鎖でしばりつけた。会社側は、今年のモデル・チエンジの間に最新の機械をすえつけたのだ。機

械の維持係りが、ぼくたちに、このことについて語つた。

彼はいつた。「労働者は、重い皮ひもとケーブルで手錠をはめられねはならぬ。—ぼくは、ケーブルは古い帯接銃をもちあげるために用いられるものだと信じている。それは鋼鉄製のケーブルで、このケーブルは労働者の腕をおおう皮製の袖口から彼のわきの下までつながり、背後から彼の肩ごしに前におりている。会社側は、この機械のブレイキする点は一秒の一万分の一だといつている。

「わたしは、こんなに永い間機械を見守りながらたつていたが、会社が私への支払いをすましして解雇しなかつたのが不思議だ。諸君は、この機械がどんな具合に切断するか、それがどんな具合に前後に切断するかを見るべきだ」。

「それは電気製の眼によつて作動する。労働者は切断されるべき金属を機械のなかになげこむ。金属が機械のなかになげこまれるやいなや、—ボタンをおす必要はない—機械が下りてきてこれを切断する。この機械はきわめて急速に作動する。労働者にとつては、機械が切断する前に彼の両手を機械の通路からひつこめることは人間的に不可能だ。だから会社は、こうした皮製の袖口を労働者の手首のまわりにはめ、機械がブレーキし下降してくる点で、彼の両手は自動的に、切断されないようにと、いそいでひつこめられる」。

彼はさらにつづけてぼくたちに、この機械はこれほど劇しく作動するので、会社側は、この機械を始動させるためには誰一人雇い入れることができなかつたとのべた。そこで、監督は職長に袖口をつけたのだ。機械をうごかすには二人の労働者が必要だ。なぜなら、手錠で機械につなかれている労働者にはふりかえる余地がないからだ。彼は、ただ金属を機械のなかになげこむにすぎない。彼らが二、三回機械を運転すると、職長は、彼らにたのんで、解放させてもらう。なぜなら、彼は休憩室にゆくことを余儀なくされるから。こうした話をきいたのち、一人の労働者がいつた。「こうした話は、南部の鎖につながれた囚人たちよりももつとひどくきこえる」と。諸君がそうしたことを話しても、誰も怪じはしない。

△ デトロイトは自動車の町であり、ゴムの町であり、そして失業の町だ

デトロイトは自動車の町であり、ゴムの町である。ぼくの知つている一人のゴム労働者がぼくにつぎのように語つた。「ぼくはいまゴム会社の加工引伸し部門で働いている。タイヤは、タイヤ製造機でつくられる。—そして私たちの工場では、タイヤは回転台の上でつくられる。それは、ちようどその上に十台のタイヤ製造機をのせた大酒宴のようにみえる。そして、これらの機械は、ちようど流れ作業列のように回転する。そしてタイヤ製造機が回転するにつれて、各人は特殊な作業に従事する。それぞれの回転台に会社側は、一五人の労働者をあててい

9762

る。この一五人のうち一〇人は回転台について働き、あとの五人はそれに原料を供給している。

「会社側は、回転台ととりかえるためにオートメ化された機械装置を設置する企画をはじめた。これは、その上に四台のタイヤ製造機をのせていて小塔（ターレット）の上で旋回する。労働者がせねばならぬ仕事は、ただこの機械のボタンをおすだけのことだ。そうすれば、この機械は完全にひとりでタイヤをつくるだろう。一切の手労働はいらなくなる。ぼくはこの機械装置について働いている技師に、「あなたは、その機械装置がその部門で働いている労働者の半分を職場から放りだそうとしていることを御存知なのだ」といつた。ところが、この技師はいつた。「いや、そうではない」と。そこでぼくはいつた。「よろしい。では計算してみましよう」と。彼はこの問題について考え、そして「きみのしつているように、君のいうことが正しい」といつた。この技師は、機械の建設だけしか考えていなかつたのだ。彼は機械と人間との関係を知ろうとはしなかつたのだ。

「この特殊な工場でのぼくの経験とぼくの推計によれば、六〇年代がすぎるまでに、この工場は現在の労働力の一〇分の一で運転されるだろう。いいかえるならば、この工場にはいま六千人の労働者がいるが、この工場は六百人で運転されるだろう」。

デトロイトはこれまで不況地域のリストにのせられてきた。自動車業界のビッグ・スリー——つまりゼネラル・モーターズとフォードとクライスラーとは、それらの会社の重役たちが、ボーナスや配当金の形でばう大な報酬をうけていたことをあきらかにした。ニューバーグのように高級な報酬についてはいわないにしても。ところで一方、自動車工場の雇用は一三%だけ絶対に低下した。ミシガン州では、二〇万に上る失業者が全国の失業軍に加わつて、これを五〇〇万に上昇させた。

右の数字は公式の統計なので、この数字より多くの人人が、職を求めて街頭をさまよい、しかも職をみつけることができず、いままではまだ何らの失業保険をも手にいれる資格をあたえられないでいることは誰でも知つている。連帯がすみ、人々がこうした事実をフットボールのように利用することをやめてしまつた現在、デトロイトの労働者には、より多くの失業いがいには何も期待するものがない。

ぼくが、一九五六年のモデル・チェンジののちクライスラーで働くためにかえつてきたとき、会社側は、彼らの「前途への見透し」としてオートメーションを導入していた。ぼくは、どれだけたくさんの労働者が解雇されつつあるかを見てショックをうけた。ぼくの工場ではこれまではいつも一万二〇〇〇名をこえる労働者がいたが、今日では二〇〇〇名以下しかいない。二〇年の先任権（セニオリティ）（勤務年数のながさによつてクビ切りの順序がきまる。先任権とは勤務年限がながいためにクビ切りの順序が優先的にあとにまわされる権利のこと）をもつている一人

の労働者が、ぼくに、職場によびもどされて、自分が悲しく感じたのは今度がはじめてだと述懐した。当時、彼は、ぼくたちの工場は基幹人員だけをのこした幽霊の町になるだろうと予言した。ところが、ぼくたちの工場は実際にそうなつていつたのだ。

フォード会社は、これまでデヤーボーンのリバー・ルージュ工場で八万人の労働者を雇用しており、ハイランド・パーク工場では、さらに四万人の労働者を雇用していた。ところが、今日では、リバー・ルージュ工場の労働者は四万人以下で、ハイランド・パーク工場ではわずかに二〇〇〇人にすぎない。この工場の主要な業務はトラクターの製造だが、農村地方の不況のために、トラクターの生産高は五〇%低下した。

今年は、ぼくたちはモデル・チエンジのために一時解雇されているが、ぼくたちは、会社側が果してどれだけ多くの機械を導入するだろうかをあやしんでいる。会社側は、ぼくたちを「無期限に」一時解雇した。そして、ぼくたちは、このことが新しい機械の採用と失業の増大を意味することを知つている。ぼくが工場によびもどされたとき、ぼくは第五床の全部が新しい機械に蔽われているのを見た。職場代表は、少くとも労働者の三分の一がもう二度と職場にかえつてはこないだろうといつた。会社側は、労働者を一九四二年の先任順序をもつている者までさかのぼり下げるだろうといつている。

一九五九年の一時点では、ミシガン州の総労働力の一七%が失業していた。一九六〇年は、大規模な失業と苦難という同じ方向にむかつてうごいている。一九六一年は、アメリカが不況に突入することを約束している。

ぼくは、これほどたくさんの大人や若者たち――とくに黒人の大人たちが、アイスクリームの匙を引いたり、現にはくが知つているように雑誌やボロや金物の屑をうつたりしている光景をみたことは、いまだかつてない。彼らは職場からほつぽりだされ、生きてゆくための何ものをもつていないのだ。それは、ちようど、ぼくたちがかつて大恐慌時代に街頭という街頭でリンゴをうつていた時の光景と同様だ。

オートメーションが導入されるところではどこでも、労働者たちは街頭になげだされ、失業ははねあがる。ぼくは、まるでアメリカにいて、ソ連や中国にあるような奴隷労働にむかつてつきすすんでいるように感じないわけにはゆかない。会社側は、アメリカにいる数百万の失業者を、一体どこへおくろうとしているのだろうか？

9764

二、極限に達する疎外労働

△ 事務労働者や技術者との話しあい

ぼくは、フォードの事務部門の一つで一五〇人の女子が一時解雇され、そのかわりにある種の頭脳労働が導入されたということをきき、そして、この頭脳労働ではたつた二人の女子が機械の両端にすわつてお互いに話をすることすらもできないということをきいたとき、オートノーションについてのこの話のなかに事務労働者の話をとりいれることは大切なことだと感じた。そこでロサンゼルスでの一つの例をあげることにする。

△ 頭脳機械？

私はオートメーションについて考え続けてきた。私は電子計算機をつかつて仕事をしているので、私が何かいうとすれば、電子計算機についてであろう。私は生産的労働者ではない。私は、新聞で、オートメーションにたいする多くの労働者の反応について読んだ。また、かれらがオートメーション産業でオートメーション機械をつかつて仕事をすることをどう感じているかということについてもよんだ。オートメ化された機械をつかつて働いてみて私はある感情をもつているのだが、それは工場で働いているとき考えることと全く同じだといわなくてはならない。

私が扱つているオートメーションは人が手で操作しているオートメーションではない。人が精神的に操作しているオートメーションなのだ。機械は直接的に思考しないが、人にある種の精神的作用を及ぼす。

オートメーションは一つの動作を再三再四くりかえなそれかオートメーションというものだ。機械は無期限に一つの運動を続けるように操縦できるものだ。私のこの特殊の機械は、ある数学をやり、計算し、そして支払計算書を作成する。

ことをおこなうには一定のペースをたもつことが必要だ。そして、電子計算機をあつかう場合には、それはものすごいペースなのだ。というのは、緊張を強いられる—そして、あなたはオートメ化された機械をつかつてはたらくときにはいつでも緊張を強いられると私は思う—ことは、この機械の途方もない値段なのだ。

会社を経営している人は、この機械のコストかはんのちよつぴり高価たということ、そして、われわれが仕事を間違いなく遂行しなければならないことを、いつも強調している。もしも、あなたかちよつとでも何かの間違いをおかせは、会社はあなたをマークするだろう。そして、それが三既に及へは、あなたはクビになる。私の働いているところでは、会社はこういう仕組みをつくつている。

△ 間違いをやつたとき

あなたが間違いをしでかして時間を浪費したときには、いつでも、また、どんなにみじかい時間であろうと、罰金を課せられる。こゐことに関しては、冗談かはいりこむ余地はない。つまり、あなたの犯した間違いの時間の長さいかんによつて罰金のたかさがきめられていること は、だれでも知つているのだ。間違いはきわめてささいなこともありうる。あなたが上げたり下げたりしなければならないスイッチの列があるが、もしもあなたがそれを間違つてあげるかおろすかするなら、あなたは三〜四時間を浪費することだろう。しかも、あなたが間違つた時間を浪費することだろう。しかも、あなたが間違つた時間を浪費することだろう。しかも、ときには、間違いあとでも間違いがおこり、そのため、ときには、間違いが倍加されることもありうる。つまり、五、六人の人が一〇時間分に相当することをやつてしまつたというようなはあいを、わたしはいつているのだ。これは一時間五百ドル分の使用料に相当するだろう。私は、勿論、コストのことなど意にかいしない。けれども、この点こそ、会社かあなたに圧力をかけてくる点なのである。

会社が時間に「罰金」をかけるこの罰金については、あなたはいつもきかされている。会社はそれを八一時間と呼んでいる。それは職員の間違いという意味であり、会社はだれかから罰金をとるのだ。あなたはいつもこんなことはをきく。「あなたは八一時間をどの位もちましたか？」。

これはことのまさに半面にしかすぎない。他の半面は、機械かうごいているときには、機械は夢のようなはやさでいろいろのことをやるということだ。しかし、あなたが一つの仕事をやめ次の仕事にかかるときの仕事と仕事のあいだ—それは会社が損するときであり、また、会社があなたに圧力をかけるときでもある。従つて、その時には、あなたは肉体的に圧力を受ける。それはある仕事から次の仕事へヨリはやくうつる競争であるだけではなく、精神的緊張を強いるものでもある。なぜなら、あなたは出来早くやらなければならないし、また、あなたはそのことを知つているからだ。

△ 一時間にどれ位の百分の一がある か？

あなたはタイム・ウオッチをもつている。それをあな

たは身につけている。だから、会社は、あなたが仕事と仕事の間についやした時間をはつきり知つている。それはあなたが浪費した時間なのだ。あなたはあらゆることをチエツクしなければならないのだから、緊張はどんなときにもたかまりつづける。あなたがある仕事をはじめ、間違いをおかすなら、たとえそれをなおしても、行程の再開始のために時間を浪費している。このことは、あなたも御存知の通りだ。

他の産業のオートメーション労働でどんな種類の肉体的緊張がひろがりつつあるかということについては、私は知らない。けれども、私が働いているところではこのような精神的緊張がものすごくひどい。工場のオートメーションから受けるあの苦痛をへしおるような緊張感はないかもしれないが、そのほかのあらゆる種類の緊張感をあなたはこの型の機械から受けるだろう、と私は思う。私のなかでは、それは一つの習癖になつてきている。私は、うちに帰つたとき、人々と話をしたり、あるいはなにかをしたりすることができるようになるのに、二時間はかかる。私はねむることができない。そして、私は、真夜中に帰宅する。会社は全体制をうまくきずきあげているので、あなたは間違いをやることはない。だが、あなたはスピードを早めなくてはならない。私は、このことも、生産労働者にとつてオートメーションが何であるかということの本質をあらわしていると思う。オートメーションには私が好きになるようなものはなに一つない。

× × × × ×

次にあげるのは事務室のオートメ化した機械で働くように選ばれた、知能指数の高い、大学出のある青年の話だ。彼は、オートメ機械がどれだけ多くの労働者にとつてかわつたかということを知らなかつた。だが、事務労働者もいわゆる「技術的失業」にどれほど苦しめられているかということを示す統計である。

△ 記録されたテープによる電気的統制

労働問題をいくらか知つているある技師に、ぼくは、オートメーションの構成をどうかんがえるかときいてみた。次は彼のいつたことはである。

体系としてのオートメーションは、ただのオートメ機械ではない。ぼくたちは、何年もまえから、オートメ化された機械を、自動ねじ切り盤を、その機械にいつもつきそつている労働者を一人も必要とせず種々な大きさやかたちのボルト、ねじあるいは小さな部分品を任意の数だけうちたす機械をもつている。

オートメーションはこれらとはどこか全く違つたものである。実際、それは、完成品または半製品のどちらかを生産するために連結された一系列のオートメ機械全体である。生産物は組立過程をとおりぬけてゆく。そして、生産物のいろいろの部分品はオートメ複合体のなかで組

みたてられてゆくのだ。おおくのばあい、オートメーション過程は、記録テープで統制されている。そして記録テープは、機械にたいして次になすべきことを語る「プログラム」をふくんでいる。多くのこれらの機械は多くの違つた種類の作業をやることができるのだから、テープによる電気的統制はこの機械の機能の必要部分なのだ。実際、それらの機械は、かつては通常機械作業者として雇われていた人にとつてかわつているのだ。

オートメーション過程のこのような特徴こそ、流れ作業列中にある人々がオートメーション過程にはげしく反対するようになる原因なのだ。これらのオートメ化された流れ作業の列中で働かねばならない人びと、それらに部品あるいは原料をあてがつたり、それらから完成された部分をとりだしたりしている人々は、いまでもいる。だから、これらの人々は機械がまえもつて決定しておく速度で働くことを強制されている。そして、機械は人間の支配者になつている。

ある一つの工程に割りあてられる人々の数は、普通、理想条件の下で円滑に機能している機械を基礎として決定される。デトロイトの流れ作業列中にある労働者は、だれでも、この上ない状態がまれにしか存在しないということを、あなたにいうことができるだろう。機械にはこわれるとか一部が正常に機能するのを拒否するとかいつたような欠陥がある。ある機械は四〇％もの不合格品をだすことで知られている。

もしある機械が一七の溶接を仕上げるはずのところ一五の溶接しか仕上げなかつたり、必要な穴の数の一部しかあけることができなかつたり、いくつかのナットやボルトを組立てのなかにはめこまないでのこしたりすると、その生産物は修繕にまわさなければならなくなるか、または、不完全な状態で消費者に引きわたさなければならなくなる。

製品の品質の保証よりも生産記録を書きこむことに熱心な職長がどんなにおおくのこれらの不良品を「合格」させるかということを、労働者はあなたにおしえることができる。こうして、機械は確実にある機能をはたすように配置されるかもしれないが、機械は、それを統制する人間が使用しなければ考えることも、判断を下すことも出来ない。

△ 科学者と作業時間調査員（タイム・スタディ・メン）

ぼくは、前に、技師からこんな話をきいたことがある。つまり、会社は、労働者が機械について何かを知るのをふせぐために、そんなやり方で機械を設計し建設するというのだ。会社は、何事にたいしても労働者が自分の判断力を使用することをのぞまないのだ。

オートメーション以前には、主要な改造がおこなわれたり、新しい機械が導入されたりしたときには、会社は労働者の知識と経験とにたよつてそれを順調にうごかさ

なければならなかつた。ぼくたちは機械からよじれをなくさねばならなかつた。数週間のあいだは、ぼくたちはいかにも人間らしく感じた。なぜなら、そのあいだは、ぼくたちは一緒に問題の解決につとめ、いろいろのものを組織し、それらを円滑に活動するようにしなければならなかつたから。それから、技師、作業時間調査員、職長、監督は、ぼくたちとの交りをたつて、背後から立ち去つてしまつた。会社は、生産を円滑に流れさせるためには、ぼくたちを悲哀とした。その後、はじめて、彼らは旧式の懲罰とスピード・アップを使用したのだ。

現在、会社が必要としているのは機械を監視する人だけなのだ。会社は機械の監視を排除することはできない。何故かといえば、誰れも監視していなければ、機械は破損し、あらゆることはくるつてくるたろうからだ。だが、機械を監視するということは、機械を知るという意味ではない。機械をそういうやりかたで操作することは、知識をもつことではない。機械を本当に知るということは、意味は、そもそもの最初から機械をつくり、その全機能を知るということなのだ。そういうやりかただと、単調ということはないだろうし、どの仕事にもいくらかちがいがあり、あたまをつかわなければならないし、すべての人が問題の解決につとめなければならない。

オートメーションはすべての人の知識を背景とするように設計されたのではない。それは人々が必要でなくなるようにするために、そして残つた人々には圧力を加えるために設計されたのだ。会社は、ぼくたちが働いているとき、頭脳をつかうことを欲しない。会社はぼくたちに圧力を加えることだけを欲している。

ある鉄鋼労働者がいつたように、経営者は現場の圧力者をおどかし、かれらがいなくても仕事は進行させることができると主張するかもしれない。といつても、経営者はぼくたちが仕事を自主的に遂行することは望んでいない。彼らは彼ら自身の型を押しつけ、機械の稼動を確実にし、彼らの望むままにぼくたちが働かねばならぬようにするために、彼らの作業時間調査員、彼らの管理技術者、彼らの圧力者をもつているのだ。

この鉄鋼労働者はつぎのようにのべた。自分が工場のなかで、人びとが実際に会社がおしつける型にしたがわないで仕事をやつており、実際に自分自身のために仕事をやつておるのを見るときには、きみたちは同僚に万全の信頼をはらつているにちがいない。また、同僚からも信頼されて、緊張なしに一しよに働いていることだろう。きみたちは朝起きると、働きに行きたいと思うことだろう。ところで、きみたちは、きみたち自身の責任でもなく、何か小言をいわれることを知いのに一日に何回か誰れかから小言をいわれることを知つていながら、仕事にいくために果して朝おきるだろうか？　それは問題だ。その男は、ちようどうまいときにやつてきてきみたちの仕事の中になにか悪いところを見出だすだろう。これが会社のやりかたなのだ。

会社はちようどうまくまわつてきてきみたちに何か小

言のたねをみつけるこれらの男をもつている。問題の核心はきみたちの精神をうちくだいて、彼らが望むやりかたにきみたちを追いやるということにあるのだ。このことは自動車工業で真実であるはかりではない。『ニューズ・アンド・レターズ』誌は基礎産業の労働者から多くの報告を受けている。まず鉄鋼業に目をむけよう。この部門では、オートメーションの戦場は黒人労働者に特に破壊的結果をもたらしている。

三、鉄鋼工場で

圧延工場では、オートメーションはたえず導入されつづけている。流れ作業列がオートメ化しているところ、例えばミシガン州エコーズにあるグレート・レークス鉄鋼工場では、約百人の労働者のうち三六人が首きられた。自動化した流れ作業列は、大きさにしたがつて圧延し、自動化した流れ作業列は、大きさにしたがつて圧延し、剪断し、仕上げし、型打ちし、推敲して、最終製品をつくる。まえには、これらはすべて別々の作業で、仕事をする人を必要としていた。

△ 労働を軽くしないでスピード・アップしている

機械化とオートメーションは人々の労働を軽くするはうにみちびかないで、スピード・アップするほうへみちびき、しかも、同時に、人々を仕事からはつぽりだした。

以前には、炉の修理に従事していた人々は、多分、修理につかう煉瓦を車ではこび、修理中の炉のまわりにためておいて、その地点から煉瓦を積む場所にひつぱりあげただろう。だが、今では、これらのすべての仕事はなくなつてしまつた。

いまでは煉瓦を運ぶリフトがあり、煉瓦工が働いている足場に煉瓦をためる。きみたちが一つの積みあげをおわると、次の積みあげの仕事がきみたちを待つている。きみたちがどんなに早く煉瓦をつんでも、もつと多くの積みあげ仕事がきみたちをまつている。仕事の中断は過去のことだ。

鉄鋼の生産をスピード・アップするためにも、炉の築造や修理にヨリ耐火性のある資材をつかうようにするためにも、多くのことがなされている。

酸素の熔鉱炉内へのふきこみが導入された。これは鉄鋼熔解時間を相当に短縮する。以前ならば、炉から金属をとり出す湯出しのために、八時間の労働時間中に一回ひどい熱気をうけるだけでよかつたが、今では八時間の労働時間中に、湯出しのために二回ひどい熱気をうけることが多い。

鉄鋼生産時間のこの化学的スピード・アップとともに熔鉱炉にヨリ耐熱性の資材をつかう方法が発達した。第一に、かつては煉瓦は普通の黒煉瓦だつたが、今は煉瓦は耐熱性をますように鋼で被覆され、まえの煉瓦よりずつとながもちするようになつている。

いま一つの新しいものは熔鉱炉用に設計された基礎屋根である。緑瓦の名三倍目ごとに、屋根の寿命を相当長くするためにつくられた金属板をはめこむのだ。この新しい屋根をつかうと、以前ならば取りかえねばならない四五〇度以上の熱でも平気なのだ。これは古い屋根に比べて二倍以上ももつということなのだ。

これらのすべてが意味していることは、これらの仕事のために必要な人間はまえよりもずっとすくなくなっているということ、そして、経理部門では半分以下に縮少されているということなのだ。

機械化とオートノーションは、いよいよますます追加され、それらに追いつくために労働はいよいよはげしくなる。いつぽう、会社は正規の仕事のうえにさらにおおく仕事を追加しつつある。

以前には、一群の清掃労働者がいて、仕事から出た屑を清掃していたが、今は仕事に従事している人々が自分自身で掃除することを強制されている。

会社は次のようにいう。きみたちの仕事場をきれいにしておけば、きみたちの働き場所はより安全になると。このことは正しい。しかし、掃除をする清掃班がいて安全な場合と自分の仕事をし、同時に掃除もしなければならない場合とは別のことなのだ。—しかも、会社は、きみたちに清掃労働を追加していないような顔をして、以前と同量の労働をきみたちから引きだすことを予期しているのだ。

その結果、職場の状態はずっと安全でなくなっている。なぜなら、きみたちは会社がきみたちに投げつける仕事をより激しくより早くやらなければならないからだ。きみたちがやらなければならぬ仕事のペースは余りにもつまっているのだ。きみたちは疲れすぎるようになり、そのために、はんのちょっとした間違いをおこすかもしれない。それは時間の問題なのだ。労働者は疲れすぎて、事故をおこしがちになる。このような状態におちいっているのは主に未熟練工および半熟練工だ。

これまでになされた一時解雇全体を通じて、目につくことは、一人の監督も一時解雇になっていないことである。これは、労働者がすこしの休息もできないようにかれらの首の根に息をかけて監視している多くのボスの一人がいつもきみたちのうしろにいるということを意味する。

鉄鋼労働者は、会社と組合とが手をたずさえて労働者の利益に反対して多くの取引をしてきたことを知っている。最近、ハムステッド工場で、もっともひどい出来事のひとつがおこった。熔鉱炉の第一助手たち—そこの職場では全部が組合員なのだが—が会社のための作業時間調査員にさせられたのだ。会社は、いま、作業時間、遅滞の性質とその責任者などをふくめて、熔鉱炉に関するすべてについて完全かつ精しい記録をもっている。記録は各湯出しの終りに管理者にまわされる。組合は会社のこの計画に完全に同調した。これは労働者を一層しぼり

とることを要求した船も汚ないやり方の一つであることを労働者は知つている。

AFLとCIOの合併（一九四九年のこと）以来、合併が鉄鋼労働者に与えた結果は不幸である。特に一般保安工は全部一時解雇されたままだ。AFLの契約者制度は次のようになつている。つまり、仕事がでてくると、AFLはその仕事がおわるまでに必要な労働時間を示して、その仕事の注文をとる。一度仕事が終ると、契約者と彼の配下はひきあげる。それだけのことなのだ。

ある一週間の生産を計画するにあたつては、会社は、組合との契約にしたがつて、労働者に最低三二時間を保証しなければならない。ところが、この契約者制度によると、正規の労働力のごく僅かな部分しか、この三二時間の保証をうることができない。その結果、多くの労働者が一時解雇される。

労働者の連帯性を支持しない労働者はいない。けれども、よりよい生活を一緒になつて闘いとるということとも、ある一組の労働条件が一グループの労働者におしつけられ、他のグループの労働者には違つた一組の労働条件がおしつけられるということは、別のことである。管理者はいつでも労働者を分裂にみちびくあらゆる可能な方法をこうじる。いまは組合自身かそのなかにいる。

△ 黒人労働者

鉄鋼会社はたとえばIBMの機械のように稼動する圧延設備をすえる計画をいまつくつている。それは、機械にいれた仕様書通りに、一方のはじに素鋼を入れると、他方から完成品となつてでてくるといつた機械である。しかも人間の手はそれに少しもふれないのだ。こんなふうになれば、どんなに多くの労働者が、直接、間接に仕事からはつりだされるか？　きみたちは、それを推定しようとしても、手をつけることさえできないだろう。

黒人労働者は特にひどい打撃をうける。

多くの鉄鋼工場で、黒人は南部でと同じように意地のわるい差別をうけている。事実、ある面では差別はむしろひどい。南部では黒人が占める労働力中の割合は大きいから、南部では熟練を要する職種のなかに彼らをみることは、そう異常というわけではない。しかし北部の多くの工場では、熟練を要する職種のなかに黒人をみることは全くまれなことである。

例えば、ホームステッド工場では、この二年間、熟練を要する職種に昇進した黒人はたつた一人しかいない。しかも、このたつた一つの例で、かれが永久的地位としてこの仕事につくことを実際に確立するまでには、数カ月の月日がながれたのだ。

しかも迫りくるオートメーションは、仕事上の差別待遇を過去にそうだつた以上にひどくするだろう。このようにみるのはひどすぎるとはいえない。

会社は熟練を要する職種に黒人を雇うくらいならば、

街頭の失業者を一掃しようとする。このことはよく知られている。こういうやり方が不当なことは次の事実によつて明らかになる。すなわち、仕事がでてき、それにたいして申し込みがなされると、会社はその人に責任があるかどうかをきめるためにテストするが、テストの結果は会社の秘密なのだ。彼らはテストの際とつた記録を全くあきらかにしなくてもよい。この種のからくりをつかつて、会社は自分たちの気に入つた者を非常に専断的に選びとることができる。このことはたやすく推察できる。

組合幹部は、この種の目かくし工作にたいして、何もしたことがない。こんな状態がつづくかぎり、黒人が期待をもつて偉大な未来をみようとしないとしても、うつとも驚くにはあたらないのだ。

ホームステッドからきた一黒人労働者は次のように話した。「一人の黒人を熟練を要する職種にはめこむという仕事は、政府がある特定の黒人をひろいあげて政府のある高い地位にはめこみ、『ごらんの通り、われわれは差別していない』というようなものだ。このことが証明していることは、彼らがひどい差別をしながら面子を保とうとしていることにすぎない。彼らがこの戦術ということにすぎない。彼らが何を引きだそうとしているのか、をとるとき、彼らが何を引きだそうとしていろのか、ということを知らない黒人や白人労働者は一人もいない」。

そはにたつていた黒人の自動車工が次のようにつけ加えた。「私は私たちのうちのたつた一人が昇級するのをみるのはすきでない。私は全部が昇級するのかみたい。私は之のために組合があると思つた。私は組合のために一生懸命やつてきた。私は給仕だつた。私はおぼえている。わたしは、ある日、新聞の求人欄に軸承配置工募集の広告をみて、この仕事につけるかも知れないと思つた。私は職業紹介所に行つた。彼らは私より前に申しこみをした大せいの人々のリストがあるといつた。リストにある連中はこの仕事につく意志は全くなかつた。というのは、彼らはこの仕事について何も知つていなかつたのだから。しかし、役所の連中は黒人が求職にきたとき、かれをその仕事からしめだすために彼らを利用したのだ。それはたちのよい仕事じやない」。

「組合は何もしなかつた。そして、ほかのことをした。働いているわれわれの全部が同じことを考えてはいない。白人たちのいる職場ではたらいている黒人に、だれにでもよいからきいてみたまえ。彼は白人と同じように考えることができないのだ。われわれはわれわれが同じところにたちどまつているのを知つている。われわれは前途に何らの進歩も望むことはできない。白人はそれができる」。

鉄鋼労働者は彼の物語を続けた。「第二助手の地位があいたとき、それにつくことを拒む沢山の古い気質の人がいる。その地位は契約に従つてあなたが上る昇級水準の一つなのだ。すなわち、流れ作業列中の次の人が白人ならば、その地位につけるのだ」。

9774

「第二助手の仕事はとてもはげしく　殺人的なので、鉄鋼労働者の間では次のようにいわれている。『よいときをすごしたいと思うなら、第二助手の奥さんとでかければよい』」。

△ 失業者の大軍

労働の生産性のすさまじい上昇は、すべての基礎産業の特徴だが、そのもっともよい例証は鉄鋼業だろう。一九五九年の前半期には、鉄鋼業の労働生産性は非常にたかまり、たとえば一九四七年にくらべて、僅か一%の労働者増加で、たっぷり五〇%おおくの鉄鋼トン数を産出することができた。

会社は、たえず仕事の必要時間をかえ割当をふやし、こうして不当なやり方で生産をひきあげるのだ。彼らは生産をスピード・アップすると同時に、二、三人をくびにするが、これはきみたちが一人分または三人分の労働をしなければならないことを意味する。きみたちは、それをしなければならないわけではない。彼らはきみたちにこういう。「きみたちはそれをしなければならないわけではないのだよ」と。だが、もしきみたちがそれをしなければ、きみたちはそこから出てゆかなければならないのだ。

缶詰労働組合は、二月と三月に、ミネソタのいくつかの大食肉会社にたいして手荒いストライキをおこなった。どんなことをして勝ったのか？　五月の終りの同組合の第一二回年次大会は、オートメーションが導入された一九五六年以後、食肉産業においては三万人分の職が失われたと報告した。

鉄鋼労働組合の委員長マクドナルド（最近辞任した）は、一九五九年の終りの数カ月の間に、一万人以上の労働者が鉄鋼工場から排除されたことを認めなければならなかった。

グレート・レイク・スチールの労働者の一人は次のように話していた。鉄鋼工場は自動車工場のようになりはじめた。一年のうち、数カ月のあいだはよい仕事があるが、残りの月には骸骨の仲間いりだと。

現在、全国の鉄鋼生産は、生産能力の僅か四二%におちている。もし生産があがったとしても、失業をへらすには少しの助けにもならず、短い週間だけ働く人たちをほんの少しだけ助けるにすぎないだろう。鉄鋼業の失業者群は、ぼう大な数に成長しつつあるので、八年前にくらべると、鉄鋼都市ピッツバーグは幽霊の町になりつつある。

裁縫労働者、ゴム労働者、電機労働者についても同じだ。印刷工、鉛版工、圧搾工のように絶対オートメ化できないといわれていた熟練を要する職種においてさえ、労働者は、自分たちの家の壁、自分たちの生命の上に、オートメーションの毒のある痕跡をみいだし、おそれを感じはじめている。

しかし、炭鉱はど悪いところはどこにもない。オートメーションが導入されてから一〇年たつた今日、まえには四二五人がはたらいていたある炭鉱で、今日残つてはたらいているのは僅かに一一〇人である。

事態はウエスト・ヴァージニアーそこでは一一万四〇〇〇人のうち僅かに四万人の坑夫が残されているにすぎない—ではひどく悪い。だから、彼らはもはや事実をかくすことはできない。母親たちは子供をやしなうために売春に転じなければならなくなつている、と報道者たちは今日いまおそるべき報告をしている。子供たちは栄養失調からくるよくれた顔をしているし、クル病の徴候さえも示し始めている。また、結核の徴候も発展しはじめている。

これは一九三〇年の不況時ではない。これはアフリカのような低開発大陸でのことではない。これは、大量生産制下の大企業が利潤と生産との新記録を報じつつある一九六〇年の合衆国でのことなのだ。

そこで、ぼくは、炭鉱の状態をえがくために『コール・ページ』を編集している炭坑夫にきいてみた。

9776

四、炭坑で

オートメーションの破壊的結果は、石炭業では、どの産業よりもながく感じられた。連続穿炭機の導入が始まつた一九四九—五〇年に、炭坑と坑夫の歴史は意味深い変化をうけはじめた。

最も明らかな結果のひとつは雇用炭坑夫数の減少だつた。かれらは一九五〇年の約四五万から今日の約一七万五〇〇〇人となつた。このめまいがするような減少はオートメーションの残忍な一面の証拠である。だが、それは炭坑労働にたいする影響を十分には説明することができない。経営者は、まだ働いている坑夫たちから最後の一オンスの労働力をもしぼりたそうとして連続穿炭機を導入する。

△ オートメーション以前

炭坑業は、せいぜい、この国の最も危険な産業の一つとしていつも知られてきた。帰宅を確信して坑口を下りていつた坑夫は一人もいなかつた。彼は帰つてこなかつた坑夫を余りにも多くみてきた。落石でおしつぶされた男達の掘り出し、機械でつぶされた男たちの搬出、炭塵またはガス爆発でくだかれたかつては人間であつた男たちの肉体の多くの破片集めを、彼は手つだつてきた。

労働条件ほど重要なものは何一つないという教育を彼は炭坑でえた。というのは、炭坑ほど労働条件が生死の問題に深くかかわるところはどこにもないから。坑夫にとつては、何よりも大事なのは人間である。あるいはもつと明白には彼の幸福である。

労働条件は炭坑の在来の方法でも十分悪かつた。そこでは労働は循環的に遂行された。すなわち、それぞれ特有の仕事をもつ人達の数班があつた。材木工たちは、坑室にはいつてゆき、負荷過重の岩石または板石層の落盤を防ぐために、木材または鉄棒で支柱づけして切端の安全を守る。それから、穿岩工班は坑室に行き切端に深さ九フィートの穴の列を穿岩する。彼らの後には石炭に発破をかける発破工班がつづく。その後には、はらはらになつた石炭をひろいあげ炭車につみこむ採炭工が続いた。この循環は繰りかえされた。人々は、一般に七人で一班をつくり、坑口をおりていつた。

こういう状態の下では、ボスにとつて一ときに全部を監視することは不可能だつた。もし班が注意深くすれば、

数分間の休息をとる機会がえられた。きみたちが「休息」しているとき、ボスはなにか別の仕事をさせようときみたちを採すとしよう。その場合きみたちが逃げだすことは余り難しいことではないだろう。しかも、この組織は一つの班で使用される機械の単位に左右されるので、一班はどこでも十三人から十七人を必要とした。

△ 連続穿炭機は人殺し

だが、連続穿炭機とともに、こうした事情は悉く一変した。この機械には穿炭機械、穿孔機械、集荷機械などの多様な機能がくみこまれており、発破工の労働を変えた。

連続穿炭機の「あたま」の上を旋転する回転キリは、これもやはり「あたま」のなかにあるコンベヤーで集められる石炭を細かくする。このコンベヤーは石炭をもうひとつのコンベヤーにリレーする。すると、あとのコンベヤーは、その石炭を炭車におろす。炭車はそれを荷下し地点まではこぶ。荷下し地点で、石炭は、あついゴムのコンベヤーにのせられ後者はまつている石炭列車のところへはこぶ。すると、この汽車は最終処理のため外部の需要家のところへむかつてレールをはしる。

これらは単純な作業機構だ。だが、労働者に与える影響は単純以外のなにかなのだ。

まえには十三人から十七人の労働者が、一班にやとわれていた。いまは五人である。すなわち、一人の機械運転者、連続穿炭機の両側にある穿孔機械を操作する二人の穿孔工、そして二人の炭車係りだ。

炭坑の伝統的なやり方の下では、循環のなかに組み込まれていた場合、坑夫は休憩の機会をえたし、ボスのキラキラと光るまなこもさけられた。

連続穿炭機の下では、そんな一息つくまはない。ボスは機械が稼動している点にいてそこにいる各人を一日中監視することができる。そして彼は実際そうやつている。

ボスの視界からでられるのは炭車係りだけだ。彼は積み下し点までゆく。しかし、かれも、いいかたによつては、「視界」の外にいるわけではない。

ボスは時間をきめて動くことができる。炭車係りが荷積機械に帰つてくるのがおそければ、ボスはすぐにこの進行を妨げたものは何かということをチエックするために出かけていく。

炭車係りについてのこのチエックは、他の労働者に息抜きのひまを与えない。何故ならば、ボスは彼が去ると直ちに機械の位置を記録しておき、かれがきみたちの首の下で働をしていたあいだうごかすべき距離だけきみたちが機械を動かしていなければ、彼は帰つてからそのわけを知らうとするからだ。

これとは違うもう一つのことは、きみたち全部が一個所にとじこめられているということだ。在来の方法では、きみたちは動きまわり、喋をのばし、また話をすること

も出来た。連続穿炭機ではそうはいかない。きみたちはその機械にへばりついており、そこにずっと止っているのだ。

これらの人殺し機械で働いている者にのしかかってくる圧力を理解できる人は一人もいない。絶対的に一人もいない。何故なら、それらの機械は人殺し機械であり、しかも、一つのやり方で人殺しするのではなく、もっと多くのやり方で人殺しをするからなのだ。

△ 炭壁から炭壁まで、そして切端まで

一九四九年、技術者連が連続穿炭機の実験的模型を開発したとき、彼らはこの機械はまさにその名が示す通りに—つまり連続的に—稼動するように構成されていると述べた。しかし、かれらは、これらの機械で働く人たちをやすませるような対策をとらなければならないということをも注意した。なぜなら、この機械のペースは人間が耐えるには余りにもきつすぎるからだ。

その時以来、この機械を完成するためには、いろいろの措置が重ねられてきたが、人間をやすませるようにするためにとられた措置は一つもなかった。

連続穿炭機をつかうと、それがすすむにつれて、石炭は炭層の表面からけずりとられ、積下し点までゆく炭車へはこばれる、とまえにはいわれた。このやりかたが暫らくの間おこなわれたが、炭車を積下し点まで走らせすぐに機械のところまで引返してくるようにしても—そして機械の活動にあわせるために二、三台の炭車をつかっても—炭車の活動は機械の活動にどうしても追いつけないことがすぐ分った。

次にとられた処置は、連続穿炭機の背後に伝統的な集荷機械を採用することだった。つまり、連続穿炭機は炭車を待たなくてもよく、石炭を後方に投げ続ければよいのだ。炭車の値かの遅延に影響されるのは集荷機械だけだろう。集荷機械は、炭車が積下し地点から急いでもどってくると、それに石炭をつめこむはよいわけである。

このことは一般的には何を意味するのか？ —石炭は連続穿炭機の背後で炭壁という炭壁から切端まで山積されるということだ。「連続穿炭機」で働いている労働者は、前面には石炭の堅い表面、後方には石炭の大きな山で、事実上墓にいれられたようなものだ。

「連続穿炭機」のうえには約六個のモーターがあって非常な高熱をだしている。そのために、それにつきそっているどの労働者も、毎秒からだ中の毛穴からびっしょり汗を出している。

△ 炭塵、生命にかかわる炭塵

この強度の高熱にくわえるに炭塵だ。—連続穿炭機のあたまの上にある粉砕用バイトが堅い岩層の表面をあれ狂うと、炭塵がでる。それは空中に渦まいて、眼・耳・

鼻をふさぎ、露出した身体のあらゆる部分に厚い膜となつてくつつき、外衣に層となつて降つてくる。

しかしこれがすべてではない。というのは、そこには他の種類の炭塵もあるからだ。落盤を防ぐための結束用止め金具を打ちこむためには、この機械の両側から切端まで切削しなければならないが、このことからも炭塵がでる。この炭塵は生命にかかわる。これは珪素を生ずる負荷過重防止のための天井への穿孔からでてくる珪素炭塵である。

こんな機械のうえに、さらに労働のペースという問題がまだある。彼らはこの機械に連続という名をつけたが、これはうまい名だ。この機械の運転作業員は絶えずレバーを操縦する。—「あたま」を内外上下に、そしてくりかえしくりかえし内外上下にうごかし、同時に、高く低く、また横に、ものすごい音をたててうごかす。一日中ずうつと。

それから機械が前進するにつれ止め金具をうちこむ用意をしている穿孔機がある。機械があたまを上下させるために数分間とまると、彼らは急いでドリルを動水学上定められたドリル打ちこみ点に投げ、切端に穴をうがち、ドリルをひつこめ、止め金具をはめこみ—そして次の動作を用意する。

これに加えて作業員のそばにいるピンナーは、爆発を防ぐために石炭から遊離させられた生命にかかわるメタンガスを扇風機の人工的空気で追いだすために、カンバスをつるさなくてはならない。

「連続穿炭機」につきそつてはたらいている労働者の背後には石炭が積みあげられ、空気の自由な流動はなくなり、遊離されたガスは追いだされるかわりに累積される。モーターのどれか一つから、あるいは穿孔用パイトから、火花がでると—硫黄の部分にふつかる、火花がでる—この機械につきそつてはたらいている労働者がとじこめられている区域は、爆発する、しやく熱の、肉を精錬する、身をやく地獄にかわる。この事実を証明する多くの墓石がある。

次のことは記録しておいてよい事実だ。鉱山監督官が検査したいくつかの例では、連続穿炭機が炭壁にあんまり猛烈な勢いで前進するので、換気装置は累積されたガスにまじつている爆発物を追いだすことができない、というのだ。

△ 賃金と失業

全国炭坑夫労働組合（UMW）と炭鉱主との間に新しい契約が結ばれる毎に、炭坑夫のとる高賃金について、新聞は大きな叫び声をあげる。二年前に交渉されたいちばん最近の賃金引上げで、炭坑夫は一日約二四ドルとつている。

だが、「たかい賃金をとる」炭坑夫についての真実の話は、炭坑夫は一年にいくらとるかというところに光を

9780

あてて観察しなければならない。

年間二〇〇時間も働く炭坑夫はそう多くはなく、彼らの大多数はそれ以下である。一週間三日の労働が多くの炭坑で最も普通である。

炭坑夫が運よく年間二〇〇時間労働したとしても、年間総額で四八〇〇ドルという「おとぎ話のような」額にすぎない。一週間三日労働する平均的労働者は年間の総所得は税引前で三七四四ドルだ。多くの炭坑夫は五～六人の子供をもつているが、これでは生きてゆくのに絶対必要な支払に応することーにづかしくない生活水準をあたえることはしばらくおくとしてーは事実上不可能である。

石炭部門のほう大な失業の事実は、今では古い話である。それはあらゆるところで公けになつてきた。

けれども、何千という労働者が完全に失業しているのに、連続窄炭機について働く人達が、一日二～三時間の残業を余儀なくされているという事実はそれほど知られていない。

その一例として、現在連続窄炭機たけをもつているオートメ化された炭坑では、労働者の実に三分の一が、次に就労する班のためにその機械を整備するため残業を強制されている。

連続窄炭機がはじめて導入されるまえ、つまり五年前には、この炭坑には三八五人の労働者がいた。今は一一二人しかいない。しかも、こんな減少は連続窄炭機をもつ炭坑のほぼ平均的なものである。何千という炭坑が、連続窄炭機を使用する炭坑と競争できなくて、完全に閉鎖されてきた。これが炭坑地帯にたによりも重くのしかかつている失業の原因である。ぼくがこの稿の最初の部分で指摘した失業者の荒廃的な数を、ぼくはここで再び繰りかえそう。すなわち、一九五〇年、「連続窄炭機」以前には、四五分の坑夫がいた。今は一七万五〇〇〇人だ。

△ オートメーションは先任権を一掃

先任権の制度をもたないということも石炭産業の大悲劇の一つである。なぜなら、UMWはアメリカにおける最古の組合の一つであるが、炭坑夫は包括的な先任権制度をもつたことがないのだから。彼らは今日までそれをもつたことが一度もなかつた。

一九五二年の交渉で最後に契約にふくめられた分類に従うと、先任権制度は、一九五一年の西ヴァジニア州北部のはけしい山猫ストライキの結果うまれた。このとき、コンソリデイション石炭会社は多年の先任権をもつ人々を一時解雇しようとし、はるかにみじかい先任権をもつ労働者をのこしておこうとした。このストライキは会社に反対するのと同じ位組合にも反対したものだつた。その理由は、組合本部の代表は人を派して、ストライキ中の一三組合の除名へのおどしをふくめて、文献にあるあ

らゆるぎまんを使つて、労働者を仕事に煽えすようにしたからだ。こうしたやり方に怒りを発した多くの労働者は、本部からきた連中を会場からほつぽりだし、UMWの当時の委員長ジョン・L ルイスと当時の同会社の社長ジョージ・ラヴの間で妥協にもとずいて結ばれていた先任権制に関する協定を破棄し、石炭産業にストを拡大することに投票した。この協定は翌年全国契約に包括された。だが、先任権をもつ坑夫はまだ僅かだ。

しかし、連続窄炭機が導入されるとともに、新しい級別がなされ、古い級別は破棄された。先任権制度は、会社がやがて明らかにしたように、とるに足らぬものだつた。なぜなら、契約のもう一つの規定―炭坑管理者は労働者たちに命令する権力をもつという規定―と結びついた級別の先任権は、管理者に自由な休暇をあたえたからだ。

炭坑に入つて二、三カ月というみじかい先任権をもつわかい坑夫は仕事にとどめられ、坑内二五年という先任権の長い人々が一時無届された。先任権をもつ労働者の保護のこの切りかえしにたいして、組合はまつたく何の規定をもつくつていなかつた。そして今日まで何んの規定もない。

△ ルイスの讃歌をうたわぬ人々

ルイスがUMWの委員長をやめた今年、彼は炭坑管理者および炭坑には関係ない全国の管理者から、偉大な労働者の政治家としてまた炭坑機械化にたいする支持者としてはめたたえられた。

彼の政策に対して讃歌をうたわない人々は、ペンシルヴァニア、ウエスト・ヴァジニア、テネシー、ヴァジニア、ケンタッキイ、アラバマその他の州、すなわち、今日文字通り飢餓にひんしている場所の数多くの前坑夫とその家族である。

高度に機械化された炭坑の高生産の一方では、より小さい炭坑は閉鎖に直面している。これらの小さい炭坑は一度も組合に規定された賃金を払つたことはない。だが、最近のUMWの契約が一日一人当り一一トン、連続窄炭機使用の炭坑では一日一人当り六〇～七〇トンを基礎にして結ばれたとき、小さい炭坑は安売りし仕事から閉めだされるほかない状態になつた。このことを理解するのは難しいことではない。石炭生産州はどこでも同じだが、これはケンタッキイ州ハーランの話の一部である。それらの地帯には、自分自身と家族のために困窮状態からの出口を絶望的に求めている坑夫だつた人々が満ちあふれている。

少くとも組合に関する限り、会社が新しい運営を実施し、労働者がそれに反対したとき、会社は簡単に「苦情をとどけろ」という。そこで労働者は苦情を申し出たが、会社はいうばかりで何もしない。もつとも苦情は審理される。だが苦情がとどけの段階をこえることはめつたに

ない。会社の行使する新方針に反対する労働者の保護に関する限り、組合はおとぎ話になりつつある。

△ 労働者は抵抗する

ときどき反抗の問題が起るに違いない。このことは明らかだ。—そして実際に反抗はおこつている。機械への切換えが行われたとき、こうした機械を運転させるために、会社がえらびだした「会社側」の人々がたくさんいる間は、労働者救済金を求めにおいやるような、こうした条件の下で働かねばならぬわけは全くない。

炭坑で機械化と同じ位古くから炭坑夫がつかつている表現がある。それは簡単にいうと次の通りだ。—「いつでもすきなときに機械をぶちこわせないような男は、機械には用事はない」。

この表現のうらには知恵の世界がある。しかもこの知恵は、連続式炭機を採用している炭坑では、以前には決してみられぬ程に実証されてさている。

第一に、この機械をしばらく操作した人ぐらいこの機械について知つている人はたれもいない。この機械はこれはできるがあれはできないということも、かれが一番よく知つている。だが彼は、ボスが監視しているのだから、あんまりあからさまにこわすことはできない。

だが彼は、モーターの音ひとつで彼には操作できるがボスには知ることのできぬ弱点があることに気づく。なぜならボスはこの機械を意識的に操作していないので、何かがたくまれたことを看破することができないから。そして彼がやるのはまさにこの領域である。

丁度よいときに、彼は、ほんの少しばかり強くレヴァを押す。モーターがやける。大修理が要求される。それとも僅かな修理でたりるものかも知れぬ。だが、これは、たえまのない殺人的な苦役から一息つけることを意味する。

△ 非公式の委員会

炭坑夫組合に対して投げつけられたタフト・ハートレー法のために、一九四九～五〇年には長い苦しいストライキがおこなわれたが、このストライキにさいしては、炭坑夫組合やルイスはストライキにたいして是認や指導を公然とあたえることが出来なかつた。

このためストライキはまつたく労働者の手中にゆだねられた。その結果、ひろい炭田地域の炭坑夫のあいだには強い友情がうまれた。非公式の委員会がストライキ活動を指導するために結成された。ストライキ活動のなかには、ストライキを続けるための金銭や食料や衣類の援助を労働運動全体に懇請することもふくまれていた。ストライキは勝利に帰した。

契約には先任権は全く規定されていなかつたので、連続式炭機の導入が増加するにつれて、炭坑夫は無差別に

一時的解雇にされた。そのとき、これらの非公式委員会は再び拡がつた。組合官僚制が職場のスピード・アップになやまされている人々や一時解雇されている人々にたいして何もしなかつたのだから、そうなることは自然の帰結だつた。

ウエスト・ヴアジニアでも、ペンシルヴアニアでも、多くの炭坑夫をもつひろい炭田地域が先任権規定をもとめてストライキにはいつた。これらのストライキを組織し実行したのは、組合と会社の両方に反対するこれらの非公式委員会だつたのだ。

これらの非公式委員会は、同一会社が所有している違つた場所にある炭坑ではたらいている労働者のあいだでは特に密接だつた。

このような密接な協力の例は、コンソリデーション石炭会社のためにはたらいている坑夫とほかの産業部門の企業の下請となつている炭坑の労働者とのあいだにもみられた。前者はこの国でもつとも大きい商業的石炭売出会社であり、いつぽう、下請炭坑は、U・Sスチール、ジオーンズ・アンド・ローリンのような鉄鋼会社に所有され、これらの会社の鉄鋼生産のために自分たちの石炭を供給している。

例えば、一九五六年にウエスト・ヴアジニアで、コンソリイデーション石炭会社の一炭坑は、止め金具をうちこむための機械にたつた一人の労働者をつける政策をとろうとした。この機械が危険なことはどの炭坑夫も知つている。一つの炭坑がストライキにはいり、会社の他の炭坑に代表をおくり、自分たちのところでおこつていることを炭坑夫たちに知らそうとした。その結果、これらの非公式委員会の活動はもう一度活発になつた。このときには、ウエスト・ヴアジニア州北部のすべての炭坑と石炭運送トラックとがとまつた。そしてこの地方の石炭生産を完全にまひさせた。

△ 反抗は続いている

石炭会社と炭坑夫組合の双方の反対に直面して、ふたたび、労働者は団結を保持した。そして、ルイスと当時のコンソリデーション会社の社長ジョージ・ラヴに、同会社がやろうとしていた政策をやめる協定を結ぶように強制した。これらの炭坑夫はいまでもこのやり方で活動している。—これは会社と組合の無為政策との両方に対して自己を防衛するための唯一の武器である。しかし、もつと重要なことは、炭坑夫がこの型の非公式な組織に大きな可能性をみつつあることだ。このような組織は、労働者が自分たちの意見を話しそれにしたがつて行動する大衆集会をとおして活動している。そこには大衆による統制がある。彼らは彼らが自己自身のために行動するときはじめて最高のものが達成されたということを知つている。

これらは大規模なストライキだつたが、炭坑夫たちは

9784

この地方の問題についても絶えず反抗し闘争した。一九五六年の一月一日から五月六日までの五カ月間に、一七〇を下らない山猫ストライキがあつた。

連続窄炭機が導入されて以来、労働条件について文字どおり何千という山猫ストライキがあつた。連続窄炭機が導入されて以来、これらの坑夫は「人間は一体どんな種類の労働を遂行すべきか」と問い続けてきた。連続窄炭機が導入されて以来、これらの炭坑夫は彼ら自身の思考によつて彼ら自身の問いに答えている。連続窄炭機が導入されて以来、彼らは彼自身とルイスとの間に一線をかくした。そして、組合が妥成しようとしまいと、自分たち自身の活動をはじめている。このことこそ山猫ストライキが拡つた理由なのだ。このことこそ非公式委員会ができた理由なのだ。彼らは、考えと行動を統一する方法を工夫することによつて、彼ら自身の疑問に答えつつある。

五、出口はどこか？

ぼくはこの一編を、電機工業の生産労働者で『ニューズ・アンド・レターズ』誌に「労働日」というコラムを担当しているアンジェラ・テラーにわたした。ぼくは彼女に『オートメーションと闘う労働者』についての論評をたのみ、そしてオートメーション問題について何らかの結論を引きだすことをたのんだ。ここに彼女の答がある。

△ 何故人々はそう考えるのだろうか？

オートメーションは、人々が新しい社会で働きたいと思っている方法だと、なぜ人々は考えるのだろうか？ 労働者が全事態を制御しているだろうと、なぜ人々はいえるのだろうか？ 機械を「制御すること」は労働を軽減するのだろうか？ あるいは、労働のくるしさをすくなくするのだろうか？

「事実に直面しよう。オートメーションはそこにある」こんな考え方で自分の思考をはじめる技師は、私には、自分の思考を閉ざしているように思える。労働者が、オートメーションにはどんな長所があり自分たちはそれを保持したいと欲しているというものとしよう。かつて「恐怖の家」だった工場が今でも私たちの生命を支配しているかぎり、誰が支配しているのかという問題は事態をかえる—ほんとうに根本からかえる—とは思われない。

例えば、人々がどういうふうに働くだろうかといった問題には何がおこっているのだろうか？ 労働は何かスッカリちがったものにならないのだろうか？ もし労働が何かちがったものになる—生活自身と結合して—とすれば、それは人々を自分の機能の一部分としてつかっているオートメーションと同じものではありえない。労働者が最初のねじとナットをつくったかどうか、そして何かを地上からたてたかどうかということは、私にはどうでもよい。労働者が最初から参加すると、かれはそれに興味をおぼえ能力をおぼえるようになる、というふうには私は信じない。

その機械にはいってくる科学を知るということは、その機械を人々によりたえやすく操作させるということよりも、ずっとたくさんの意味をもっていなければならない。

機械は人間にかわる。機械は同じ単調な作業を何度も何度もくりかえす。だから、オートメ以前におおくの人

人がやっていた・たいくつな・オートメ化されていない流れ作業列中の作　と、少数の人々、または一人がものすごいスピード・　ップのもとでやっている作業と、どうちがうのだろうか。

△ ヨーロッパ人、ロシア人、アフリカ人

労働者のオートメーションに対する闘いは誰れでも知っている物語である。全国の自動車、鉄鋼、石炭、ゴム、その他すべての産業の労働者は、私がみとめたように、それをみとめるだろう。

それは、すべての境界をこえ、また海をこえ大陸をこえて広がっている物語なのだ。

ヨーロッパ人労働者またはロシア人労働者がアメリカ人労働者と同じぐらいにはまだオートメーションに直面していないかどうか、または、アフリカ人労働者がただ言葉としてしかオートメーションを知らないかどうか—こういったことはどうでもよい。もし彼らが私たちには既に経験ずみの惨状から脱出しようとするなら、彼らの自由のための闘争はちがった種類の労働をぜんぶふくまねばならない。彼らはすべてこのことを認めるだろう。私にはそう思われる。それは最も基本的な問題を提起する。他のすべての問題はこの問題の一部であり一片である。人類が今日までに到達した最高の技術的発展であるオートメーションは、労働者階級の一部を全体性から切断してしまった。

一九五〇～五年の間に、資本家たちは、あともどりできない地点に到達した。オートメーションの導入とともに、彼らは自からの死滅に拍車をかけてきた。ずっと前にマルクスが書いたことが今までになく具体化してきている。資本家的生産の障害は資本自身である。資本主義はそれ自体の墓掘り人を生産する。

一九六〇年には、脱出口を探し求めている労働者階級は新しい社会の創造に非常に近づいている。彼らはロウソクの灯を消しさえすればよい。死の鐘の音はすでになりわたっている。

このパンフレットは、オートメーションがアメリカの労働者階級にもたらした悲惨についてのべているが、それ以上に多くのものにもふれている。労働者のとるべき道も、このパンフレットのどこかでふれている。労働者は、このパンフレットを読んで、そこにかいてあることの二倍を感得するだろう。しかも、今まで知らなかった何かを知るだろう。

△ 労働者は自分たちの思想を組織しつつある

「革命は機が熟した進化である」といわれてきた。私には進化はいま変革の時点に到達したように思える。そ

の時点では、人々は水爆やスプートニックや「人類の先史」の一部分であるその他のものを捨てるやり方で前進することができる。

一九六〇年の世界の青年は、ハンガリー革命とその労働者評議会を背景にして、銃剣に直面しながら、そして自分たちの声が人々にきかれることを要求しながら、マルクス主義的人間主義を実行にうつしつつある。

新しい人間があらわれるだろう。そして、新しい社会があらわれるだろう。

私は新しい社会を私の手のなかにほとんどにぎることができるように感じる。あるいは、それを味うことができるように感じる。私は新しい社会が非常に近いことを信じる。

このパンフレットは新しい社会の一部なのだ。私は他の何よりもこのパンフレットのなかで新しい社会を感じる。新しい社会は私たちがこれまでやってきたすべての仕事—『ニーズ・アンド・レターズ』誌や、『マルクス主義と自由』（邦訳『疎外と革命』）や、アフリカとアジアの革命についてのパンフレット（『ラーヤ哲学論文集』（前進社刊）所収、「民族主義・共産主義・マルクス主義的人間主義ならびにアジア・アフリカ革命」）—をつなぐだろう。このパンフレットは、私たちがしてきたすべてのことを、自ら考え、自ら感じる労働者階級に、直接にむすびつけるだろう。

労働者の組織の形態はすべてかれらの思考のなかにある。現在わたしはそうかんがえている。彼らはその思考を組織しつつあるのだ。

△ 労働者の心対労働官僚の抑圧

労働者の行動がCIOにむかつて爆発した—だれも予期しなかつたことだが—とき、彼らは、自分たちのまえにたちはだかるものとして、今日の組合官僚と同じものをもつていただろうか？　今日ではどんな形態のものであるにしろ、労働者が組織—失業者協議会、アメリカ黒人労働者協議会、大衆評議会など—をつくろうとすると、組合官僚はこれを抑圧するように思われる。

だが、彼らがにぎることができないものが一つある。それは労働者の心だ。労働者は彼らの思想を組織しつつある。これこそ私が私たちが労働者の身近かにいると感じる理由なのだ。世界はこの一年にひとようにはやく動いた。彼らはどんな哲学的な概念も理解することができる点に、そしてこのような概念を彼らが知つていることと直接的に結びつけることができる点に到着したと、私は思う。

× × ×

アンジエラ・チラーノ：は、ここで、資本家的生産のめちやくちやぶりからのがれるためのあらゆる種類の新しい道をひらいた。しかし、ぼくはすべての点でかの女に同意するだけではない。工場が残る限り、生産の統制

は労働をほとんど変化させない、という意見には、ぼくは不同意である。もし労働者が管理したら、工場は「恐怖の家」ではなくなるだろう。

△ 労働者による生産管理

新しい社会がこれまでのちがつた生産方法を創造することには疑問の余地がない。しかし、その新しい社会への道は労働条件を変える—それは先ず第一に生産の統制を意味するが—以外の道からは始めることができない。

労働者の生産管理は、彼ら自身が何を生産するか、どの位生産するか、彼らの働く条件をどんなものにするかということを決定することを意味する。彼らは一切の問題を決定する。一たん何が彼ら全部にとつて最善であるかを労働者の多数がきめれば、全作業はその決定にしたがつてすすめられる。そこには「お気に入り」も会社側の男も一人もいない。労働運動のべてん師どもは、生産管理とは怠け者が人殺しを片づけることを意味するにすぎないといおうとしている。だが、彼らは労働者について第一に重要なことを、彼らの間の連帯精神を、彼らがひとたび資本家のためにでなく彼ら自身のために働きはじめると、彼らの間にうまれるこの連帯精神をしらない。ぼくたちが最初にCIOを組織したときには、指導者でさえ社会変革の必要を説つていた。現在では、彼らは何も知らない。流れ作業の非人間的なスピードをどう管理するかについてさえ知らない。

流れ作業のスピードの管理なんか、組合幹部でさえやれるはずのことなのだ。初期のCIOはそれをした。そのころは、ぼくたちは仕事についていうべきことをもつていた。第二次世界大戦とともに、CIOの指導者たちは計画の点では資本家の計画家を追いこし始めた。このとき彼らは完全に変つたのだ。

△ 組合の指導者は洗脳されている

一九四七～九年、比較的年とつた労働者と新しくかえつてきた復員軍人の「低い労働生産性」について管理者がわめきたてたときに、すべては始まつたのだ。政府は生産性についての会議を召集した。組合の指導者たちは戦争中政府の会議に出席した—その時彼らはわれわれにストライキ禁止の警いというかせをはめた—ように、これらの会議に出席した。

組合官僚だけが「愛国者」でなかつたことをつけ加えるべきだろう。共産党員は、労働者の憎しみをかいながら、この種の「愛国主義」の点では組合官僚を上まわつていた。

外敵に対する科学と政府との散弾銃をつけた結婚式から原子爆弾が生れたように、この国の労働者階級に対する科学と産業の同盟からオートメーションが生れた。ぼくにはそう思える。そして、戦争が労働運動の指導者を

官僚に転化させたように、オートメーションは彼らに洗脳を施した。

政府や会社とともに、労働官僚は、オートメーションと「進歩」とを同一視しはじめた。そして、オートメーションがどうつかわれるかということについて一度も疑問をもたなかつた。

一九四六年に議会が制定した「完全雇傭法」を組合指導者も政府も全く忘れ去つているのをみて、大企業は非常に幸福だつた。一九四六年には、労働者はもうひとつの大不況に直面するために世界戦争をたたかつたのではない、と宣言したのだが。オートメーションは草案の段階から工場での実施の段階へ移つた。

労働官僚を洗脳するのに拷問室はいらなかつた。彼らは「地方的苦情」や労働者の具体的な要求をさけるための眼かくしをおろすのにあまりにも忙しいので、「進歩」—それは資本主義の組織の維持を助ける—についての抽象的な概念のぎせい者にあまりにもよろこんでなるのだ。

ルーサーは「オートメーションの挑戦」に対抗するために、労働者の再訓練の必要について語る。ぼくも再訓練をうけたのだつた。ぼくはいまオートメーション機械で働いている。それはどんな種類の再訓練なのか。以前は、ぼくは一度もこんなにひどい条件で働いたことはない。ルーサーのいう再訓練の意味が、何もしないでただボタンを押し、そうすることでよい賃金をうるという、一種の技術者になることでないことは確かだ。そういう仕事はごく少数だ。そして、ぼくたちが十分オートメ化されるにつれて、こういつた仕事はいつそう必要でなくなるだろう。

ぼくたちは五週間の一時解雇の後、仕事に復帰したところだ。失業、どの労働者も、うちで退屈し、職場に帰りたいと思つたと話した。それは、彼らがカネを必要とし支払に迫まられそためばかりでなく、働いていたいと思つたためなのだ。

その数日後、これらの同じ労働者は次のようにいつていた。「ぼくは、こんな生産、職長のキイキイ声、こんな工場規律につきまとわれているこの工場にこないで、別に生活をまかなえる何んらかの方法があつたらなあと思う。この工場は悲惨だ。きみたちは人間ではない。もつと生産をあげるにはどうすべきかということ以外には、何をする自由もなく、考える自由すらない、ときみたちは感じるだろう」。

もしもルーサーやその他のAFL＝CIO指導者やトラックドライバー（トラック運転士組合の委員長）が、調子は高いけれどもまことに空虚な頂上型のオシヤベリをすててて工場へ—働くために—やつてくるなら、それははるかによいことだろう。彼らが、オートメーションのもとでの生産的労働はもちろんのこと、何か労働らしいものを体験したときから、全く長い才月が流れ去つた。もし彼らが工場で本当に労働していたなら、彼らはおそらく洗脳されることはできなかつたろう。労働者がこれらの巨大

な機械を操作しなければならないときに、反抗は自然にでてくる。しかし、きみたちが労働組合会館の象牙の塔にふんぞりかえつて、経営者あるいはワシントンの政府と協議するためにだけしかそこから外出しないなら、洗脳は自然にできる。

選挙の時―ぼくのいうのは組合の選挙のことだ―ルーサーはオートメーションで失業者の群に投げこまれた幾百万の労働者になにをなすべきかにふれて、「利潤の分配」や週労働時間の短縮などの立派な綱領をもつて登場した。だが、彼は団体交渉の卓へ行く途中で、これらの綱領を落してしまつた。

彼が交渉の席を去つて、契約書を労働者にむかつてうちふつたときまでに、彼はすでに労働条件について一言すべき労働者の権利をすつかりすてて契約書にサインしてしまつた。こうした労働条件は、まさに「たやすく組合支部によつて解決されうる支部の苦情」ということになる。これらの苦情から組合支部でストライキがおきたなる。これらの苦情から組合支部でストライキがおきた場合、組合本部は、全国的な協約に基づいて労働者に仕事に帰るように、再び交渉してくる。日毎に、週毎に、月毎に、年毎に、組合支部の苦情が積み重ねられるにつれ、それらの苦情は書類綴りの中に綴りこまれてしまつた―「全国的な団体協約のときがくるまで」。とはいえ団体協約の時には、それらは「地方支部の苦情」となつた。組合指導者がこうした一循環したのち労働者に与えたものは、労働者が会社から得たものと同じものだ。

△ 山猫ストライキと組織づくり

戦時中に行つた政府との協議や、戦後に行つた政府および財界との協議のさいに、組合官僚が施された洗脳に反対するもののように、労働者は、戦時中に彼らが発明したもの―すなわち山猫ストライキ―をもつてたちあらわれた。組合官僚がストライキ禁止の誓いで労働者にかせをはめていたとき、山猫ストライキ以外には労働者にとつて行動すべき方法はなかつたのと全く同じように、いまでは組合官僚自身が、自分たちのために資本家の生産を行う組合契約で労働者にかせをはめつづけているので、労働者にとつてはそれ以外には方法はない。山猫ストライキは、新しい組織、例えば初期のCIOが時代の挑戦に応じて、一九三〇年代におこなつた坐りこみストライキほどのものは、創出しなかつた。しかし、次の一つのことは確かである。すなわち、労働者は間違いなく彼らが何に反対しているかということを示した。つまり、彼らは現在の組合指導部に反対しているのだ。

一九五五年に、UAWの歴史上「初めて」山猫ストライキがひきおこされた。労働者は契約が彼らの承認を求めるために彼らの前に提出される前にこの契約に反対して山猫ストを行つたのだ。一九五六年に、ジョン・L・ルイスはその年の一月から五月までにおこなわれた一七〇の山猫ストライキについてぼやきながら、UMWの大

会で代議員たちは次のように警告した。彼らがあえてこのような状態を続けるならば、組合本部は「諸君を監視する」だろうと。

一九五七年には、クライスラー会社の第二一二支部の平組合員たちは、ここのルーサー主義者に反抗して、少くとも支部の段階で彼らを追放することに成功した。ぼくは平組合員の労働者の話しが『ニューズ・アンド・レターズ』誌に、どのように流しこまれたかを覚えている。ぼくはぼくたちの新聞にのつた論文が、「この新聞は真実を告げている」という注意書をつけて、工場の告知板にはられていたのをみた。これが管理者と組合幹部によつてひきはがされると、労働者たちはメージー（自動車組合の幹部の一人）に反対する諷刺画をはりだした。

労働者の一人はぼくたちのところに次のように書いてきた。「これは、私がこれまでみたうちでは最上の諷刺画で、工場のなかの様子がどうなつており、私たちがどんなに組合幹部の候補者名簿をやぶいてしまえと感じているかを実に正確に示しています」。（『ニューズ・アンド・レターズ』一九五七年四月二日号）工場では、実に多くの労働者が、『ニューズ・アンド・レターズ』誌を、階級闘争のなかでの自分たちの武器だといつているが、まさにその通りだ。

ぼくにとつては、山猫ストをふつことから、いろいろの出来事について徹底的に正しく話しあつたり考えたりすることまで、することは実に沢山あるが、それらのことがすべて、いわゆる理論と組織づくりの本負をかたちづくつている。

あらゆる種類の組織があらわれ始めている。たとえばアメリカ黒人労働者協議会のように上部から組織されたものにしろ、失業者協議会のように下から組織されはしたがのつとられてついにつぶされてしまつたものにしろあるいは、たとえばミシガン州エコーズのグレート・レーク製鋼会社で、山猫ストライキをやつている白人労働者たちにしろ、アメリカ南部の人種隔離を行つているランチ・カウンターで坐りこんでいる黒人学生にしろ、ぼくたちはますます多くの人達が、古い組織は何にもしていないと感じていることを知ることができる。だから、彼らは何ごとかをするために新しい組織をつくりつつあるのだ。

いずれの場合にも、彼らがやつていることは、ひとしく新しい哲学を、新しい人生観を、新しい生活様式を示している。

山猫ストライキの問題を再びとりあげてみよう。それは一つの行動であるとともに一つの態度だつた。オートメーションとは抽象物なんかではない。それは現実なのだ。こうした人生の事実に対しては、二つの相反する階級的な態度が生じている。

(1) 管理者側の態度はつぎのとおりだ。―機械は殆んど自動的に動き、人間は消耗品だ。

(2) 労働者側の態度はつぎのとおりだ。―この機械は

9792

人殺しだ。それは、労働者の半分を職場からほつぱり出し、それが職場にひきとめておく労働者からはおそろしく無慈悲にしぼりとるので、この機械は電気で動いているどころか、まさに労働者自身の神経組織の上で動いているように思える。

こんな場合にはどんな中間的な態度もない。組合官僚は、会社と労働者の中間にとどまつていようとする場合には、あつさりと自分自身の死亡証明書をかきあげてたえずボスのために彼の生産をやつている組合の契約書をたずさえてたちあらわれるのだ。

△ 三〇時間の労働で四〇時間分の支払を

ぼくは綱領の作成者ではない。昔の急進主義者たちはいつも綱領を、—ただし労働者によつて掲げられたものではなく彼ら自身でつくつたスローガンにみちた綱領を書いた。だが、一つのことだけはたしかだ。つまり、労働者たちはより短い労働日を強く望んでいるのだ。彼らはどんな特殊なスローガンにもなんらの幻想をもつていない。多くの労働者はただ「三〇時間の労働で四〇時間分の支払を」というスローガンには賛成している。彼らはこのことが、若干の失業者を復職させる助けになるだろうし、それとともに彼ら自身にもいくらかの休息をあたえるだろうと感じている。

こうした制度は、その下にある資本家の手もとに十分な利潤を残しはするけれども、自分たちは、「三〇時間の労働で四〇時間分の支払を」、決して獲得しないだろうと思つている他の労働者たちがいる。だが、彼らも一日の労働時間ないし一週の労働時間の短縮ならどんな種類のもののためにも闘う用意をしている。

一年間の労働時間はすでにオートメーションによつて短縮されてきた。だが、きみたちが、食うべき食料や、支払うべき家賃や、身の廻り品や、医者の勘定書などにたいして支払う小切手をあたえられた上でクビになるとしたら、きみたちは一体どうするだろうか。ある労働者がいつたように、「オートメーションが導入されていらい、毎年毎年ぼくが一年間に労働する週の数は少なくなつてきている。だから、今日ぼくは次のようにたづねるのだ。—来年は一体どんなふうに始まりどんなふうに終るのだろうか？ ぼくたち—つまりたんにぼくひとりだけでなく、すべての労働者は、一体どうして生きながらえてゆくことになるのだろうか？」

△ 六カ月の労働、六カ月の失業

もし年収を得られるとしたら、ぼくは週に僅か三〇時間働くよりも、年に六カ月職場をはなれている方をとるだろうと、一黒人労働者が語つた。以下が彼の話である。

「一九五三年にぼくの家族とぼくとが休暇をとつて以来、

ぼくは全然休暇をとつていない。そう、そんなことつてあるべきではない。だが、いまぼくがやりたいようにことをはこぶことができるならば、—悪くとらないで下さい—ぼくは働きたいと思う。ぼくは、たとえ何もしないでじつと坐つていることができるとしても、決して満足しないでしよう。もし、ぼくの懐に大金がころがりこんできて働く必要がなくなつたとしたら、ぼくはたぶん気が変になるだろうと思います」。

「だが、ぼくは人は一年に六カ月は、働くべきだと思う。それ以上は結構だが。もし、人が一年に六カ月働くとすれば、できることはたくさんある。そうすれば、きみたちには、できないことをする時間がかなりもてるだろう。現在のように、一週一、二日ではきみたちは職場をはなれてしたいことをすべて、その一、二日につめこんでしなくてはならない」。

「彼は、他の仲間が働いている間に六カ月の休暇をとるだろう。見苦しくない生活ができ、家族を映画につれだしたり、家族がのそむときにはおいしいディナーが食べられるように、十分な賃金が支払われるたろう。そして、家族は、正常な医療をうけられるべきだろう」。

「労働者の家族は、多くのことを考えたりする時間をもつだろう。現在のような具合では、ぼくたちは生活しているのではない。ぼくたちはちようど動物と同じで、生存しているにすぎない—」。

△ たつた二時間の労働時間の短縮

どういうかたちにしろ、より少なく働いてしかも見苦しくない生活ができる賃金をえようという要求は、全労働者の間に非常に強いので、組合官僚でさえ、こうした要求に注意を払い始めた。ルーサーは、一九五八年の団交は労働時間の短縮から始めると約束した。しかし、取替えの名人のルーサーは、組合の年次大会では週労働時間の短縮にスッカリ背中をむけて、労働者のうち誰一人信じていなかつた、「利潤の分配制」要求の決議につつこんでいつた。ルーサーも信じていたのではなかつた。だが、それは、労働者がルーサーにやつてほしいと望むことはしないで、同時に何かやつているようにみせるというやり方だつた。

デエヴイド・マクドナルドは一週二時間の労働時間の短縮という、どつちかといえばささやかな要求をリストにあげはしたが、彼もそれをすてて逃げだしてしまつた。

一九五九年にデエヴイド・マクドナルドが署名した労働契約に対して、全般的に山猫的な行為がひきおこされなかつた唯一の理由は、経営者側ではこれより先すでに鉄鋼組合を完全に粉砕しようとしており、そのため労働者が組合の背後に団結を固めていたせいなのだ。そうした状況のなかでさえ、各地で突風のような山猫ストがひきおこされたものだ。

9794

△失業者、退職者、ならびに労働時間の短縮

労働時間短縮と同様な影響をばくたちに与えている、工場外の焦眉の問題の一つは失業である。戦後の三回の不況時をとおして数回にわたって、失業者たちは組織を始めた。彼らは組合会館で組合の指導者に面会を求めた。最初は彼らはことわられた。組合の幹部にとっては、組合費を支払わない労働者には用はない。失業者は、組合費を支払えない。だから失業者は組合員として数えられないのだ。労働契約は法にも影響をあたえるのだけれど彼は組合の集会に関する通知さえうけとらない。

だから、失業者は組合のホールの外で組織しはじめたのだ。失業者が大勢出現しはじめるやいなや、組合の幹部たちはただちに失業者の声を押しつぶすために動きだした。彼らは失業者に組合のホールをつかわせはじめ、全国的な協議会さえ組織した。失業者が、—あるいは失業問題について現に就業している平組合員の労働者が、いわねばならなかったことに耳をかたむけるかわりに幹部連中は失業者にむかって話り始め、ついで、およそあらゆる類いの上院議員をよんで、失業者にむかって語らせたのだ。

一九五九年の四月八日にワシントンでひらかれた失業者協議会が流産に終ったのも驚くにあたらない。

だが、この協議会に列席した失業者たちが、就業労働者と同様に「三〇時間の労働で四〇時間の支払いを」のボタンをつけていたことがめだっていたのは、蔽いがたい事実だ。この問題については、退職した労働者も同様な行動をとった。選挙の時期がまわってきたものだから退職者たちは失業者たちが昨年きき、さらに今年も再びきくだろうと思われるのと同じほど多くの約束を現にきいている。約束をすることはたやすいが、何ごとかをするためには大衆行動が要求されるのだ。

ぼくは敏後にくりかえしていおう。特定のスローガンが叫はれていようといなかろうと、工場にいようといなかろうと、焦眉の問題は次のとおりだと。

すなわち、(1)支払の減額なしの労働時間の短縮。(2)労働者による生産管理。(3)年間保証賃金保証と同時に、保健手当および退職手当。

△戦争、市民権、黒人

CIOがつくられる以前には、労働者たちは、現在彼ら自身の指導部からうけているような前進途上の妨害をうけたことは全然なかったと、アンヂエラ・テラノはいっているが、彼女の言葉は全く正しい。彼女が労働者は現在彼らの思考を組織しつつあるというとき、ぼくは一〇〇%彼女に同意する。これと同時にあらゆる種類のグループが、—すなわち地位のために争う、組合のかつて

の予選会のようなものではなく、あらゆる種類の討論グループが組合内にひろがつている。ここでは黒人がその先頭にたつている。だが、白人のグループや白人や黒人の混さつたグループもある。

先週ぼくたちが二度目の一時解雇ののち職場にかえつたとき、一人の白人労働者がつぎのようにいつた。「一時解雇の状態でいることはぼくが考えているレジャーじやないが、それはきみに考える時間をあたえてくれる。きみはちようどいま考えはじめたのだが、きみの生活自体はこうして考えることによつてきまるのだ」と。他の労働者は次のようにいつた。「三年間つづけて、オートメーションはぼくたちの労働する週の数をへらした。オートメーションがきみたちに考える時間を与えることはたしかだ。先日、ぼくは、カルフォルニアの一科学者が『誰れが最初の水爆を投下するかということは本当に問題ではない。一度それが投下されればぼくたちは、「全人類の滅亡から僅か三〇分のところに」いるのだ』といつているのを読んだ」。

ついで、一人の黒人がさきの大戦について考え始めた。「ぼくが自分で選べたなら、ぼくが戦争にでかけていただろうなどとは、きみたちは決して考えないだろう。ぼくはぼくの生命を奴らにくれてやりたくはなかつた。奴らがぼくに宣誓させた上で入隊させたとき、ぼくはほとんど仮死状態になつてくずおれるばかりだつた。ぼくは、もう少しで『否』というところだつたのだ」。

「ぼくはこの国について正しい認識をもつていたとはいえなかつた。ぼくは第一級市民として分類されていない。他の国民たちはこの国にやつてきて第一級の市民権を手に入れる。ところで、ぼくたちはこの国で生まれたのだ。母も祖母も—そして祖母は、それ以前に四世代をかそえることができるのだ。それでも、ぼくたちは第一級市民ではないのだ」。

「ぼくはぼく自身をアメリカ人として分類しはしない。ぼくは、ぼく自身をまさに一人の人間として考えてきたにすぎなかつた。ヨーロッパからきた連中は、それ以来アメリカ人に同化されたが、ぼくたちはきびしく隔離されていた。前線にいつたときでさえ隔離されていた。白人と肩をならべて戦い、ともに泥中にねたとしても、復員したときには、隔離されていた」。

「ぼくはどこかほかに住まおうとは思つていない。ぼくはこの国でくらしてゆく方法を知つている。だが、ぼくは生活の条件が一〇〇%改善されることを望んでいる。ぼくの仲間は学生たちが南部でいま立にをしつつあるということを、きみたちに考えさせてくれるだろう」。

△ 青年は就業者も失業者もすべて反逆する

一人の青年労働者は、ぼくたちが、僅か六カ月働き六カ月仕事をはなれることを望んでいると話しあつている

9796

のをもれきいたとき、つぎのようにいつた。

「ぼくは一年中働いたことは一度もない。たえず、ストライキや一時解雇、あるいはその両方によつて労働を中断されてきた。ぼくはこうした労働の中断が青年労働者の共通の経験だと信じるから、こうしたことに言及するのだ」。

「最近の二年間、ぼくは毎年平均六カ月働いた。いまは、他の多くの仲間と同じように、ぼくも仕事がなくて、賃金として小切手をうけとることなしにやつている。つぎには一体何がおこるのかしらん」。

「雇い主たちはいつも老人の経験でもつて青年を求めているように思われる。求人広告はそんな具合にかかれている。これは、明らかに多くの青年たちに対する挑戦だ。一人の知人は、彼がかつてうまく入りこむ方法について話してはいたが、やりぬくことができなかつた仕事に従事して、そこから平均しておよそ一週に一日の賃金をもらつている。それは、全くやりにくく、生計を維持してゆくには骨のおれる方法だ」。

△ もし彼が口笛をふき指さししたら

昔、ぼくの働いている部門で仕事のテンポがおそかつたころ、ぼくは、手押車をうけとつて、そこらのがらくたを片付けることを助けろといわれた。手押車の押手の大部分は若者だつた。仕事と親方の性質をのみこむために、ぼくが話しかけた若者はおよそ一七才位だつた。

彼は「親方からできるだけ遠く離れていろ。なぜなら親方は、きみに、片付けたいとおもつているものをいいつけるにちがいないから。彼はきみの姿がみえなければ、誰れか他の者にいいつけるだろう」といつた。

彼は、親方がぼくに何を片付けろといいつけることは保証するぜといつた。「誰れも他人にむかつて口笛を吹いたり車の歯止めを指さしたりはしない」。「ぼくはあいつにきのういつてやつた、ぼくは犬じやないと。もしあいつが口笛をふいて指さしたら、もうあいつなんか人間あつかいするな」。

ぼくたちがもうしばらく話をしていたら、親方は彼を指さして手招きした。この若者はこつそりと悪態をつきはじめ、微笑を浮かべて彼の名を呼んでいる親方に背をむけた。そして彼は終始悪口をいいながら、ゆつくりとたち去つていつた。

△ 軍隊？

高校生たちは、一度青少年保護当局の厄介になるときはいつも、彼らは「非行少年」収容所に送られるか――それとも軍隊に入るかという選択を迫られていることについて不平を鳴らしている。「それは一体どんな種類の選択なのか？ 当局は、ぼくたちに、ぼくたちの考えをすて去ることを求めている。若干の若者たち、とくに彼

らをまちもうけている職をもつていない少年たちは、軍隊を選ぶ。だが、ぼくは再び問おう。それは一体どんな種類の選択なのかと」。

△ ビート・ゼネレーション

この世代の若者たちは、―たとえ就業しているにしろ失業しているにしろ、また若くてまだ就業できないにしろ、―反逆児なのだ。キャロリン・ゴールドスミスという名前の一六才の若い少女は、『ニューズ・アンド・レターズ』誌に次のような投書をした。

× × ×

彼らはわたしたちをビート・ゼネレーションとよんでいます。彼らは、わたしたちアメリカの青年男女はモラルも倫理ももつていないし、野性的で、理由なき反逆者だと申します。彼らはこうしたことを、雑誌の論文や映画や新聞やテレビその他で公表しています。

すべての人々は、エルヴイス・プレスレーから、宗教をもたぬことや家庭が貧しいことにいたるまで、これらについてそれぞれ違つた理由と解決策をもつています。だが、彼らは何故わたしたちが彼らのいうことに耳をかたむけないかという理由を理解できません。彼らは私たちよりも経験が豊かで一層賢明だと考えられています。だから、彼らはわたしたちの生活を管理する方法をわたしたちに告げる権利をもつていることになつているのです。

△ 理由ある反逆者

わたしたちの大部分がなんらかの意味で反逆者だというのは本当です。けれど、わたしたち自身では時にはその理由をハッキリと示すことができませんけれど、わたしたちには理由があるのです。わたしたちはもつといい生き方をもとめているのです。わたしたちのモラルと倫理ですつて？ もちろん、わたしたちはモラルと倫理をもつています。だが、それらはわたしたちの両親のものでなく、わたしたち自身のものなのです。わたしたちは、わたしたち自身のモラルや倫理をえらびます。なぜつてわたしたちは現在の社会をながめていて、それを好まないからです。だから、わたしたちは、現在の社会の土台におかれているモラルや倫理に従う理由なんかチッとも見出すことができないのです。

わたしたちが反抗するものは何一つないように見えるかも知れません。ちらつとみると、わたしたちは、たとえばテレビ・セット、自動車、オートメ化された機械などのようなわたしたちの両親がもつたことのなかつたものをもつているというだけの理由で、よい生活様式をもつているように見えるかも知れません。

だが、これらは決してわたしたちが望んでいるものではないのです。わたしたちは自由がほしいのです。―全

9798

面的な自由が。つまり、水爆とミサイルからの自由、戦争からの自由、わたしたちがティーンエージャーだからといつてホンのチョッピリ人間的でない状態におかれていることからの自由、学校と家庭のなかでの思想と表現の自由、どんな外国人よりももつと強遠な労働からの自由（なぜならティーンエージャーでさえこうした種類の労働の犠牲者なのですから）、—こうした自由がほしいのです。

大人の人達は多年の経験のなかでえた、わたしたちに提供する多くのものをもつています。しかし、わたしたちもまた、大人の人たちに提供する、これとちようど同じように重大なものをもつています。それは、わたしたち自身の若さそれ自身なのです。わたしたちは大人の人たちに提供する、わたしたちの新鮮な汚れなき心を持つていますが、彼らはそれを受け入れてはくれないのです。

わたしが胸にえがいているヴイジョンは、新しい自由な社会についてのヴイジョンなのです。この社会のなかでは、なによりもまず、わたしは人類の一員になることをみとめられるために、二一才になるまで、まつ必要はありますまい。

△ 変革のときはきた

マサチユセツツの若い先生がオートメーションに反対する論文を批判して、『ニューズ・アンド・レターズ』誌に投書した。

彼女はつぎのように尋ねた。

「そのもとで生活している人間によつて人間のために組織された社会体制のなかでは、オートメ！ションは、各人の非創造的な労働の持分を最小限にきりさげ、こうして彼のレジャ！のための時間、つまり彼自身を人間として最も完全に実現する機会を著しく増大する祝福ではないのでしようか？」。

だが、肝心な点は次のところにある。すなわち、ぼくたちは、もしぼくたちが違つた社会体制のもとで生活している場合にはオートメーションは何をすることができるだろうかといつた問題について語つているのではなくまさにいまここにあるオートメーションとは一体何かということについて語つているのだ。

この先生は、次の点を忘めた。すなわち、「そこにすむ人々の大多数の生活を馬鹿げた労働と空虚なレジャーだと宣告する社会は、病める社会であつて、多数のためばかりでなく、これを構成する全人類のために、徹底的に再組織されるべきだということについては、私は私の心中に何の疑問をもいだいていません。『特権をもつている』人達は、こうした社会の他の人達よりもわずかしか病いにおかされていないわけではありません。ひとを奴隷にする人々は、彼らが奴隷にした人々を不具にさせることによつて、かえつて人間として、自分自身が不具にされるのです」。

生産の内部に危機があるときには—そしてオートメーションが導入されるとともに常に生産の内部には危機がある—社会全体の内部にも危機がある。そうだ。労働者だけでなく、すべての人々がこうした危機によつて影響をうけていることは間違いない。

だが、特権をもつている人々よりもはるかに不具にされているのは特権をうばわれている人々だ。とくに五〇〇万人をこえる失業者たち—家族をあわせるならば約一三〇〇万人をかぞえる人々よりもひどい状態におかれているものはない。彼らは、最近のインチキな「上昇する六〇年代」の忘れられた男や女や子供達なのだ。

国全体の成長はとまつているように思える。ケネディとニクソン、ロッジとジョンソン、ロックフェラーとルーサー、ミーニイと新しい指導者たち、誰れもが「成長率」について語つており、ロシアのように急速に成長する必要について語つている。しかし、ぼくは、ロシアの労働者たちがぼくたちがこの国で暮してるよりも、楽な暮しをしては決していないことを確信している。全く反対だ。鉄のカーテンの両側で、いまこそ変革すべき—全面的に変革すべき時なのだ。労働者たちが自分自身の思考を組織することこそ、合衆国だけでなく全世界にわたつて危機の解決を開始するよい道なのだ。下からのこの偉大な運動に全面的に盲目な者、オートメーション—「あるべき」ものとしてではなく、現実にあるものとしてのオートメーションに対する労働者の闘いの現実的な実践に全面的に盲目な者たけが、くりかえしていうか、思想と実践との間にはこえがたい深淵があると信じこむことができるのだ。「ニューズ・アンド・レターズ」誌が支配の段階で労働官僚に対する労働者の闘争の武器になることができたのと全く同様に、「ニューズ・アンド・レターズ」委員会は、たしかにこうしたオートメーション反対闘争から生れでた、自発的につくられた大衆組織にたいして、独自な方向と目的をあたえる力となることができる。

思考と行動は、実際には「指導に」のりだす人々の日にうつるほど、はるかに遠くはなれてはいない。労働者たちは、オートメーションとは一体何であるかについて語る指導者を必要としてはいない。彼らは、それが何であるかを知つている。そして、それが何であるかを知つているからこそ、彼らはそれを変革しようと欲しているのだ。いまこそ変革すべき時なのだ。

9800

あとがき

本小冊子はマルクス主義的人間主義の旗をかかげて、アメリカで活動しているラーヤ・ドナエフスカヤの運動の機関紙「ニューズ・アンド・レターズ」の編集長、チャールズ・デンビイのあらわしたものである。

チャールズ・デンビイは、アメリカの一大工業都市デトロイトの自動車独占資本クライスラーの工場で働いている黒人労働者であり、本書では、そうした職場でじつさいに資本の圧制と闘っている労働者の息吹きが満ちあふれている。最高の技術的成果であるオートメーションが、いかに労働者の全体性を切断し、疎外労働を極限にまで達せしめるか、いかにひどい失業と貧困を労働者に強制するか、そしてそれにたいしていかに労働者が闘っているかが、多くの産業の職場労働者自身の口をとおして語られている点が、本小冊子のもつともすぐれた点である。

日本資本主義の構造的不況の深化のなかで、資本家階級は日本的レイ・オフ制（再契約つき一時解雇）の導入を公然と唱えはじめ、すでに電機産業では一時帰休制が実施されはじめている。このときにあたつて本小冊子がわれわれ日本の労働者階級に既まれることはきわめて時宜をえたことと言えるであろう。なぜなら本小冊子にはオートメーションによる一時解雇がいかに広汎な労働者に失業と貧困を強制しているか、そしてそれに対して労働者がいかに闘つているかが、きわめて具体的にわかりやすく述べられているからである。

先日、東京で開かれた、来日中のラーヤ・ドナエフスカヤ女史をかこんだ職場労働者の席談会で、質問や意見の交換を通じて、すべての出席者がアメリカの労働者も日本の労働者と全く同じような貧困と失業、職場のはげしい労働強化に直面していること、そして労働組合官僚の規制と闘いながら労働者が闘つていることを知り、アメリカ労働者階級の闘いに非常に親密な連帯感を抱くとともに、ラーヤ女史もまた広島のある工場の見学の感想を通じて同様のことを強調された。本小冊子はそうした意味から、日米労働者階級の国際的連帯をすすめる上での一つのすぐれた資料としてすいせんすることができるものである。

一九六五年十二月二十二日

前進社学習資料1

チャールズ・デンビイ著
オートメーションと闘うアメリカ労働者
—労働者の声をきかせてやろうではないか—
定価一〇〇円　送料三〇円

前進社　東京都豊島区池袋東一ノ五〇佐藤ビル
電話九八四—八六五一　振替八八八五七

9801

長船社研学習資料

ラーヤ・ドゥナエフスカヤ著

ソ連経済と価値法則

1 マルクス経済学の新修正 …… 5頁

2 マルクス主義の修正か再確認か …… 15頁

3 ロシア経済の性格 …… 23頁

長崎造船社研・訳刊

9802

1. The American Economic Review Article [illegible]

2. The Nature of [illegible]

「一国における社会主義革命の完全な勝利は考えられないし、それには少くともいくつかの先進国の積極的な協働が必要とされる。そして、[illegible]のなかに[illegible]ロシアを数えることはできないのである。」（レーニン全集第二八巻一五五頁）

「国際的な世界的な[illegible]に持ちこされることなしには、プロレタリア革命の勝利が不可能であるということは、我々には明瞭であった。我々は当時にも、その以後においても、と考えた。——或いは、今すぐか、もしくは、少くとも早急に、その他の諸国、資本主義的に一層発達した諸国において革命が開始されるか、或いは、その反対の場合には、我々は、滅亡しなければならないか、そのいずれかである、と。かかる自覚にもかかわらず、我々は、いかなる事情の下においても、またどんな犠牲を払っても、ソビエト制度を維持すべくすべてをつくした。なぜならば、我々は単に自分自身のためにばかりでなく、国際革命のためにも働いているということを意識していたからである。」（レーニン全集第三二巻五一二頁）

訳序

「革命的理論なくしては革命的運動もまたありえない」とは、レーニンの有名な言葉だが、反スタ・マルクス主義運動にとっては、この言葉は一層切実なものとなる。それはスターリン主義のマルクス的批判の理論なしには存在し得ぬものだからである。そして、この批判理論のうち最大の比重を占めるものは、スターリニスト社会体制の革命的批判である。つまり、ソ連の社会体制の、マルクス的批判の重要性ということだ。中共のソレは、ソ連論さえ確立されておれば、容易になしうるが、いずれにしてもこれがしっかりしないと、いくら「反スタ」といっても、中途半端なもの、例えば、「戦術左翼」的な反対派になってしまう。

ところで、ソ連体制（ひいては中共体制）のマルクス的な批判の上で、最大の拠点になるものは、マルクスの価値＝剰余価値論及び蓄積論である。（これを拠点にして把握することを、殆んど欠落していることが、トロツキーのソ連論を失敗せしめた理論的主因である。）

ここに、長船の同志諸氏によって訳刊されるラーヤ・ドゥナエフスカヤ女史の、三論文は、彼女の主著「マルクス主義と自由」（邦訳「疎外と革命」）の、かなり前に発表されたソ連論で、今日よんでも非常にすぐれたことを感じさせるものである。というのも、彼女がマルクスの価値＝剰余価値論及び蓄積論をシッカリと把握してそれが全篇に貫徹されているからである。これと、「疎外と革命」中のソレを合わせ読むならば、理論的であると同時に歴史的な――まことにダイナミックで、見事な解明という外はない。（ありていにいえば、彼女のソ連論は、クリフや私のものなどよりは、すぐれていると思う。蓋し、彼女においては、マルクスの哲学と「資本論」の把握が、ヨリ根底的で、ダイナミックであったためだろう。彼女は、第一級の反スタ・マルクス主義理論家であって、まさしくわが陣営のローザ・ルクセンブルグである。）

本書を読むにあたり、老婆心ながら若干の助言をしておきたいと思う。

一、マルクスの価値論は、決して社会のカタズミでボソボソと作用しているような価値法則（例えば単純商品生産）を相手としたものではなかった。それは、アダム・スミスとは反対に、一定の歴史段階で全社会的な根本的運動法則となっているような価値法則であった。然るに、かかるものとしての価値法則に、剰余価値法則（＝労働力の商品化）たることなしには、存在しえないものであり、従って、「マルクスの価値論は彼の

9864

剰余価値論である」（ラーヤ）という「体的把握が必要であり、また従って、「マルクスの価値法則は、単に、理論的抽象ではなくして、実際の階級闘争の反映である。」（ラーヤ）

このことをシッカリと頭に入れておかねばならぬ。

（マルクスの価値法則を単純商品生産社会に作用せしめるためには、一定の抽象が必要であり、しかも、その時、それは全社会的運動法則たることをやめる。）

二、かくして、価値法則の止揚のためには、労働力の商品化の絶滅が、決定的なテコとなり、それなしには、価値法則の止揚はありえないということになる。しかしながら、従来、価値法則の止揚を余りにも単純に考えすぎていた傾向があると思う。かって、トロツキーは、なかなか含蓄ある発言をしている。

「生産手段の集団的所有は、まだ社会主義ではなくして、ただそのための合法的前提である。社会主義社会の問題は、人類発展の現段階においては、その本質上世界的であるところの、生産力の問題から抽象することはできない。」（「ロシア革命史」角川文庫第六分冊二二三頁）

生産手段を相当に集団化すれば、すぐにも価値法則が止揚されるかのように推定されすぎている。だが、その止揚は、単に生産手段集団化のみではなくて、生産力の問題を抽象して考えられてはならない。もしそれが低生産力的条件下にあれば、いくら集団経済が行なわれても、決して価値法則は止揚され得ない。むしろ逆に、生産力の急速な発展のために、労働力の商品化、（剰余価値法則）を強化せざるを得ず、かくて、価値法則は克服されるかわりに、その前に叩頭するに至る。（ソ連や中共をみるがいい。）

このことをハッキリと頭に入れておかねばならぬ。

（同志クリフのソ連論（邦訳書一九〇～一九六頁）には、この認識が欠如しているように思われる。ラーヤ女史は、ハッキリこの事実をつかんでいるのだ。）

三、ラーヤ女史には、終戦直後頃に、「ローザ・ルクセンブルグの蓄積論」とか「マルクス主義の若干の基本点の再論」とか、蓄積論に関する論文があるようである。まだよむを得ないが、併し、大体は「疎外と革命」中で知ることができる。ソ連論上、特に頭に入れておいてもらいたいのは、次のような彼女の発言である。

「マルクスは、不変資本がたえず拡大しつづけることを示したとき、彼が第一巻で、分析した資本蓄積の法則を基礎にしていた。彼が不変資本にあたえた可変資本との正確な比例は七対一である。それ故に、……：表式のなかにある〃均衡〃は、七対一というこうしたファンタスチックな割合にみちびく、資本主義の下

における生産関係がもってはじめて存在するのだということは、明らかだったはずだ。このことが、マルクスの範疇が資本主義にとって全く動かし難いもので、他の社会には適用されない理由なのだ。」「ローザ・ルクセンブルグは、可変資本に対する不変資本のこの優越が資本主義に固有のものだということを否定した。彼女にとっては、こうした可変資本に対する不変資本の優越は、単に、いかなる社会にあってもみられる生産の本質的な要素を表現するための単なる〝資本主義的な言葉〟にすぎなかった。」（「疎外と革命」一七五頁、一八〇頁）

マルクスの蓄積論は、もちろん、これだけにとどまるものではないが、特に右の発言には、ソ連論上、留意しなければならぬ。（マルクスの再生産表式が社会主義にも適用できるなどというスターリンの発言はナンセンス以上であった。）

（ついでながら、彼の「ソ連における社会主義の経済的諸問題」なる論文は、全篇バカげた誤謬だらけの一文である。かって向坂逸郎氏は、「独学の精神」なる所論中、これを「資本論をよく消化して自分の血や肉としている。」などとホメあげたことがあったが、それは氏が、いかに独語よみの論語知らずなるかを表明するものである。）

なお、最後に一言したいのは、「反帝・反スタ」陣営に根深くある、ソ連体制の剰余価値搾取否定論――しかしながら剰余労働搾取の肯定論である。だが、これ位バカらしい推論はない。というのは、単なる剰余労働搾取体制は、労働力商品化（＝剰余価値法則）以前の比較的に静的な搾取体制であって、いくらスターリニストでも、そこまで歴史を逆行させていないからである。何故なら、そんなことは、政治的に不可能であるばかりでなく、経済的にも――かかる逆行は生産力発展の途にもそわないので――不可能であるからである。更にこの推論によっては、ソ連体制にある貨幣（ルーブル）、賃金、物価などの説明もできないし、また、そこにおける蓄積様式の説明もできないのだ。（ソ連における蓄積様式は、労働力の商品化を前提せずには、絶対に理解できないものだ。）

ラーヤ女史の所論が、かかるオトギ話を一掃し去るにも役立つことを望んでいる。

右、推奨の辞とする。

一九六五年四月

対馬忠行

9806

（追）　なお、その後、ラーヤ女史から、一九五〇年八月四日付で発表されたテーゼ風の長論文――「国家資本主義と世界革命」が送られてきている。内容は

序　論

一、スターリン主義とは何か？
二、スターリン主義者と国家資本主義の理論
三、レーニンと国家資本主義
四、世界革命の党の再武装
五、階級闘争
六、党の理論
七、方法論
八、レーニン主義と過渡期の制度
九、ユーゴスラビア
十、若干の政治的結論
十一、国家資本主義時代における哲学

――となっているが、大型雑誌四〇頁にわたる、まことに興味深い長論文である。蓄積論に関する論文などとともに、いずれ紹介される機会を望んでいる。なお、女史は、今秋、二カ月ほどの日程をもって来日される予定になっている。

9807

マルクス経済学の新修正

（訳者注）　第二次大戦中の一九四三年、ソ連の経済学者はマルクス経済学の基本理論を根本的に修正し、価値法則は変容された形においてであるが、社会主義経済においても作用する、と主張して驚かした。指導的理論誌「マルクス主義の旗の下に」（一九四三年七・八号）における「経済学教授上の諸問題について」がこれである。（これは無署名で発表されたが、当時の同誌編集部は、L・A・レオンチェフ、M・B・ミーチン、P・N・ソェドセイエフ等々、十名から成る。）

戦時中のためラ！ヤ女史は、遅れて、これを翌年に入手したが、入手するや、その全文を英訳し、「アメリカン・エコノミック・レヴュー」誌の一九四四年九月号に紹介した。と同時に、同じ号に、短い評言をのせた。以下がその評言である。批判対象たる「マル旗」誌の論文は、すこし長いので、ここに訳載することができない。いずれ他の機会に、と思っているが、すこしばかりそのエ一節を紹介しておこう。

マルクス・エンゲルスによれば、社会主義社会の各人の給与は、価値法則の止揚を前提とし、「労働の自然的尺度、すなわち時間」をもって行なわれ、従って、殆んど平等主義的で、また高度の給与水準を予定している。だが「ソ連・社会主義」はそうではない。なぜか？　スターリニスト経済学者はマルクスを否定して答える。

「……だが、困難は、社会主義社会の人民の労働は質的に一様なものではないということである。この点で、それは共産主義社会の成員の労働とは異なる……

……ある種の労働は、他の労働よりももっと訓練を要する。換言すれば、熟練労働と不熟練労働との間、熟練度の種々異なる労働の間には、差別が存在する。…これら総てのことはある労働者の労働時間（或いは労働日）は他の労働者のそれと等しくないことを意味する。この結果として、社会主義社会における労働及び消費の測定は、ただ価値法則の基礎においてのみ算定されうる。」

更にいう。

「社会主義社会の成員の労働は商品を生産する。」「ソ連計画経済における商品は売買の対象である。」「価値法則の意識的利用に基づいたコスト計算は社会主義下の経済の計画的指導にとって不可欠の方法である。……社会主義社会における商品の価値は、その生産に実際についやされた労働の単位

9808

によって決定されるのではなくて、その生産及び再生産のための社会的必要労働の量によって決定される。……社会主義社会における労働の生産物は商品である。それは使用価値及び価値を有する。これは社会主義社会における労働が、二つの面、即ち、一方においては使用価値を生産する具体的労働、他方においては抽象的労働として、社会的生産についやされた総労働がハッキリ分かれていることを意味する。」

もう、たくさんだ！　これでは資本主義とどこが本質的に違うのであろうか？　ともあれ、この論文は、「価値法則がわが国で生産に作用していることは、不幸なことでは決ない。」などという例のスターリン論文をへて、現在の「社会主義商業」全盛論――「利潤論」に至る、理論的出発点をなすものとして、今なお、注目にあたいするものである。

「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する。」――このマルクスの言葉を強く想起せんことを望みたい。更にラーヤ女史が指摘しているように、彼らの、マルクスの価値法則と剰余価値法則の分離的把握にも――これは「価値法則は近代資本主義の基本的経済法則ではありえない。」（米）などというスターリン論文にもあらわれているが――深く目をとめられたい。

（米）ついでながら一言しておく。多くのスターリニストがかついだように、スターリンは、その代りに「最高利潤」をもって「現代資本主義の基本的経済法則」とした。だがこれは、バカげている。なぜなら、価値法則を前提せずに利潤が考えられぬというばかりでなく、そんなものは「法則」でも何んでもなくて、単に資本家の主観にとどまるからだ。マルクスも「資本家の意志は、確かに、できるだけ多く取ることである。我々の仕事は彼の意志を論駁することではなくて、彼の力、その力の限界、及びこの限界の性格を研究することである。」（「賃金、価格及び利潤」）といっている。利潤に酔していうならば、しばしばラーヤ女史が強調しているように、クライシス期において顕在化される利潤率の傾向的低下の法則こそが基本的法則なのだ。なお「疎外と革命」一九三頁の、この法則と恐慌の関連に関するラーヤ女史の説明に一顧を払われんことを我々は希望している。

「マルクス主義の旗の下に」の本号に発表されたこの論文は、ソ連の高等学校の「教科課程と教科書」のなかにみられた、経済学の従来の教授法に対する批判にすぎないもののようにみえる。だが、実のところは、この論

9809

文は決して単に教授法上の誤りに非難を加えているだけではない。この論文のレ・ジン・デートル（存在理由）は、マルクス的解釈による価値法則は「社会主義」の下でも作用するという議論のなかにふくまれている。こうした議論は、単に学校のなかばかりではなく、最も権威のある学術的な出版物並びにソ連の一切の出版物のなかでも、支配的だった従来の経済理論から明らかに離れている。この論文が今日あらわれたということは、ソ連経済が、戦後期にそれにそって発展することを期待されている線を示すものである。

ソ連の経済の発展を注意深く追求してきた外国の観察者たちは、ソ連が、これまで資本主義につきものだった殆んど一切の方策を使用していることを永年にわたって認めてきた。ソ連のトラストやカルテルやコンビナートや、それらの内部の個々の企業は、独立採算制の厳しい原則に従って規制されている。商品の価格は、賃金、原料、管理費、償却費、利子プラス計画利潤並びに国家を維持するための歳入として課せられる種々の税金をふくめた総生産費にもとづいて決定される。ソ連の工業経営にとって欠くべからざるものは、銀行、安全な信用、利子、債券、小切手、紙幣、保険等々のようなしかけである。さきにあげた論文が説明しているように、「価値法則を否定したために、社会主義の下に右のような諸範疇が存在していることを説明するにあたって、克服することのできない種々の困難がつくり出された。」

「経済学教授上の若干の諸問題」と題するこの論文は、ソ連では価値法則は作用してはいるけれど、変容された形をとって作用しており、ソ連国家は価値法則を自己に従属させ、社会主義の利益のために価値法則のメカニズムを意識的に利用している、と論じている。価値法則の作用が社会主義の存在と矛盾しないことを示すために、右の論文は「ゴータ綱領批判」から次の章句を引用しているが――そこではマルクスは、「今やっと資本主義社会から生れたばかりの」社会主義社会（「共産第一段階」）では、労働者は一定量の労働の代償として、こうした労働の等量物を消費資料の形でうけとるだろうと述べている。ところが、この論文の筆者たちは、右の章句からでてくる方式――つまり、労働は「労働の自然的尺度、すなわち時間」（「反デューリング」第二篇、四、分配）によって支払われるだろうという方式をしりぞけている。右の文章の述べるところによると、この方式は、労働が熟練度に応じて、知的ならびに肉体的差異についていえば、高度に分化されているソ連の経験とは一致しない。それゆえ、右の論文の筆者たちは、「労働による分配」という新しいスローガンを提起しているのだ。彼らは、こうして価値法則を社会主義の機能のなかに移したと考

9810

えている。われわれは、彼らがこうした「労働による分配」を価値による分配と完全に同一視していることに注目すべきである。

現在のソ連には、一方においては労働者、他方においては工業の管理者や、百万長者コルホーズニキや政治的指導者や一般的インテリゲンチャという、両者の間の機能の分割にもとづく鋭い階級分化が存在している論争の余地なき証拠がある。このことこそが、五カ年計画が開始された後に現われはじめ、それ以来、明確な形をとるに至った若干の傾向を証明するものだ。こうした傾向の法制上の表現は、一九三六年に、初期のソビエト憲法が廃止された事実のなかで最高度に達した。初期憲法にかわって採択されたこの憲法は、ソ連社会の特殊「グループ」としてのインテリゲンチャの存在を法制化した。インテリゲンチャと労働者大衆との間のこうした区分を経済上に表現するものは「各人はその能力に応じて、各人はその労働に応じて」という方式だった。この方式は、「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」「「ゴータ綱領批判」」という伝統的なマルクスの方式と比較すべきだ。「各人にはその必要に応じて」ということは、これまでは常に価値法則を拒否するものと考えられてきた。ところが、右の論文は、「労働による分配」は貨幣という道具を通じて行なわれることになる、と述べている。そして、この貨幣とは決して仮装した紙幣や簿記上の用語ではなく、価値の価格表現としての貨幣なのだ。右の論文の筆者たちによれば、「……社会主義社会における労働及び消費の測定は、ただ価値法則の基礎の上にのみ算定することができる。」

それゆえ、この論文全体の意義は、社会主義社会すなわち搾取なき社会の内部で作用する価値法則について考えることが可能かどうかという点にかかっている。

マルクスは、労働は価値の源泉で社会的必要労働時間は商品交換を支配する公分母だという意味の価値法則の説明を古典経済学からひきついだ。だが、マルクスは、こうした労働価値説から、彼の剰余価値説をひき出したのだ。彼は、商品市場で支配している外見上の平等を本来の平等と誤解した点で古典経済学を批判した。マルクスの論ずるところによれば、交換の法則がこうした平等の外見をあたえることができるのは、ただただ、交換を規制する価値が物質化された人間労働であるからだ。労働力という商品が買われるときには、物質化された労働の等量が交換される。だが、一方の量は生産物すなわち貨幣のなかに物質化されており、他方の量は生きた人間のなかに物質化されているのだから、この生きた人間は、彼によって生み出される労働が、彼を再生産するために必要な消費手段のなかに物質化されるに必要な時間以上

に働くことができるし、また働くようにできている。マルクスの論ずるところによると、それゆえ、資本主義的生産の性質を理解するためには、交換の領域をはなれて生産の領域に入ることが必要なのだ。生産の領域では、商品の商品の二重性 ——つまり使用価値と価値とは、商品のなかに具体化されている労働の二重性 ——つまり具体的労働と抽象的労働を反映しているにすぎないことが発見されるだろう。マルクスにとっては、労働の二重性は、「経済学の明瞭な理解がそれをめぐって旋回する枢軸である。」(1)

マルクスは、資本の労働過程を疎外の過程となづけた。抽象的労働とは疎外された労働 —— つまり、自己の労苦によって生産した生産物から疎外されているばかりでなく、自己のもつ労働力を支出する過程そのものに関しても疎外されている労働である。ひとたび生産過程のなかに入ると労働者のもつ労働力は固定された機械装置もしくは不変資本 —— これもまた労働者の物質化された労働にほかならない ——と同様に資本の「構成部分」となる。マルクスによると、リカードは「一般に、交換価値の量的規定だけを、すなわち交換価値は労働時間の一定量に等しいということだけを眼中におき、個人的労働は疎外によって抽象的、一般的な社会的労働として現われねばならぬという質的規定を忘れている。」(2)

それゆえ、マルクスの解釈によれば、価値法則は、疎外された労働あるいは搾取された労働という概念ならびに、その結果として剰余価値という概念を必要とするのである。

従来は一切のマルクス主義者は、こうした事実を認めてきた。従来はソ連の経済学もこうした解釈に忠実だった。一九三五年に、「マルクス主義の旗の下に」の現在の編集者の一人であるA・レオンチェフ氏は、次のように書いた。「われわれがみてきたように、マルクスの剰余価値論は彼の価値論にもとづいている。このことが、一体なぜ価値論を一切の歪曲から解放することが重要であるかという理由である。なぜなら、搾取論は価値論の上にうち立てられているからだ。」(3) 更に彼は再び次のように書いた。「具体的な労働と抽象的労働とへの労働のこのような分割が、ただ商品生産の場合だけしか存しないことは全くあきらかだ。こうした労働の二重性は商品生産の基礎的な矛盾を現わしている。」(4)

新しい論文は、この理論及び過去におけるこの理論の解釈と矛盾している。それは、ロシアに具体的労働と抽象的労働とが存在していることを認めながら、こうした労働の二重性に本来そなわった矛盾を否定している。それは、経済学がそのまわりを旋回している枢軸を認めながら、一切のマルクス主義者並びにマルクス主義の反対

者にとっても、従来、マルクス主義的な分析の本質をなしてきた搾取という土台を否定している。これこそ、この論文が解決せねばならぬ問題なのだ。この作業がどのようになされているかを調べてみることは、なかなか興味ぶかい。

マルクス主義的分析の土台だった階級的搾取のかわりに、新たな理論的一般化は、ソビエト社会主義共和国連邦（U・S・S・R）が存立しているという経験的な事実から出発し、社会主義が確立されたものとみなし、その上で、若干の「社会主義社会の法則」を提起している。だが、ここで我々は、これらの法則は、いずれも決して法則ではないといわねばならない。法則とは経済的作用の記述である。ところがこの論文のいうところの「法則」なるものは事実のステイトメント（陳述）なのだ。「社会主義社会の客観的必然性」――「労働による分配」を表明するものとしての諸法則から生ずるものが法則という性格を分けもたされているのだ。このことは注意されるべきことだが、「客観的必然性」が経済法則から生ずるのではなく、経済的法則が客観的必然性から生ずるのだ。もちろん、それはソ連では違った形で表明されるかもしれない。だが、この論文の筆者たちが引用している、客観的必然性の表明は、まさに資本主義社会から生ずるそれと同一なのだ。この文献は、新しい土台すなわち、「社会主義」と、資本主義的生産を特徴づける法則すなわち価値法則との間にたんらかの論理的なつながりをつけることに失敗している。国家は、今は、労働に対して必要に応じて支払うという原則をにおわしているのだが、客観的必然性によって価値に応じて支払うことを余儀なくされているという関係こそが、まさにマルクス価値論の中核なのだ。価値法則のマルクス主義的な解釈を最高度に表明するものは、労働力は一切の他の商品と同じく、価値で支払われる。いいかえれば、労働力はそれを再生産するために社会的に必要なものだけをうけとる。ということが。

ソ連経済学をこのように恐ろしく逆転させたことは、偶然でもなく、単なる懐柔でもない。それこそがこの論文の真の意義なのだ。この論文の真の意義は、ソ連憲法の中にまつりあげられている社会的特徴を理論的に正当化することだ。こうした巧妙な理論的正当化がなされたということは、ロシア人民が、共産主義の創始者たちや、ソビエト国家の建設者たちの頭にはなかった社会関係をつづける準備をさせられつつあることの証拠である。この論文は、価値法則は単に資本主義において作用しているばかりでなく、大昔の頃からずっと存在しつづけてきたと論じている。このことの証拠として、価値法則が現在ソ連邦に存在していることが引き合いに出され、価値

9813

法則はおよそ五〇〇〇年ないし七〇〇〇年にわたって存在してきたというエンゲルスの叙述（「エンゲルスの、「資本論第三巻への補遺」）が引用されている。だが、エンゲルスの叙述は、彼が、商品の価格が商品の正確な価値を反映している限りにおいてだけ価値法則をとりあつかっている論文のなかに含まれているのだ。マルクスのテーゼは次の通りである。すなわち、経済が後進的であればあるほど、個々の商品の価格はそれだけますます正確に価値を反映するが、経済が進歩すればするほど、商品価格はそれだけますます多く価値から離れる。この場合、商品は生産価格（費用価格プラス平均利潤）で売られる。だが、全体をとってみると、価格の総計は価値の総計に等しい。マルクスのテーゼは右の通りだが、エンゲルスは、こうした意味で価値法則は幾十年にわたって——すなわち、単純な交換が開始されて以来、資本主義生産に至るまで絶えず作用してきた、(5) と述べているのだ。エンゲルスが資本主義的生産のみの特徴である搾取関係としての価値から全く離れなかったということは、「エンゲルス、資本論について」という小冊子によせたレオンチェフ氏自身の序文から一番ハッキリと認められる。この序文の中で、このソ連の経済学者は次のように述べている。

「第二インターナショナルの時期の社会民主主義的理論家たちの手にかかれば、価値、貨幣、剰余価値等々の範疇は、交換の領域に位置し、プロレタリアートの革命闘争の諸条件からはるかに引き離された、魂をぬきとられた抽象に転化されるという宿命的な傾向をもつのだが、これに反してエンゲルスは、右のような範疇が物質的生産過程の内部における階級間の関係や、階級的矛盾の増大や、プロレタリア革命の不可避性との間にとり結ぶ最も密接な解きはなちがたい関係を示している。」(6)

エンゲルスは、価値は「たんに商品生産のみに特徴的な範疇であって、商品生産以前には存在しなかったように、商品生産が廃止されると同時に消滅するだろう」(7) と述べた。さらにエンゲルスは次のように論じている。すなわち、「生産者たちが、遂にはその生産物を支配する社会を樹立するのに、生産者たちの自己の生産物による隷属化を最も包括的に表現する一経済的範疇（価値）を、終始貫徹することをもってする。」(8) ことは全くバカげたことだろうと。われわれにのこされた、マルクス自身の手によって書かれた最後の理論的な著作であるA・ワグネルの「一般的或いは理論的経済学」に対する批判のなかで、マルクスは、「ブルジョア社会を解明するために展開された価値論が「マルクスのえがいた社会主義国家」に対しても有効性をもつという仮説」(9) に手きびしい批評を加えている。

本稿の筆者（ラーヤ）の意見では、右論文のなかには、このように堅固に打ち立てられた、価値法則の資本主義的生産との共存を反駁するものはなにもないのである。

「マルクス主義の旗の下に」に掲げられた左の論文が提起している、理論的解釈の急激な変更は、当然のことながら、同時に重大な方法論的な結果をともなう。この論文の筆者たちは、将来は「資本論」の構造に従うべきではないことを提唱し、これに従ってきた過去の教科書は「歴史的原則」をおかしてきたと述べている。明らかに、こうした意見は、「資本論」から恐ろしく離れている。

エンゲルスは、歴史は飛躍やジグザグ・コースをたどって、前進してきたので、その内部をつらぬく一貫性をみぬくためには、偶然的なものを捨象することが必要だったという事実によって、マルクスが、「歴史学派」の方法をしりぞけたと証明している。マルクスの「資本論」の構造は、進化の過程のなかでながめられ、歴史の発展によって絶えず再三にわたって点検され傍証された、ひとつの論理的抽象である。マルクスの弁証法は深く歴史に根ざされている。だが、それは歴史をさまざまな事件の年代史的なリストとしてではなく、「歴史的形態や攪乱的偶然性とがはぎとられている」(10) ものとして利用している。こうしてマルクスの抽象的な方法は、決して「歴史的原則」から離れてはいない。反対に、商品の理論的な発展は、実のところは、商品が最初に姿をあらわした段階、すなわち原始共産体の残存の時期から最高の発展、つまり資本主義の「古典的形態」に至るまでの社会の歴史的発展にほかならないのだ。原始社会や奴隷社会や封建社会におけるように、商品が偶然に存在したり、従属的な地位をとったりしていた処では、われわれが、それをどう考えようとも、社会関係はとにかくハッキリしていた。こうした社会関係が「ものとものとの間の関係の幻影的な形態」(11) をとるのは、ただ資本主義の下でしかない。マルクスが商品を「その最も成熟した時点」で分析したのは、そうした理由による。彼は商

品の理論的なポテンシアリチー（可能性）をその歴史的出発点から切り離しつつある。マルクスは商品の発展法則を見分けるためにこれを分析しているのだが、ソ連の経済学者たちは、いまや単に商品が「社会主義社会」に到達したことを宣言しているにすぎない。

それゆえ、右の文献の筆者たちが、将来は「資本論」の構造にしたがうべきでないことを提唱するとき、それは過去のソ連の教科書が、「資本論」にもとづいて「歴史的原則」をおかしたためではない。それは、エンゲルスが「商品の特殊な特徴」となずけたものを商品からひきはがし、これを実際に一切の社会に適用される無階級的な「一般的現象」に転化する必要のためである。

右の論文にいだいている考えと方法とは決して偶然ではない。それらは、「剰余生産物」を獲得することに関心をいだいている「インテリゲンチャ」のいだいている考えと方法なのだ。重要なことは、「経済学の過去の授業」からこのように離れることが、実際には経済的現実を反映しているということだ。ソ連は「応用経済学」の時期に入った。理論の代りに、右の論文は、最小限の費用と最大限の生産を獲得するための行政上の方式を提起している。それは、ソ連の戦後経済の憲法である。

(1) 「資本論」岩波文庫版第一分冊八三頁
(2) 「剰余価値学説史」ロシア語版第二巻第二部一八三―八四頁（改造社マル・エン全集第十巻二九七頁）
(3) 「経済学初級教程」（ニューヨーク、一九三五年）八八頁
(4) 同上書五八頁
(5) エンゲルス「資本論第三巻への補遺」（岩波文庫版「資本論」第八分冊）
(6) 「エンゲルス、資本論について」（ロシア語）――これの英訳本は、ソ連共産党中央委員会の監修の下にマルクス・エンゲルス・レーニン研究所によって公けにされたこの序文をのせていない。……
(7) マルクス・エンゲルス全集（ロシア語）第二七巻四〇八頁

9816

(8) エンゲルス「反デューリング論」第三篇「四、分配」の章をみよ。

(9) 「マルクス・エンゲルス・アルヒーフ」（アドラッキー編　ロシア語）第五巻五九頁（「大原社会問題研究所雑誌」第十巻第二号、久留間訳）

(10) エンゲルス「経済学批判について」（岩波文庫「資本論概要」三二五頁）

(11) 「資本論」岩波文庫版第一分冊一四三頁

9817

マルクス主義の修正か、再確認か？

（訳者注）　ラーヤ女史の評言ー「マルクス経済学の新修正」に対し、当時のアメリカで、オスカー・ランゲ等々、スターリニズムの弁護論者から反論があった。女史は、「アメリカン・エコノミック・レヴュー」、一九四五年九月号で、これを鋭く反撃した。以下がその全文である。

オスカー・ランゲ教授(1)、レオ・ロジン教授(2)ならびにポール・A・バラン氏(3)は、「マルクス主義の旗のもとに」にのせられた最近の一論文(5)が正統派マルクス主義から極端にはなれ去ったことを示すものだという、わたしの主張(4)に挑戦してきた。右の経済学者たちは外見上、問題の論文はマルクス主義を修正するものではなく、これを再確認するものだという点で、意見が一致しているようだが、それにもかかわらず、彼らは、ソ連の論文にのべられている理論の基本点ーすなわち価値法則は、「社会主義」のもとでも作用するという点についてはーそれぞれ異った、直接矛盾さえしている結論に到達している。ランゲ教授は積極的に、マルクスは「価値法則は社会主義経済にも適用されるという意見をもっていた」(6)と主張している。バラン氏は、価値法則は「資本主義社会の運動を支配する原則」であり、この法則を社会主義に適用しようとすれば『「価値法則」からそれがもつ一切の意味と特徴とをうばいさる』結果をもたらすにすぎないと断言している。ロジン教授は価値という概念について論議することを避けている。これらの学者の間に混乱がみられることは、マルクスの意味するところにしたがって価値法則をもう一度のべておく必要があることを示唆している。

ランゲ教授は、『資本論』からの二つの引用文を誤って組合せることによって、価値法則が社会主義社会のなかで作用するという結論に到着している。マルクスが、「自由な人間の一つの協力体」（向坂訳『資本論』(1)一五〇頁）についてのべている第一巻九〇頁からの第一の引用文のなかでは、マルクスは注意深く、「価値」という言葉をつかうことをさけている。「商品の物神的性格」に関する節全体の最も重要な点は、「使用対象を価値として規定することは、言語と同様に彼ら（人間）の社会的な生産物である」(7)ということ、価値とは「ブルジョア的経済学」の言語であるということを証明することだ。それゆえ、マルクスは、「方向をかえて」資本主義社会以外の社会について語るときは、「価値」という言葉を

9818

用いないで「労働時間」という表現を用いている。さて第三巻の九九二頁からひいた第二の引用文のなかでは、マルクスは「価値規定」（向坂訳『資本論』㈢四〇〇頁）という言葉を、評価（evaluation）を意味する一般的なもしくは説明的な意味で用いているので、決して価値論もしくは価値法則といった範疇的な意味で用いているのではない。マルクスは、A・ワグナーのように価値に関する理論をその資本主義的内容から、ぬきとって「普遍的な価値論」に転化させようとする人々にたいしては軽蔑いがいのなにものをもたなかった。わたしがわたしの論文のなかでのべておいたように、マルクスは、『ブルジョア社会を解明するために展開された価値論が「マルクスのえがいた社会主義国家」にたいして有効性をもつという仮説』を斥けている。彼は『価値を分析するにあたって、わたしはブルジョア的関係を念頭においていたので、決してこの価値論を「社会主義国家」に適用することを考えていたのではなかった』(8)ということをくりかえして述べた。エングルスは『アンチ・デューリング論』のなかで、社会主義社会においては、『人々はあの有名な「価値」をもちこむことなく、きわめて単純に一切を処理することができるだろう』(9)とのべた。

マルクスとエングルスとは対照的に、ランゲ教授は、たんに価値法則は社会主義社会にたいして適用されると主張するばかりでなく、その「純粋な形態」においては、マルクスは価値法則を『たんに「単純商品生産」の条件のもとでのみ』適用されうるもの考えていたということによって、「価値法則」の意味を一層拡張している。だが真実のところは、マルクスは、まさにそうした主張をしたがゆえにアダム・スミスを批判したのだ。マルクスの説明によると、アダム・スミスは、「（価値法則を）資本主義的生産から抽象した」ために、そうした誤りにおちいったので、「まさにこのために価値法則は無効なもののようにみえるのだ。」(1)スミスとリカードの労働価値説から出発しながら、マルクスは、資本家と労働者との間の不平等な交換は決して法則からの「偏向」ではなく、まさにそれ自身の土台であることを示した。彼は古典学派の労働価値説を剰余価値説に転化させたのだ。彼は、「価値は、資本家的生産過程に特有の性質の表現である。」(2)と書いた。マルクスの価値論は彼の剰余価値論である。

ランゲ教授は、生産の段階が低ければ低いほど、価格はますます多く価値を反映するし、生産の段階が高ければ高いほど価格はますます価値からはなれるというマルクスのテーゼを誤って解釈することによって、価値法則を価格形成と混同している。ランゲ教授は、もし価値と価格とが一致しないならば、価値法則は、その「純粋な

9819

形態」では作用しないと考えている。ところが、これに反して、マルクスは、価格が価値からはなれることは決して価値の法則を歪曲するものではなく、たんにそれを表明するものにすぎないと主張した。マルクスによれば個々の価格がどれほど価値からはなれようとも、価格の総計は価値の総計にひとしい。価値法則は依然として、支配しているのだ。

マルクスは、市場でひきおこされる諸現象を、資本家と労働者の間の生産関係を表明するにすぎないものとして取扱った。市場における競争と同様に、個別資本の有機的構成は、資本家の間の利潤の分割には影響を及ぼすが、剰余価値自体には影響を及ぼさない。剰余価値は、たんに生産過程だけから生ずる一定の大いさである。マルクスは、彼が「資本家的共産主義」となづけたものを到来させるための、資本家の間の闘争は労働者には全く関係がないと主張した。彼がこうした市場でひきおこされる諸現象を分析するのは、たんに、「自己を増殖する価値」の圧倒的に支配的な地位－つまり生産関係の優位を証明するためにすぎない。ランゲ教授はあまりにもつよく価格形式にとらわれすぎている。マルクスは、四〇〇〇頁以上にも上る、『資本論』第三巻の一部となることを意図した「剰余価値学説史」を価格分析の論文として、かいたのでは決してなかった。『資本論』は、資本主義的生産過程、資本主義的流通過程ならびに資本主義的生産の「総」過程の分析なので、ほかの社会制度の分析では決してない。

ところが、ランゲ教授は、一方ではソ連は社会主義－すなわち非搾取的な社会秩序であるとしながら、他方では、そこには支配的な資本主義的経済法則が作用するとしている。マルクス価値論の搾取論的な内容を捨象することによって、ランゲ教授は、この理論から「一切の意味と特徴」とをうばいさってしまったのだ。

ロジン教授の中心的なテーゼも同様に正確ではない。ただし、彼は価値という概念を完全に無視し、ただ社会主義のもとにおける分配の原則だけを考えているから、彼の誤りをとりだすことは一層困難ではあるが。わたしはさきの論文で「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」という伝統的なマルクスの原則に注目してほしいといったが、そのためにロジン教授は、わたしが、マルクスがのべたところによると「生産から独立したものとして、分配を」考え、「それゆえ主として分配に依存するものとして社会主義を提起する」、「卑俗な社会主義」の誤りにおちいったと示唆している。だがわたしが右のスローガンに言及した目的は、たんにソ連では社会主義が「最終的に確立」されたというソ連の理論と、ソ連が右のスローガンを堅持していることとの間

9820

の矛盾を示すためにすぎなかった。いや、それよりもひどく、ソ連の経済学者たちは、「労働の自然的尺度」すなわち時間に応じた労働の支払いといういま一つのマルクスの方式をもしりぞけていることだ。ところでこの方式は、「今、やっと資本主義社会から生まれたばかりの」社会、つまり「その母胎たる旧社会の母斑をまだ身につけている」社会のために仮定されたものだ。ソ連の経済学者たちは、これら二つの方式の代りに「労働による分配」という原則をたてている。

ロジン教授は、「労働の自然的尺度」である時間を、価値の価格表現、つまり貨幣という手段に明らかに基いている新しい方式と同一であることを承認しているようにみえる。だが、時間と価値とは決して等しくはない。マルクスによれば、価値とは量的関係ではなく、質的関係すなわち階級関係である。マルクスは、商品と考えられる、労働者の労働の内部における使用価値と価値との間の矛盾を分析したことが彼が経済学にたいしてあたえたオリジナルな貢献であり、このことは、経済学がその周囲を回転する枢軸であると主張した。[14] マルクスによれば、剰余価値をつくりだすものは、労働力という特殊な商品の使用価値だ。ソ連の経済学者たちが、ソ連のために復位させたものはまさにこのことなのだ。これは決して「分配の」原則ではないし、分配はソ連の経済学者たちが特に関心するところでもない。彼らは、労働が新しい価値をつくらない場合には、「社会主義社会」でさえ所有したり分配したりすることができないことを知っている。

分配のためのソ連の新しい方式は、実際には、生産の現実を遠まわしにのべた言葉だ。ソ連における階級関係[15]は、彼らに、「剰余労働」を生産の主要な目的にすることを強制している。ソ連の経済学者たちは、独ソ戦争勃発直前にひらかれたソ連共産党第十八回協議会における演説のなかでアカデミシャン[16]で国家計画委員会議長のN・ヴォズネセンスキーによって政学的な正確さをあたえられた経済的現実を理論的な言葉でのべているにすぎない。すなわちヴォズネセンスキーはハッキリとつぎのようにのべた。「一九四一年度の計画は、労働生産力の一二%の増加と一人当り労働者の平均賃金の六、五%の増加を予定している」[17]と。ソ連における「社会主義」の存在をみとめると同時に「労働による分配」の原則をみとめることによって、ロジン教授は、実際上、「社会主義」のもとにおいても価値法則が適用されうることをみとめようとしているのだ。

さて、バラン氏も同様に誤りをおかしている。彼は、ソ連の経済学者たちが「社会主義」のもとで価値法則を承認したのは、たんに「「法則」という観念をめぐる修

9821

辞学上の混乱』の結果にすぎないと断言している。だが、ソ連の経済学者たちのアタマは決して混乱してはいない。彼らは価値法則がソ連に適用されうることを十分な意義をもって承認したのだ。なぜなら彼らは、マルクスが、『資本論』のなかで用いた経済学の諸範疇のなかに経済的現実の理論的反映を見出したからである。だが、価値法則にたいするマルクスの分析は悉く、その特殊な資本主義的な内容にもとづいているのだから、ソ連の経済学者たちは、ソ連が「社会主義社会」だという考えを修正するか、それとも価値法則はただ資本主義社会においてだけ支配するという考えを修正するか、のいずれかを強制されていたのだ。彼らがソ連憲法の代りにマルクスを修正することを選んだのは驚くにあたらない。

ソ連の経済学者たちは、すでに彼らのジレンマを解決した。(19)一方ではソ連が「社会主義社会」だということをみとめ、他方では価値法則は資本主義社会にだけしか支配しないと主張する彼の矛盾を解決するのはまさにバラン氏の責務である。ところが、バラン氏は、将来は経済学の授業のさいには、「教程のパック・ボーンをなしている」事実に関する知識をとりいれるために『資本論』の構成にしたがうべきではないという提案を是認することにとって、彼の矛盾した立場をふかめた。それはたんに事実上の知識をあたえるという問題ではない。『資本論』のなかで最も抽象的な第一巻は、歴史上のデータと統計上のデータとでみたされているではないか。それは、マルクスの辯証法と経済学の間の解きはなちがたいつながりを解きはなすという問題なのだ。それに、価値法則に関するマルクスの考えとの峡別から否応なしに生じてくる。ソ連の経済理論は、窮極的には経済的現実を反映している。バラン氏は、そのかわりに、現実と理論とが、ソ連は「社会主義社会」だという彼自身の仮定を反映していると主張するのだろうか？

(1) 「ソ連におけるマルクス経済学」『アメリカ経済評論』第三五巻第一号（一九四五年三月）一二七—三三頁参照

(2) 「社会主義社会の分配に関するマルクス・エンゲルスの見解」『アメリカ経済評論』第三五巻第一号（一九四五年三月）一三七—四三頁参照

(3) 「ロシアの経済学思想における新傾向」『アメリカ経済評論』第三四巻第四号（一九四四年十二月）八六二—七一頁

(4) 「マルクス経済学の再修正」『アメリカ経済評論』第三四巻第三号（一九四四年九月）五三一—三七頁参照（本小冊子の一）

(5) 「ソ連における経済学の授業」という題で翻訳された。『アメリカ経済評論』第三四巻第三号、

（一九四四年九月）五〇一－三〇頁

(6) 「アメリカ経済評論」第三五巻第一号一一八頁

(7) 「資本論」岩波文庫版第一分冊一四二－四三頁

(8) 「マルクス・エンゲルス・アルヒーフ」（ロシア語、一九三〇年）第五巻三八六頁

(9) エンゲルス「反デューリング論」第三篇「四、分配」の章参照。

(10) ランゲ教授は、マルクスがそうした表現を用いていないところで、デタラメに価値や価値法則に引用符をつけているが、これはマルクスの意味するところをひどくゆがめている。（とくに「アメリカ経済評論」第三五巻第一号参照

(11) 『剰余価値学説史』（モスクワ、一九三二年）第三巻第三部、五五頁（露文）

(12) 『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』（モスクワ、一九三三年）第二巻（七）七頁（露文）

(13) 『資本論』岩波版第五分冊一六三頁

(14) 『資本論』岩波版第一分冊八三頁

(15) バラン氏は、彼がよんだ資料が「反対の方向」をむいているという理由で、ソ連に階級が存在するという、わたしの「理由のない」主張を疑問にしている。それゆえ、彼は、わたしがわたしの結論を所得のひろい隔差にもとづいていると考えている。だが、ソ連における所得の隔差は決して一切の搾取の悪徳から純化されるものではない。それともまた現実的な生産関係を表明するものにすぎない。もしバラン氏が、J・ダーリンの『現実のソビエト、ロシア』（エール大学出版部、一九四四年）や、ビエンストック・シュワルツ・ユーゴフの共著『ソ連の工業と農業における管理』（オクスフォード大学出版部、一九四四年）のなかで、シュワルツ博士がかいた工場管理者に関する章や、マンヤ・ゴードンの『レーニン前後の労働者』（ニューヨーク、ダットン出版社、一九四一年）などの英語の著書から、階級分化が存在している証拠を承認することができないなら、一九三九年の人口調査に関する原資料と、V・モロトフがこころみた職業分類－とくに「インテリゲンチャ」として知られている非階級」グループの分析、第一次五カ年計画の結果とJ・スターリンのこころみた分析、ならびにソ連共産党の大会や協議会の記録を彼に参照させよう。これらすべては、反省のための肥沃な畑を提供している。

(16) ソ連科学アカデミー会員

(17) N・ヴォズネセンスキー『ソ連の増大する繁栄』（ニューヨーク、インターナショナル出版社、一九四一年）

四〇頁

(18) ロジン教授は、『「必要に応ずる分配」という理想の目標にたえず接近しつつあること』に関して彼が提出したただひとつの証拠のなかでひどい誤りをおかしている。彼は、次のように書いている。『取引税の制度によって「個人的な必要」の最少限を保証する努力がはらわれた。この取引税は、基本的な消費財をふくむ消費用商品の引渡価格の「一％ないし二％から純然たる、しかし後者の場合の、「一〇〇％」にまでわたっている』と。だが実のところは、一％ないし二％といった低い税金は消費財にたいしてかけられるのではなく、若干の資本財ならびに生産手段にたいしてかけられる。

取引税は、ロジン教授のすべての考えとは反対の型にしたがっている。すなわち、消費財にかけられる平均税率は五〇％、軽工業の生産物にかけられるそれは二〇、三％、農業生産物にかけられるそれは八二・八％だ。

個々の商品にかけられる税金は、『個人的な必要』の最少限を保証する』傾向をもっとはっきり示している。

すなわち、それはキャラコにたいしては四八％糸にたいしては三七％、パンにたいしては七五％だ。（『財政経済法規紀要』一九三四年第二五号ならびに、一九三五年第六号論文）この公けの文献は、『戦争と平和のためのソ連の経済戦線』（ニューヨーク、ハーパー出版社、一九四二年）のなかでA・ユゴフによって、『ソ連の労働と工業』（ロンドン、マクミラン出版社、一九四二年）のなかで、L・E・ハバードによって、さらにその他多くの著書や論文のなかで英語で取扱われている。

(19) これがたんなる個人的な解決ではなくて、ソ連の公けの理論であることは、ソ連共産党中央委員会の機関誌『プロパガンディスト』という権威ある雑誌のなかで一層はっきりと証明される。同誌の一九四四年九月号には、ソ連科学アカデミーの会員である同誌記者K・オストロヴィティアノフがかいた『社会主義経済とその発展法則』という題の論文がのせられているが、彼は、価値法則はロシアで、作用しているという新しい立場をあきらかにし、こうして、従来標準的だったソ連の教科書『経済学概論――経済学とソ連経済』（ニューヨーク、インターナショナル

9824

出版社、一九二九年）における彼の従来の立場をかえた。

9825

ロシア経済の性格

（訳者注）　本稿はラーセ・ドゥナエフスカヤ女史が、F・フォレストの筆名で「ニュー・インターナショナル」誌の一九四六年十二月―四七年一月号に発表した論文の全訳である。これは、本文の冒頭に女史が記しているように、五カ年計画を分析した彼女の論文（「ロシア経済の分析」ニュー・インター誌一九四二―四三年）の続稿である。遺憾ながら我々は、この第一論文を入手していないが、併し、それは恐らく、彼女の主著「マルクス主義と自由」（邦訳「疎外と革命」）第十三章に再現されていると思われるので、合わせ一読されんことを望む。

――目　次――

序論として―「ただ一つの資本家会社」……二四
一、収得様式……二五
(1) 計画対平均利潤率……二六
(2) 私的所有と資本の代理人……二七
二、反革命（特に一九三五―三七年）……二九
(1) スタハーノフ主義とスターリン主義
憲法……三〇
(2) モスクワ裁判……三一
三、労働……三二
(1) 価値と価格……三三
(2) 「自由な」労働と強制労働……三四
(3) 失業と労働者の貧困の増大……三五
四、資本……三七
(1) 消費手段の生産をギセイにする生産手段の生産……三七
(2) 危機のロシア的品種……三八
五、トロツキーのソ連論批判……四〇
(1) 歴史と理論……四〇
(2) 国有の物神崇拝……四二
(3) 官僚的帝国主義と官僚的集産主義……四五

9826

私は、五カ年計画の動きに関する、入手しうる限りの資料を徹底的に研究した後に書かれた「ロシア経済の分析」(1)のなかで、価値法則がロシア経済を支配していることを示しておいた。この法則は二つの点に現われていた。すなわち、一、生産手段の生産が消費手段の生産をはるかに上廻っていること、二、資本蓄積の増大に伴って労働者の貧窮が増大していること、においてである。公式のロシアの文献に基づくこの研究は、今まで何人の挑戦もうけなかったが、併し、不可避的な結論を引き出してはいなかった。それだから、筆者がロシア経済の性質についての自分の研究の第一部として常に考えてきたこの統計的分析のなかに、既に潜在的にあった結論を十分に且つ明白に引き出すことが必要である。

(1) 「ニュー・インターナショナル」一九四二年十二月、四三年一月号、二月号。これは、このシリーズでは今後「第一部」として引合いに出されるだろう。

序論として——「ただ一つの資本家会社」

資本主義社会のマルクスの分析方法は、深遠且つ明快に、世界市場の法則たる価値法則の支配があれば、あたえられた社会は、次のような条件の一つ或いはすべてが広汎にあったとしても、依然として資本主義社会であることを示している。それらの条件とは、一、生産手段生産部門間の交換が直接に(2)、すなわち市場を経過することなしに行なわれていること。二、生産手段生産部門と消費手段生産部門間との関係が、通常の商業恐慌を生じないように計画されていること。最後に、三、資本集中の法則がその極度にまで達し、全資本が「ただ一人の資本家なり、ただ一つの資本家会社なりの手に」(3)集中されてさえいること、である。

きさしく、マルクスが分析したのは、歴史上に存在したことのない純粋な資本主義社会であったが故に、彼の分析は、あらゆる資本主義社会、だが、資本主義社会のみに妥当性を保持するのである。マルクスの主要関心事は「ただ一つの資本家会社」という抽象でしなかった。彼の関心は、この極限的な発展も決してその社会の運動法則を変えるものではないという事実にあったのである彼がこの抽象を一つの分析点にしたのは、それによって私的資本家社会の限界を、もっと明瞭に観察することができるからであった。本来の資本主義社会からそれが唯一且つ基本的に区別されるのは、収得の方法（method of appropriation）にあるのであって、生産の方法ないし、法則にあるのではないのだ。

9827

(2) マルクス「剰余価値学説史」ロシア語版第二巻第二部一七〇頁（改造社マル・エン全集第十巻二七六頁）マルクス主義運動内部におけるこの問題についての論争は、筆者によって「ローザ・ルクセンブルグの蓄積論」（ニュー・インター」誌一九四六年四月、五月号）でとりあつかわれている。

(3) 「あたえられたある社会でこの限界（渠中の極限）に到達されるのは、ただ一人の資本家なり、ただ一つの資本家会社なりの手に、社会的資本全体が合一された瞬間であろう。」（「資本論」岩波文庫版第四分冊一一九頁）

（訳者注） なお、マルクスのこの文句につきラーヤ女史は「疎外と革命」中に、この「章句が 資本論 の最初の版の中にみられなかったということには、特に留意する必要がある。彼はこの章句をパリ・コンミューン以後にはじめて附け加えたのだが、当時彼はエンゲルスを相手にして、一切の資本が国家の手中に集中されることを論じていたのだ。（同書一八一頁）と解説している。

ロシア国家資本主義—あたえられた、ただ一つの資本家会社

一、収得様式

特殊なロシア国家資本主義の下では、生産手段への法的権利、及び生産手段のための競争的市場が廃止されているのであるから、収得はいかように遂行されているのであろうか？

生産手段の私的所有がロシアで廃止されている限り、ただ「国家資本」の増大のみが国家目的である以上、いかなる企業内部にもその蓄積を許すことは法的観念からの逸脱である。にもかかわらず、「ルーブル統制」とともに、企業は内部蓄積を許された。事実、資本蓄積の関心への刺戟は、企業長基金の設立を通じてつくられたのであった。一九四〇年に内部蓄積は資本投資の三二・五パーセントであったのだ。(4)

しかしながら、これらの国家資本の代理人たちが、この蓄積された資本に対して権利をもっていないからといって、それだから生産が別の動力に支配されていることになるであろうか？

(4) 「第一部」（ニュー・インター」誌一九四三

年一月号）参照

(1) 計画対平均利潤率

スターリニスト共、ロシアが資本主義社会であることを否定する際に、その最善の証拠はロシアが「資本主義の法則、すなわち平均利潤率の法則」に支配されていないことである、と言い張っている。(5)

「資本主義の法則」は平均利潤率ではなくて、利潤率の低下である。平均利潤率は、労働者から引き出した剰余価値が資本家間に配分される方法（メイー）でしかない。(6)この事実から「従って」ロシアは資本主義国でないとする結論に飛躍することはできない。スターリン主義の弁護論者たちが慎重な思案の末に、「資本主義の法則」を利潤率の低下から平均利潤率の達成に曲解したのは、この理由によるのである。

このマルクス主義の修正を彼らの理論的基礎としつつ彼らはロシアが非資本主義国である「証拠」の例証を進めた。曰く、資本は最も採算性の高いところに移るのではなく、国家が指定するところに移動する。かくて彼らは、最大利潤が軽工業で得られるにもかかわらずロシアは重工業を建設することができたのだ、と結論づけるのである。換言すれば、アメリカが最大利潤企業への資本の移動で達成したものを、ロシアは計画によって達成したというのである。

さらに、ロシアにおいては利潤は古典的資本主義におけると同様の意味を有しているのでは決してない。軽工業がより高い利潤を示すと言っても、それはその労働生産性がより高いからではなく、その産業に全く恣制的な「利潤」をあたえる取引税の賦課によるのである。現実には、それは単に、産業からではなくて国家という媒介を通じて、賃金として労働者にあたえられた、何か「余分（キストラ）のもの」を吸いあげることでしかないのである。重工業の通路を通じては、労働者は、その生産物を食うことができないから同じことをすることはできないだろう。これこそ、なぜ、この「利潤」が、資本をも安本の各個の代理人のいずれをも誘引しえないかの理由なのである。これこそ問題の核心なのだ。

資本の個々の代理人は最も「採算性」の高い企業へ動こうとしないし、資本自体としても動かないというのはまさしく利潤とか損失とかの言葉が異なった意味を帯びているからである。全く同じ理由のために、古典的資本主義の特徴は逆になっているのだ。即ち、個々の代理人の剰余価値の取り分は重工業においてより大きいものである。十億ドル・トラストの支配人の給与は、そのトラストが利潤を示しているか否かではなく、基本的には彼

9829

が経営している資本の大きさに依存しているのである。

国家資本主義は、資本主義の自由競争、独占、国家独占の諸段階を通じて、その生涯に、しばしば起ったように、収得の様式に変化をもたらしている。資本の個々の代理人は彼の特定工場から直接に抽出された剰余価値を実現したことは一度もない。彼は彼の個人的資本がこの総資本に及ぼしうる圧力の程度に応じて全国的剰余価値の配分にあずかってきたのである。

（訳者注）〔平均利潤率の成立〕ロシアにおけるこの圧力は、競争を通じてではなく、国家計画を通して働いている。だが、資本家同志、或いはお望みなら国家の代理人同志の間の、この闘争なり協定なりは、その血と汗が、この全国的剰余価値に凝結しているプロレタリアートにとっては、どうでもよいことである。(7) 彼にとっての問題は、ボスの「機能」を果たしているものと彼との関係である。

(5) 「経済学教授上の諸問題について」（「マルクス主義の旗の下に」一九四三年七・八号）―筆者によるその全文の英訳は、「アメリカン・エコノミック・レヴュー」一九四四年九月号を見よ。

(6) 「周知のように、一個の資本家が、利潤の形でうけとるものは、彼自身の企業で使用している労働者によって直接つくり出された剰余価値ではなく、全国を通じてつくり出された全剰余価値の中から彼自身の資本額に比例して分け前をうけとるのである。完全な〝国家資本主義〟の下では、この平均利潤率の法則は、異なった資本間の競争という迂遠な道をとらず、即座にかつ直接に国家の簿記を通じて実現せられる。」（トロツキー「裏切られた革命」論争社版二三七頁）

(7) 「彼〔資本家〕がそうする〔利潤の全部を収得する〕か、それとも一部分を法的所有者として第三者に支払わねばならないかは、労働者にとっては全くどうでもよいことである。かようにして、二種の資本家の間への利潤の分割理由が、知らぬ間に、分割されるべき利潤の存在理由に、即ち後に行なわれる一切の分割は別問題として資本がそのものとして再生産過程から引出す剰余価値の存在理由に転化される。」

（「資本論」岩波文庫版第十分冊七九―八〇頁）

(2) 私的所有と資本の代理人

異なった搾取的経済秩序を相互に区別するものは、所

9830

有への権利でも個人の動機でもなくして、その生産の方法或いは剰余労働抽出の様式のちがいである。基礎的なものが、もし所有への法的権利だとするならば、「ロシアには私的所有がないのだから、人による人の搾取はないのだ」というスターリニストの言は正しくなるであろう。

だが、「社会主義経済」という立派な正面玄関の背後には「いかなる階級にも属さないインテリゲンチャ」が立っている。(8) この支配階級の上層部の比重は、この論文の「第一部」でみたように、総人口のたった二・〇五パーセントをしめているにすぎないのである！

国家及びその産業の代理人として行動する個々人は、ちょうどアメリカのある資本家が生産手段に対する彼の法的権利をこの工場の労働者に譲り渡すことが自由であるように、蓄積過程への参加を拒否するのは、もちろん理論上は自由である。アメリカだったら彼はカタリナ島へでも隠退して暮すか、わるくすれば気狂い病院にでも送られてしまうだろう。ロシアなら、彼は「消され」るであろう。併し彼は拒否しはしない。彼は事実そうであるように、資本の代理人として、労働者から疎外された死んだ労働の代理人として正確に行動し、労働者を抑圧するのである。ロシア人が婉曲に「機能的」と称している両者間の階級差は、一方がゼイタクに他方がみじめに暮らしている在来の資本主義社会のソレと異なった様子がなさすぎる位、表面に現われている。ロシアにおいては資本の代理人が工場を「所有」していないというのは本当である。だが、私的財産は、利子付き債券、豪奢な邸宅、別荘、家財を買う無制限の権利のなかで承認されている。国家債券は総量がどんなに多額になっても相続税や贈与税をうけない。私的財産のすべての形態が直接の子孫へ遺される。ヨリ高級の教育機関は、授業料のゆえにプロレタリアートには無縁の代物と化し、これらの所有権なき工場経営者たちの子女を歓迎して、彼らに支配階級の子女にふさわしい地位を保証する。だが、これは工場内の関係の完全な付随物なのである。

労働者の賃金をきめるのは、官僚の呪まぐれでもなければ、競争的資本主義における産業資本家の「意志」でもない。それは両者を支配している価値法則である。

価値法則、すなわちロシア経済の運動法則は、富の両極化、資本の高い有機的構成、一方の極の貧窮の蓄積と他の極の資本の蓄積にまで達している。これは、労働者を生産手段の管理から引き離したことから発した、一つの与えられた単一資本家社会であり、世界資本主義の諸法則によって支配された一経済である。

だが、私的所有が廃止されたばかりか、資本家が収奪されたというのに、どうしてこのようなことが起り得た

のだろうか？

(8) 「第一部」（ニュー・インター誌　四三年二月号）を見よ。

二、反革命（特に一九三五年――一九三七年）

一方に、世界市場に取り巻かれ、他方に、ヨーロッパ先進国のプロレタリアートが革命を起してロシア・プロレタリアートの援助にかけつけてくることができなかったので、価値法則がその支配を再び主張するの仕難けられないことであった。レーニンが出席した最後の党大会（第十一回大会）で警告したように、「ロシア市場と、われわれが従属し、これと結びつき、われわれが、これから切り離されることができない国際市場」（邦訳レーニン全集第三三巻二八〇頁）を真正面から検討することが必要である。

反革命は、武器を手にして「公然」と現われたわけではないので、それを認知するのは困難であった。機構の官僚化とプロレタリアートによる国家の政治的統御の喪失に伴って、生産関係が変質して行った。実際、官僚を一つの階級として最終的に地固めさせる基礎をなしたのは、この変化しつつある生産関係だったのである。

生産関係の最初の変化は、目につかぬ形であらわれた。第一次五カ年計画の採用とともに、すべての企業が国家企業となり、自動的に「社会主義」のレッテルがつけられたために、労働監督官は労働者の利益を擁護しなくなった。最初に左翼反対派、次にトムスキー指導部（ブーリン派）に取って代わった労働組合の指導者達は、労働者の福祉を「社会主義」経済の利害の上におく「右翼的労働組合主義傾向」に反対して叫びたてるべく手ぐすねを引いていた。一九三一年、国家が、自分が働いている工場の企業長の許可なしに転職はできないと労働者に告げたとき、労働組合は黙従していなければならなかった。一九三二年に、労働者の配給券と居住権が工場の企業長の手中に渡されたとき、労働組合は、この方策を「労働規律」を確立する上での必要な措置として歓迎した。労働者生産会議は、すべての労働者が「一人一人にいたるまで」経済経営に参加できるように初期の労働者国家によって設立されたのであるが、めったに開かれなかった。一九三四年に、労働組合は国家の行政機構の一部にされた。

だが、生産手段の管理からの労働の最終的絶縁は、単に法的条例によっては、憲法上の言明をはるかに超えるまでに達成されはしなかった。この言明は、生産手段は「全人民」に所属し、労働者に生産手段に対する管理を

9832

を自動的に与えることができるとされているものであるスターリンは、経済のこの二重的性格が、一方の極から他方の極へと彼の支配を荒々しくゆさぶることに早くから気がついていた。工場経営者達への演説の中で、スターリンは「非個人化を終らしめよ」というスローガンを打ち出した。これは産業上の用語にホンヤクすれば、「よりよき仕事に対してはよりよき給与を」ということだ。「よりよき仕事に対してはよりよい給与を」には苦痛となるもの、すなわち、スタハーノフ主義のような、はずみによってのみ勢いを得ることができる出来高賃金制を必要とした。そしてそれは一九三五年に始まったのであった。(9)

(9) 「第一部」中の「非個人化の終了とスタハーノフ主義の開始」の節（ニュー・インター誌　一九四三年二月号）参照。

(1) スタハーノフ主義とスターリン主義憲法

どの単一社会においても、それに相応する技術的構成を必要とする、先進資本主義諸国の資本の高度の有機的構成は、大衆消費財生産の分野での犠牲を要求する。それから生ずる乏しい消費手段の分配がプロレタリアート全体の犠牲に終るのは、価値生産の「当然」の結果にすぎない。そしてその「結果」は、つぎつぎに、経済の資本主義的運動に推進力をあたえる特定の関係を生み出す資本主義社会における労働者の「過少消費」は単に道徳的問題ではない。一度び労働者がこの状況におかれれば不変資本の可変資本に対する関係は一定の方向に動く、ということはマルクシズムの精髄であった。これは小ブルジョアの最も理解しにくい点である。

マルクスは、出来高賃金制は、資本主義的生産様式に最も適したものだと言った。スタハーノフ主義的出来高賃金制は、ロシアで支配している生産様式に最適なものであった。これらの一日一日の記録破り達は、すぐに、裏口からではなく、玄関部屋から工場に入ってきた、というのは、玄関部屋を占領しているのは彼ら自身だからだから。政治官僚はこの「生産インテリゲンチャ」のなかに「法定推定相続人」をみつけた。まもなくこの二つのグループが一緒になって新たな「どの階級にも属さないインテリゲンチャ」（Classless intelligentsia）を構成した。

スタハーノフ主義は労働貴族の発達を可能にした。併しそれだけではない。労働貴族は支配者側にとってよりよき支柱を意味した。しかし単にそのいずれかだけでもなかった。否、スタハーノフ主義を官僚の「相続人」のための基礎ないし培養土壌としながら生産過程に対する

支配がすすむにつれて官僚は一つの階級としての安定を感じはじめたのである。階級の安定を感じつつ、また産業経営者からの補充源をもった官僚は、ゾロレタリア独裁の法的清算へとまっしぐらに突き進んでいった。十月革命に対する反革命を合法化するために新しいこの階級は新しい憲法を必要としたのである。

一九三六年のスターリン主義憲法は、労働者や農民から区別してこのインテリゲンチャを特殊な「グループ」とみなした。この新たな階級の存在の法的容認と共に、「泥棒や横領者」から国家財産を保護する保証も行なわれた。

さらに憲法は、労働に対する支払いのロシア的方法を原則にまで高めた。新たなスローガンは、「各人からはその能力に応じて、各人にはその労働に応じて」である。この一見無意味なスローガンは、実際には、価値に応ずる労働支払いという根拠ある資本主義的方法の一表現にすぎないのである。この真に経済的な法則の自由な機能を保証するためには、十月の支配の残存物を、たとえこれが若干の人々の思い出の中のものにすぎなかったとしても、根絶することが必要となったのだ。

(2) モスクワ裁判

一九三七年のモスクワ裁判は、われわれがみたように早くから変化した生産関係の中で発達してきた、反革命の頂点であった。この闘争では一方しか武装していなかったのだから、武器を手にするよりはむしろ秘刑吏のナワで十分であった。十月革命は、それを指導した古参ボリシェビキの処刑によってばかりか、生産過程のなかに新たな階級のための場所を清めることによっても根絶され、労働者国家はテンプクされたのである。その場所が「いかなる階級にも属さないインテリゲンチャ」のために清められえたのは、生産方法がそれをよび起した処にそのような階級が存在していたからこそありえたのである。

ロシアの労働者は、工場企業長達の仕事が、ロシア人が十分婉曲にいっているような、単なる「機能的」なものでないことを知っている。工場企業長達は、さらに彼がボスであるが故にボスのようにふるまう。この国家はちょうどU・Sスチール会社の社長がともに同じ会社の「使用人」だからといって鉄鋼労働者と似ていないよりも、もっと労働者国家とは似ていないのだ。反革命は勝利したのだ。

だが、反革命の勝利の因になったのは、法律ではなかった。これらの法律の累積は、単にソビエト国家における労働の役割りと生産過程における変化の累積を証言するものでしかない。

反革命は「ボリシェビズム」の子供でも、私生児ですらない。反革命は、スターリン主義の中から、そしてまた帝国主義的世界経済によって燃え立たせられた「新たな」生産様式の正統嫡子である。なかんづく、研究を要するのは、この生産方法であって法的条例ではない。この研究のうちにわれわれは、どの資本主義経済におけると同じように、二つの相争う主要な力は資本と労働であることを見出すであろう。

三、労　働

「こうした体制〔国家資本主義〕の経済法則はちっとも神秘ではない」(10)

マルクスの価値論、したがって剰余価値論の内的精髄は、労働力が価値で買われる商品であるということである。一九四三年に至るまでは、ロシアの理論家たちは、資本主義的生産の支配的法則たる価値法則が、社会主義が「最終的に確立された」ロシアで機能していることを否定してきた。だが、第二次大戦中の一九四三年にこの立場の驚くべき修正がこの国の指導的理論誌たる「マルクス主義の旗の下に」で刊行された。(11)　この論文の著者達は、政治経済学の「教授」が数年ぶりに復活されつつあると述べ、政治経済学の「教授」の際に教師たちが従うべきいくつかの原則を見出している。しかしながらこの論文をざっと見るだけで、逆転されつつあるのは教授方法ではなく、教えられる政治経済学そのものであるのが明らかになる。

スターリン主義理論家たちは、ロシアにおける価値法則の作用の否定が「社会主義の下での（貨幣、賃金などの如き）範疇の存在を説明する上で、打ちかちがたい困難をつくり出したことを認容している。今や価値法則の作用することを認容したからには、それと共に、進んで剰余価値法則の作用の認容をもたらさなければならない。だが、すべての支配階級の弁護論者と同様に、彼らはこの承認を拒否する。従ってこれは彼らのディレンマなのである。われわれは、ここでは、それにかかずらわってはおれない。(12)われわれにとって、ここでの関心事は、価値法則が実際にロシアで働いていて、従って、貨幣が「価値の価格的表現」だということの容認なのである。

(10)　トロツキー「裏切られた革命」（論争社版）三七頁）

(11)　「マルクス主義の旗の下に」（ロシア語）一九四三年七・八号

(12) このディレンマを解決しようとする彼らの試みの分析は、私の論評「マルクス主義の新修正」（本パンフレット所収）を見よ。また、この国（アメリカ）のスターリン主義的弁護論者たちがこれに加えた攻撃に対する私の反論「マルクス主義の修正か再確認か？」（本パンフレット所収）を見よ。

(1) 価値と価格

すべての資本主義諸国におけるように、ロシアにおいても貨幣は、消費財の需給のうちに、価格と賃金を通しくせしめるための手段をなしている。すなわち、労働者の価値は彼の生存と家族の再生産に要する生計手段に一体化されている社会的必要労働時間に等しい。消費手段の生産が大衆の扶養に十分でありさえするならば、価格は、消費財の需給価格と賃金総額が等しくなるまでは、不可抗的に諸法則拘束に穴をあけるだろう。ロシアにおける価格の固定は、物価においても賃金においても安定を確立しはしなかった。一九三五年の配給制度の廃止は大幅な価格の騰貴をもたらしたので、低い配給価格の下で辛うじて生計を立てていた労働者は、「単一物一価格」の下では全く暮せなくなった。従って、国家はやむなく賃金の全般的引上げをせざるを得なくなり、その結果、第二次五カ年計画の終了までに賃金は計画を九六パーセント上廻るに至った。

価格は国家によって決定されているので、「価格法則に従って決定されるのではなく、〝計画生産〟に基づいた政府決定に従って」決められるのだ、というあやまった考え方(13)は、価格を支配している経済法則を考慮に入れていないものである。ロシアにおける価格のスケジュール（予定計画）の一時の試験すらも次のことを示したのである。つまり、消費財にかかる莫大な税負担が結果する偏差を考慮に入れても価格は恣意的に定められているのでもなければ、また、もちろん使用価値に応じて定められているものでもなくて、資本主義国と「認められている」国に広汎に行なわれているのと同じ特異性を示しているのである。すなわち、価格は価値法則によって決定されているのである。(14)

(13) 「ニュー・インターナショナル」一九四一年十月号のケントの一文参照。

(14) これは遂にスターリニストによって認められた。彼らは書いている。「価値法則の意識的利用に基づいた計算は社会主義下の経済の計画的指導にとって不可欠の方法である。……社会主義社会における商品の価値［原文のままだ！］は、その

9836

生産に実際に支出された労働単位によって決定されるのでなくて、その生産及び再生産のための社会的に必要な労働の量によって決定される。」
（「マルクス主義の旗の下に」一九四三年七・八号）

(2)「自由な」労働と強制労働

その測定単位が社会的に必要な労働時間で、その生存様式が技術革命に包まれており、凝結した剰余労働に対するその食欲が飽くことを知らぬ本性から出ているような社会においては時間が悪の核心である。機械時代はそこで、この知恵をその受託者たるブルジョアジーに伝授した。諸君の生産の車輪を早く回転させたいなら「自由な労働」を使い給え、と。

あたかも自分たちが、「本当は」資本家ではないことの証明であるかのように、ロシアの支配者はこの初歩的な知恵を無視して、賃金奴隷を法的規制によって完全な奴隷に仕立てあげようとした。一九三二年、全政体がぐらつき、労働は騒がしく落ちつきを失い、生産が最低点にあったとき、たった一日の欠勤を理由にして労働者を解雇したり、家から追い出す権利を有している工場企業長の手中に、労働者の配給カードを移譲する法律が制定された。この法令は所期の目的を果たし得なかった。労働が工業にこようとしなくなり、やっと来たと思ったらできるだけ少なく生産してからすぐ出ていってしまったのである。工業は労働を必要としていたので、工場企業長たちは、欠勤や生産を落しても労働者を解雇するのを「忘れてしまった・・」。

一九三二年までには、農業危機とそれに付随して起る失業と飢餓のために都市に労働が大量に流れ込んで、工業経営者に「あたりまえの」ブルジョア的やり方で労働に規律をあたえる余裕をもたせるようになった。一九三三年に労働予備軍が達成したものは、一九三五年にはスタハーノフ主義というスピードアップと出来高賃金制によって達成された。

これら「あたりまえの」やり方は、当然の結果、すなわち階級闘争をもたらした。労働者の間のわき立つ反抗は、モスクワ裁判の上演中に無慈悲に粉砕されたが、それは生産内部のなお一層の混乱と都市からの労働者の大量逃亡をうんだ。一九三八年には国家は死にもの狂いになった。一九三二年の法律が復活され「改善」された。これも依然として効果がなかった。一九四〇年にいたって国家労働予備軍がつくられ、それと共に「矯正労働」の機関が生まれた。それによって、規律に従わない労働者は二十五パーセントの減俸で、六ヵ月間働かされた。

国家をその手中にしているが故に、支配者たちは、経済外的手段で労働を価値生産の必要にむりやり従わせるのも自分たちの権限内のことだと考えている。生産の国有化は労働者の自由な移動の制限となって結果している。

それは不断に拡大する生産によって要求される労働生産性の増大を達成させなかった。

「自由な」労働を意味する高い労働生産性への生産の必要と、これを温室的やり方で育てようとする法的規制への依存との間には、絶えず引っぱり合いがある。一方では数百万人の労働者が強制労働者として囚人キャンプに入所する。他方では多くの労働者が放免されて「自由な」労働軍に復帰する。「矯正労働」という現象は、囚人労働への依存と工場内でのある種の継続的生産権をうる必要との妥協の結果である。

労働もまた巧妙さを発揮している。公然たる反抗ができないところでは「消えて」しまうか、生産速度を非常に落としてしまうので、一九三八年の生産は一九三五年を下廻った程度である。[15] 増加率が事実上止まってしまった時期すらあった。その間ずっと雇傭率がきわめて高かったにもかかわらずである。[16] 戦争中、労働犯罪が余りに広がったので、国家は第四次五カ年計画を実施に移すに十分な労働をえようとするならば自ら制定した法律を無視せざるを得ないことに気がついた。そこで、すべての労働犯罪人に全般的な特赦が宣言された。

かくて、国家が法的規制によっては賃金奴隷を完全な奴隷に変えることができないと気づいた一方、労働者は自分が資本主義の競争市場でもっていると同じタイプの「自由」をもっていること、すなわち、生活手段を手に入れようとするならば、自分の労働力を売らなければならないのだということに気がついたのである。

(3) 失業と労働者の貧困の増大

労働力が価値で支払われるということが価値法則の最高のエッセンスであるのと同じように、労働予備軍は可変資本に対する不変資本の優位という法則の最高のエッセンスである。確かに生産がより拡大すれば労働軍の絶対的増加であるが、そのことは労働の資本への吸引と反発を支配する法則が不変資本と比較した場合の生きた労働の減少の法則であるという事実を、何ら変更させるものではない。マルクスが失業軍を「資本主義生産の一般的絶対的法則」とよんだのはこの理由によるのである。

ロシアにおいては、失業は一九三〇年以来公式には廃絶されたことになっている。だが、一九三三年に、ロシア人のきわめてデリケートな言い方によれば、「工場のうちには、計画に従って必要とされる人数よりもより多くの労働者がいる」ことが暴露された。飢餓に苦しむ農村からの流入が極めて膨大な量に達したので、労働旅券制が導入され、旅券をもたないものは誰も大都市の居住を許可されなくなった。一九三五年のスタハーノフ主義と一九三七年の血まみれのモスクワでっち上げ裁判が、こ

[15] 「第一部」中の「労働者と法律」の節を見よ。（ニュー・インター誌　一九四三年二月号）

[16] フランツ・ノイマンの指摘によれば、同じタイプの「自由」がナチス・ドイツ下のドイツ労働者にもあった。彼の "Behemoth" を見よ。

9838

の様相を正反対のものに変えた。都市から農村への大量脱出の結果、一九三九年の国勢調査によれば、全人口の六七・二パーセントが農村に住み、一億一四六〇万人の農村居住者のうち、七八六〇万人が農民であった。かくも高い農業人口のパーセンテージをアメリカで見つけようとするなら、南北戦争より以前の時期にまでさかのぼらなければならないであろう！

ロシアは後進的だが、その後進性はかくもひどいものなのだろうか？　労働生産性が極めて低いのではあるがこんなにも低いのだろうか？　それとも、失業率が農村に潜んでいるということなのだろうか？　後者がこの国の実情であるということが、国家労働予備軍創設にあたって、余剰労働力を求めてコルホーズに呼びかけた「偉大なる指導者」自らによって暴露された。スターリンは語った。「コルホーズには、その機械化が進めば農村における労働者の一定部分を解放するが故に、われわれの要求を満足させる十分な可能性がある……」

在来の資本主義にとって不可能であったように、ロシアにとっても失業を一定の歴史的期間にわたって避けることは不可能であった。というのは、この単一資本主義社会は自らの工場をより先進的な生産システムの水準にまで高めるために全神経を張りつめているからであり、それをなしうる唯一の途は、できるだけ多くの価値を生産するために、できるだけ少ない生きた労働を使用することだからである。これが、ロシア国家資本主義はその全算定の基礎として、過渡的社会においてのように、労働時間の総量に求めるのではなく、基本的に賃金に、即ち労働者の価値に求めざるを得ない所以なのである。これはロシアの経済の後進性によって更に一層悪化されてきているので、ここにわれわれはマルクスが「資本論」第三巻で指摘した(17)極端な状態と向い合うのだ。生産増大に十分なだけの剰余価値をうるために、農業人口のある部分は家族単位で支払いを受けている。(18)

労働者の状態は不断に悪化してきた。五カ年計画の開始以来、労働者の実質賃金は、私が部分的に示したように、半減してしまった！　それは全く偶然的なことではない。それは極めて高い資本の有機的構成を結果した経済の運動法則の不可避的結果である。生産物を資本の形で生産する階級の側の貧困の蓄積は、資本の蓄積から必然的に生み出されるものである。

(16)　「資本論」岩波文庫版第九分冊四二頁

(18)　所得の統計は「農家一戸あたり」である。「家族単位あたり」の人口統計は小児労働の隠れ家になっている。

「第一部」（ニュー・インター誌　四三年二月号）参照。

9839

四　資　本

資本とは、マルクスによれば、ものではなく、ものの媒介を通じて打ちたてられる生産の社会的関係である。この搾取関係を打ちたてる媒介物は、周知の通り、直接的生産者すなわちプロレタリアートから疎外され、彼らを抑圧する生産手段である。労働者に対する資本家の支配は「生きた労働に対する死んだ労働の支配」にほかならない。可変資本に対する不変資本のこの大きな優位の物質的表明は、消費手段生産に対する生産手段生産の優位である。資本主義社会ではこれ以外はありえない。というのは、生産された使用価値は労働者ないし資本家の消費のためのものではなく、資本による消費、すなわち生産的消費または拡大生産のためのものだからである。労働者から引き出された剰余価値の大部分はこの拡大生産のなかに回帰する。

ロシアの搾取者たちは、総体としての剰余価値は、ひとえに生産物の価値と労働力との価値との差によって決定されるという事実をよく承知しているので、一九四一年の計画は、労働生産性の一二パーセント上昇毎に労働者の受けとるべき賃上げは六、五パーセントにすぎないと公然と規定するに至った。「労働生産性と平均賃金との比率は」と厚かましくもヴオズネセンスキーは宣言した。「生産費を低減させ、社会主義的（！）蓄積を増大させる基礎を提供し、急速な生産拡大を実現するために最も重要な条件をなすものである。」09

09 Nヴオズネセンスキー「ソ連邦の成長する繁栄」（ロシア語）参照。

(1)　消費手段の生活をギセイにする生産手段の生活

労働生産性と労働賃金との大きな差はどんどん拡大生産に流れ込む。国家計画委員会議長のヴオズネセンスキーによれば、一九二九年から四〇年の間に、一五二六億ルーブルが工場、資本設備に投下された。一九三七年の総国民所得のうち、二六、四パーセントが資本財に投入された。一九四二年の計画は、国民所得の推定二八、八パーセントを生産手段に投資するように要求していた。

ロシアにおいて、資本財に投入される生産の割合がどんなものかについては、一九二二年から一九三二年の十年間にアメリカでは国民所得の僅か九パーセントが生産手段拡張につかわれたにすぎないという事実と比較すれば見当がつくであろう。計画が初められた頃の生産手段の生産は総生産の四四、三パーセント、消費手段の生産が

9840

五五、七パーセントであった。第一次五カ年計画終了までには、この数字は入れ変った。すなわち、生産手段が五二、三パーセント、消費手段が四六、七パーセントであった。第二次五カ年計画が終了するまでには、この比率は五七、五パーセント対四二、五パーセントであった。一九四〇年までには、生産手段が六一パーセント、消費手段が三九パーセントとなっていた。これは現代世界資本主義の真相なのだ。

「資本主義国に追いつき追い越せ」というスローガンは、現在の世界経済を強制する動力、すなわち誰れが世界市場を支配するか、ということの反映である。ここに消費手段をギセイにした生産手段の成長の秘密がある。ここにこそ、「労働者階級の状態の一層の改善」と自称するものへの「国家の願望」にもかかわらず、大衆の生活水準が悪化して行く原因があるのである。

単一資本家社会は、私的資本家で構成されている社会と同じ法則の支配を受けないと考える人たちの根本的誤謬は、彼らが　市場で生起することは、生産過程に固有の矛盾の結果にすぎないのだ、ということを理解できない点にある。単一資本家社会は無限の市場をもってはいない。消費財の市場は支配者のゼイタク品と価値で支払われた労働者の必需品とに厳しく制限されている。クライシス(恐慌)の最も内面的な原因は、労働者が市場においてではなく、生産過程において、それ自身よりも大きい価値をつくり出すということである。だが、全資本が国家の手に集中されているなら、労働者（スタハーノフ主義者ではなく総体としての労働者階級）の生活水準をあげることが可能ではないだろうか？何という結構な幻想だろうか？それを行なった瞬間に、商品の生産費は、まわりをとり囲んでいる世界市場のコストを越えてしまうのだ。すると次の二つのうちのどちらかが起る。すなわち、商品が価値生産経済からの廉価な商品に太刀打ちできずに生産が停ってしまうか、それとも、たとえ一時的に自らを隔離したとしても、最終的には、全面的帝国主義戦争という資本主義的競争の現在的形態で、より能率的な資本主義国に打ち負かされてしまうか、である。

わが、特殊な単一資本家社会は、いくつかの高所に近代的な工場や派手な地下鉄をつくってはみせたが、依然として労働者大衆の生活水準向上のために立ち止まってはいない。できないのである。資本がそれを許さないのだ。この故にこそ、その経済は絶えまのない危機にあるのである。

(2)　危機のロシア的品種

周囲の世界では資本の価値が不断に下落しているが、

これはソ連社会内部の資本の価値が不断に下落していることを意味する。官僚の帳簿上ではそれは十分な下落を示さないかもしれない。けれども、生産物の実際の価値は世界市場におけるこれと対応する製品の価値以上ではありえないのだから、フォードのトラクターがスターリングラードのトラクターと並べられた途端に、国家は自家製品の価格を引き下げなければならなかった。これは一九三一年に起ったことだが、世界のトラクター生産高の九〇パーセントを輸入しながら当時のロシアは、彼ら自身の生産するトラクターを生産費以下で売ったのである。しかし、より一層重要なことは——ここにこそすべての経済的範疇を社会的範疇として分析するマルクス主義の精髄があるのだが——帳簿の上で価値がどのように現われようが、生産過程における生産手段が労働者との関係でその真の価値を露呈してしまうという事実であるつまり、もし時代おくれの機械が破壊されずに依然として生産に使用されつづけていると、生産の最高主権者がそれにもかかわらず、世界市場で定められている社会的必要労働時間で生産するよう待ちうけているのだから、労働者はそれだけ余計に苦しむのである。

価値法則によって支配された世界市場の無法則的法則の枠内に、できるだけ生産体制を維持するために、労働者への支払いは彼の生存に必要な最小限だけに押え、彼から最大限の剰余価値を搾り出す必要に計画の作成が支配されているかぎりは、たとえ諸君がこの社会秩序を何んとなづけようとも、そこには資本主義的な生産関係が依然として存在するのである。かくてスターリン会社に

とそは、総資本の個々の構成部分を相互に調整し、さらにこれを世界市場と調整させたりする絶えざる必要に基づいて、突然の停滞や危機なしに生産体制を導いていくことは絶対に不可能なのだ。彼らは普通の型の商業恐慌はさけることはできた。だが、他面危機が襲った時には、それらはそれ以上に暴力的であり破壊的であった。一九三二年及び一九三七年がそのような事例であった。そして現在も一つの危機が熟しつつある。第四次五カ年計画は、国が一方で資本設備の二五パーセント、他方で二五〇〇万の家庭を失って苦しんでいる時、新たな粛清の波の真只中で開始された。そして、「平和」が到来した今となって、それらすべての上にそびえ立っているのは、原子エネルギーの最新且つ最大の発見に足並みを揃える必要がある。これはすべてロシア経済を絶え間のない混乱状態におくことになる。この混乱の背後には価値法則が、従って剰余価値法則があるわけだが、これこそ世界資本主義を死の苦悶に追いこむものである。この法則がその本質において、また、その本質的な現われ方において、ロシアにも支配しているとすれば、ロシアは資

本主義以外のいかなる社会であり得るのだろうか？

五、トロツキーのソ連論批判

トロツキーは、ロシアは国家資本主義社会かも知れぬという考えを、理論的には考えられるが、現実的には、「歴史上はじめて生産手段が国家の手に集中されたが、それは、プロレタリアートが社会革命の手段でもって達成したのであって、資本家が国家のトラスト化の方法でおこなったのではない」(21)ということを根拠にして斥けたのであった。

歴史的には国有が労働者国家所有として出現したのはもちろん真実ではあるが、だからといってその二者「国有と労働者国家有」を同一視したり、歴史的事実を理論的抽象に変形するトロツキーを、正当化していい理由はないのである。

(21) 「裏切られた革命」論争社版二三九頁

(1) 歴史と理論

ソビエト国家の初期に、レーニンは「過渡期の現実」を熟視する代りに、それを理論的抽象に変形しようとした人達と激しく争った。トロツキーとの労働組合論争(22)において、レーニンはトロツキーに対して「……抽象論義に夢中に」ならずに、そして、われわれは労働者国家をもったのだからもう労働者の第一の関心事は生産にあるべきだ、とするのは間違っているということ、それを理解するべきであると警告したのであった。レーニンは労働者は次のように言う権利があると主張した。

「……君たちは生産に従事せよだの、生産の成果のうえで民主主義を発揮せよだの、筋ちがいの話で肝要な問題からそらしている。だが、私が生産に従事したいのは、こんな官僚主義的な構成の管理部や中央管理機関などの下ではなく、それとはちがった構成の下である。」(23)

さらにレーニンが次のようにつづけているのを忘れてはなるまい。「あらゆる民主主義は、一般にあらゆる政治上部構造（階級の廃絶がおわらないうちは、無階級社会がつくられないうちは、不可避的な）と同様に、結局生産に奉仕し、当該社会に一般的な生産関係によって規定される。」(24)

社会秩序の分析における、生産関係の第一義的な強調は、理論的なものであれ、ソ連の日常的分析のものであれ、レーニンの全著作を赤い糸のように貫ぬいている。ブハーリンの「過渡期の経済学」についての、彼への論争においても、レーニンはブハーリンの資本主義生産関

9843

係は復活させられ得ないという仮定、従って樹立された労働者国家の実際の発展過程を熟視しないことに対して強く反対した。ブハーリンが「資本主義生産関係の崩壊が、ひとたび現実上に起り、この崩壊の継ぎ目しの不可能が理論上に立証されたら……」と書いた箇所に、レーニンは次のように評言を書き込んだ。「〃不可能〃はただ実践的にのみ論証される。著者は理論の実践に対する関係を弁証法的にみない。」[24]

レーニンに関する限り、プロレタリアートの独裁は、それは過渡的国家であるが故に、「社会主義へか、それとも資本主義への逆転かのいずれにも」移行できるものであって、それは大衆の歴史的イニシアチーブと国際情勢に依存しているということに、気づかっていたのである。それだから、彼はわれわれは常に次のことを知っていなければならないとしたのである。すなわち、第一に内的条件としては「ただ一つの道は、下からの変革で、われわれは労働者自身が、下から経済条件に関する新しい原則を作成するのを願った」[25]ということであり、「第二は、外的条件として、われわれは「ロシア市場と、われわれが従属し、これと結びつき、われわれがこれから切り離されることができない国際市場」を決して忘れてはならぬ、ということである。われわれが現在なしうることは、「外国の同志が革命を徹底的に準備している間」時をかせぐことだけである、と。

レーニンの死後、まずトロツキー自身が、資本主義復活の可能性に対して警告した。彼は、単にネップの無拘束な継続が資本主義の復活を「分割払い」式にもたらすと主張しただけでなく、私的利権が廃絶され、計画経済化が制度化した後になっても、それを降伏の理由として用いた一部の左翼反対派を厳しく叱正したのであった。彼はラコフスキーの次の声明に同意したのであった。

「降伏者たちは、工業化や集団化が、予期に反した結果をもたらさないためには、いかなる手段を採用しなければならぬかということを考慮することを拒否している。

彼らは主要な問題、すなわち五カ年計画は、この国の階級関係にどのような変化をもたらすか、ということを考慮に入れていないのだ。」[26]

プロレタリアート自身だけが自からの有利な方向に経済法則を導いて行くことができるのであるから、労働者自身が参加していなければ、それ以外のどんな計画によって経済法則の発展が許されようとも、十月の獲得物はむきずには残りえないと言ったことを、ラコフスキーは理解していたのである。これこそ彼が、プロレタリアート以外の支配階級が「われわれの眼前で」、結晶化しており、「この特異な階級の動力は、私有財産の特異な形態たる国家権力である。」と予言的に警告した所以なので

ある。(27)

この思想と分析方法の明晰さは、国家的所有制の物神崇拝化への転化の過程のなかで埋葬されてしまったのだ。

(21) 不幸にしてトロツキーの見解は英語にはない。ロシア語でならジノビエフ編「党と労働組合」の中に、シリヤプニコフを含めてその他の論争参加者の見解と共に見つけることができる。レーニンの見解は英訳されていて選集第十一巻に見つけられたが、これについては今後もふれる。（邦訳レーニン全集第三二巻参照）

(22) 邦訳レーニン全集三二巻二〇頁

(23) 同上、七六頁

(24) ブハーリンの「過渡期経済学」へのレーニンの評注（ロシア語、レーニン文集第十一巻—邦訳は「ブハーリン『転形期経済学』への批判」昭和五年叢文閣版）

(25) 邦訳レーニン全集第二六巻四七七頁

(26) 「反対派通報」（ロシア語）一九二九年一一—一二月号

(27) 同上、一九三〇年一—一二月号

(2) 国有の物神崇拝（フェティシズム）

トロツキーは資本主義関係の復活の可能性を語りつづけたが、しかし、それは常に、起るかも知れぬ、或いは起るであろうとか言った、あるものとしてであった。「われわれの眼前で」展開されつつある過程としてではなかったのだ。この理由は二つある。第一は、ロシアにおける反革命はプロレタリア国家の創設者たちが、心に描いたような風にはやってこなかった。すなわち、それは軍事的干渉を通じてでもなければ、私有財産の復活を通じてでもなかったことである。第二に、ドイツにおけるファシズムの勝利がソ連に直接的な脅威をあたえたことである。かくて、まさに歴史が生産の国家化は、革命的方法によるばかりか、反革命的手段によっても起りうることを惨禍をもって示したその時に、国有＝労働者国家という考えが物神崇拝に転化したのであった！

われわれはロシアを含むあらゆる所での新たなプロレタリア政党の結成をよびかけた。しかし、われわれの過去からの脱出は明確たるものではなかった。われわれの転換は、入念な新理論、すなわち、ロシアにおける権力を目標とするプロレタリア党の建設は、社会革命でなくして単に政治革命のためのものにすぎないという新理論によって突如中断されてしまったのである。

9845

すべての物神崇拝のように、国有の物神崇拝は、トロツキーを、生産関係において反革命のコースを追求することから盲目にしてしまった。十月に対する反革命の合法化たるスターリン主義憲法に、トロツキーは、まず、「新しい所有階級の生誕のための政治的前提をつくり出す」なにものかであるとしかみていたかった。あたかも階級と言うものが政治的前提から生れるかのように！死の舞踏を思わせるようなクレムリンの粛清も、トロツキーにとっては「ソビエト社会が有機的に官僚放逐の傾向に向っている」(20)のを証明するものでしかなかった！彼にとってはスターリニスト・ロシアは依然として労働者国家だったので、彼はモスクワ裁判がスターリン主義を弱めるものと考えたのである。実際にはその支配を強化したのであった。

ロシアを労働者国家だと考えつづけることによって生ずるディレンマは、官僚を階級（クラス）ではなく身分（カスト）的階層と呼んでみても解決するものではない。問題は、このグループの生産過程における役割は何か？生産手段を動かす労働者に対してのその関係は何か？——である。官僚をクラスでなくカストと呼ぶことは所有（プロパティー）を上部構造の領域に留めるのを正常化するのに役立っている。これは搾取者に単なる略奪者を装わせるのを許すだけである。資本主義の害悪は資本主義制度の枢要部から発するのではなくして、「悪い資本家」の所産なのだ、とする小ブルジョアの考え方とこれはどれだけ違うと言うのか？改良主義に対する闘争においてローザ・ルクセンブルグは資本主義の概念を「生産の範疇」から「所有の権利」に変形させることが、どんな結果を生むか、鮮かに暴露した。「ベルンシュタインは資本主義の概念を生産関係から所有関係に移動させ、企業化についての代りに単なる個人について語ることによって、彼は社会主義の問題を生産の分野から財産関係の分野に、つまり、資本と労働の関係から貧富の関係に移動させる。」(21)

トロツキーの方では、生産の法則の分析を配分結果の分析と取り替える。かくて彼は書いている。「消費財の欠乏とそれを手に入れようとする普遍的な闘争とが分配の権能を横奪する官僚を生み出す。」(22)

だが、何が「消費財の欠乏」を生み出すのか？これは単に経済の後進性の故ではない。というのは、同じ後進性はロシアが先進資本主義国と生産手段生産では足並みを揃えるのを妨げていないのだからである。生産手段の消費手段に対する関係はロシアを含めて資本主義に全般的に特徴的なのだが、六一対三九である。「消費財の欠乏」ではたくして、これこそが決定的な関係である。この関係は、ただ生きた労働に対する死んだ労働の支配を通じる、労働者に対する資本家的支配の物質的反映に すぎ

ないからこそ、そうなのだ。(3)しかしながら国有財産の存在は、トロツキーをしてロシアを労働者国家と定義しつづけしめた。なぜなら、彼にとっては、「十月によって樹立された所有関係及び生産関係」が、ロシアに依然として普及していたから。

だが、その関係は、生産関係なのか、所有関係なのか？これらは一つではなくして二つのことがらである。一方は基本的なものであり、他方は派生的なものなのだ。所有関係は生産関係の法的表現ではあるが、実際の生産関係が法律によって確認されているか否かのいずれか次第で、時には正確に、時には不正確にその関係を表現するものである。革命期と反革命期において、法的表現が、法の中でもとのまま保持されているのに対し、実際の生産関係が変化をうけているとき、革命と反革命を同一視することとなくして、生産関係を所有関係と同一視することはできないのだ！

マルクスの価値法則は、単に、理論的抽象ではなくして、実際の階級闘争の反映である。一九一七年、ロシアにおける階級的力関係は、プロレタリア革命という方法を通じて生産の国有化をもたらした。だが、エンゲルスがずっと以前に書いているように、国有化はそれ自体では「生産力の資本的特性を止揚しない。」

「国家が生産力をその所有に移せば移すほど、それはますます実際上の全資本となり、ますます多くの国民を搾取するようになる。労働者は依然として賃金労働者、プロレタリアのままである。資本関係は止揚されないむしろそれは頂点にまで逐いやられる。だがこの頂点に至ってそれはひっくりかえる。生産力の国有は衝突の解決の形式上の手段、ハンドルをそのうちに含む。」(3)

一度びロシア革命が孤立化して取り残されたとき、国有化達成の特殊な方法（社会主義革命）も、資本と労働との衝突の「解決の形式上の手段、ハンドル」の創造も価値法則の現実の廃絶を保証することはできなかった。だが、ロシア革命が孤立したといっても、歴史が一九一三年に逆戻りしたわけではない。まさにブルジョア革命がそれを社会主義革命にまで進めようとしたプロレタリアートの手によって遂行されたがゆえに、そのブルジョア革命自体が歴史の前例のない徹底さをもって遂行されたのであった。それは、数世紀にわたって残っていた封建的残存物を一掃し、生産手段を国有化して、社会主義のための「形式上の手段」の基礎をおいたのである。

しかしながら、社会主義は世界的規模でなければ達成されえないものである。社会主義革命は出発点にすぎないのだ。社会主義的生産関係を確立するという、もっと大きな、もっと困難な仕事は権力獲得の後にはじまるのである。その仕事は、十月の指導者たちが企むことなく

強調したように、一国の境界内では達成されうるものではない。世界革命がなければ、すくなくとも、いくつかの先進国の革命がなければ、価値法則は再び自己を主張するのである。ロシアの労働者が一度び生産過程に対するんな統制手段をも失なったとき、新しい「形式上の手段」が彼らを支配しはじめたのだ。このような予見されなかった仕方で、「ただ一つの資本家会社」というマルクスの理論的抽象が歴史的現実となったのである。それ以後ドイツはファシスト的方法で生産の国家化を遂行し、日本は全体主義的方法でその五カ年計画を始めた。この二つの方法は、ともに集中の極限までおしすすめる資本主義的方法の解りやすい例である。第二次大戦後、チェコスロバキアが「民主的」方法で国家化を遂行している。だが、誰れもこれを堕落しているにせよ、そうでないにせよ「労働者国家」とは呼ばないだろうと我々は信じている。それでは国家所有と労働者国家所有との同一視には何が生ずるだろうか？失敗に終るのだ。ロシア国家の性質の分析方法とそれから出てくるソ連無条件擁護主義という政策の根本はあまりに誤ったものであったので、十月の人物（トロツキーのこと）をして、ロシアが既に帝国主義戦争に不可欠の一部として参加している、その時にロシア擁護を要求させたほどである。

(29) 「マルクス主義の擁護」（邦訳トロツキー選集第九巻一五八頁）

(30) 「改良か革命か」（現代思潮社版ローザ選集第一巻二〇三頁）

(31) 「マルクス主義の擁護」（邦訳トロツキー選集第九巻一五〇頁）

(32) わが党内のマルクス主義の基本に関する全論争はこの関係に集中してきた。次の労働者党（当時のアメリカ・トロツキスト党）報告書を参照。J・R・ジョンソン「生産のための生産」、J・カーター「マルクス主義の神秘化」、F・フォレスト（ラーヤ・ドウナエフスカヤ）「マルクス主義の若干の基本点に関する再論」

(33) エンゲルス「空想から科学へ」岩波文庫版六二頁

(3) 官僚的帝国主義と官僚的集産主義

第二次大戦における赤軍の反革命的役割は第四インターナショナルのソ連論をゆさぶった。ソ連無条件擁護の政策からの分離が不可避となった。だが、堕落しているとはいえ、「労働者国家」の軍隊による帝国主義的行動を、いかに説明するというのか？ダニエル・ニーガンは次のような解答を真面目に求める。

「しかしながら」と彼は書いている。「スターリニスト官僚は年間蓄積基金が大巾に減少するような方法でソビエト経済の経営をしている。……かくて官僚は、蓄積率を極度に低い水準に、或いはマイナスにまで落さないように　可能なところではどこでも、その経営がソビエト経済に課している失費をカバーするために生産手段と労働力を略奪せざるを得なくなる。官僚の寄生的性格は政治的条件が許せばすぐにでも、帝国主義的略奪を通じてその性格をあらわしている。」彼の説明はすべて、ロシアは官僚的に運営されている労働者国家だとするトロツキー説に閉じこめられたしるしをつけている。その誤謬は、事実の誤りだけではなく、方法論上の誤りだと言うことが極めて明らかであることを露呈している。年間の蓄積基金が大巾に減少しているというのは事実ではない。反対に、通常の停滞期にもかかわらずそれは増大している。けれども、堕落した労働者国家説信奉者のつまずき方は、雰囲気のなかでは、蓄積率の減少と年間基金の減少とを同一視するのは当然のことだった。なぜなら、両者の相異を明確に把握すれば、蓄積率の減少は資本主義世界全体に特徴的な事実であることを否応なく気づかざるを得なくなるからである。それは経済の官僚的経営の結果ではなく、価値法則、及び利潤率の低下と言う　それに伴う傾向の結果なのである。「官僚の寄生的性格」は、世界資本主義の初期における蓄積率の増大が資本家の「節」によって生じたものではなかった以上に、低下の原因ではない。総資本に対する剰余価値自体の下降関係の反映である現在世界の下り坂傾向は、マルクスが「資本主義の一般的矛盾」とよんだものの結果である。周知のようにこの一般的矛盾は、剰余価値の唯一の源泉が労働にあるにもかかわらず、より多量の剰余価値を不断に獲得する唯一の方法が、機械を生きた労働に比べて、不断により多く使用するしかないと言う事実から起っているのである。これと一致して同時に、資本の集中と労働の社会化、利潤率の低下と労働予備軍の増大を生じさせる。

利潤率の低下は生産の最高主唱者たちに、価値生産方法はその内部に自からの崩壊の胚種をやどしていることを悟らせ、「中和的手段」を色々と求めさせる。彼らは帝国主義に突入したり、ほねおって生産の国家化に行ったりする。或いは一度に両方をやってのける。帝国主義的略奪も同じく価値生産の目的によってわき起されるものなのだ。トロツキーは第四インターナショナルに二つの遺産を残した。世界プロレタリア革命のレーニン主義的概念と現在のディレンマと分解の種子を宿していたソ連論とである。トロツキーのソ連論のワナに引っかかった第四インターナショナルは、その論理上の政治的結論からは脱け出したいと願っているが、しかし、トロツキ

ーの前提と決別せずにそうしたいと願っている。今に解ることだろうが、それは、不可能なことである。トロツキーは常に、国有経済の長所はそれによって経済に計画性が與えられることだと主張していた。トロツキーのソ連擁護論の支持者たちは、永続する堕落のなかに計画というある種の進歩的要素を見つづけている。擁護論から決別した他の人々（一方では官僚的帝国主義説、他方では官僚的集産主義説を述べている両派を含めて）も、なおトロツキーの基礎的分析方法のトリコにとどまっている。この方法は、トロツキー自身は、彼らを「最もひどい悲観論」だと考えていたけれども、実際は、それへの途を開いたものである。国有財産は進歩的なものとして特徴づけたトロツキーに基づいて、労働者党（訳注当時のアメリカ・トロツキスト党）は、ロシアを官僚的集産主義社会、維環であるけれども「人類史の集産主義時代」の一部と名づけている。(3)この集産主義説には、最近になって官僚的集産主義の生産様式に特徴的な労働様式として「奴隷労働」という概念をつけ加えてきている。

この「新」社会の経済運動に対するこの「奴隷労働」の関係は何か？いかなる社会的発展が、この「奴隷」を革命に導くのだろうか？彼らを、たとえばファシスト国家の資本家的無産階級と区別するものは何か？あるとすればだが――蓄積の問題はどうなっているのか？

これらすべての諸問題は答えられぬままに残っているのだが、実際、人類社会の集産主義時代の一部でありながら奴隷労働に依存するという社会秩序について、筋の通った理論をつくり出すことは困難であるがろう。この理論はロシアだけにあてはまるものとして始まったのだが、今や、官僚的集産主義の信奉者のあるものは、現代社会全体にその網を投げかけようとしている。これはただトロツキーが指摘したように、「資本主義社会の内的矛盾に基礎をおいた社会主義的構領は、結局ユートピアとして終った」（訳注　邦訳トロツキー選集第九巻一五三頁）ということを認めて終るだけである。官僚的集産主義は、ソ連擁護論から決別した第四インターナショナルの人々を、それにもかかわらず堕落した労働者国家説の概念にしがみつかせたのだが、それはこの巨大社会からは「なに一つ新しいものはなく、また、安定したものも現われていない」ということを根拠にしてであった。スターリン主義社会に何に一つ「新しいものや安定したもの」がまだ現われていないと言うのは本当だが、それは、ロシアが堕落した労働者国家だからではない。そうではなくて、スターリン主義ロシアが衰退する世界資本主義の一部であり、その寿命が死の苦悶にある世界資本主義以上には伸びないことが宿命づけられているからである。

9850

われわれの分析は、ソビエト計画経済は国家化に向う資本主義的生産の根本的運動の野蛮な官僚的完成にすぎないということを示してきた。最近の労働者党大会の席上で、ジョンソン少数派（筆者もこれに関係している）の名で出された国際問題決議でジョンソンが書いているとおりである。

「一九三六年以来のスターリニスト・ロシアの経験はプロレタリアート以外のどの階級によるものであれ、計画化は資本主義的生産の運動法則をくつがえし得るという考えを論破した。計画化は、この法則への自然発生的服従を、単に国家化的服従に代えることになるだけである。……価値生産、すなわち資本主義的生産に内在する矛盾にかりたてられてスターリニスト・ロシアは、ドイツをやぶっても、ただ同じ帝国主義的綱領に乗り出し、平和裡にドイツ帝国主義の経済的政治的方法——直接的領土併合、人間と物資の略奪、戦勝帝国主義が最大の株を保有する合併会社の設立等を再生産するのである。」

(30)

第四インターナショナルの分派で、トロツキーのロシア国家分析の方法からハッキリ抜け出しているのは、メキシコのスペイン派だけである。この派の指導G・ムニスは彼の最近のパンフレット四の中でキッパリとロシアを資本主義国家として分析しているのがわかる。彼の経済的分析は十分ではないかも知れないが、しかし、その試みにおいて、不変資本、可変資本、剰余価値と言った特有の範疇用語で計画化の問題や、それらを統制する社会的グループの問題と取り組んでおり、彼は堕落した労働者国家説から決別する決定的一歩を踏み出し、第四インターナショナルの内部に、スターリン主義的全体主義と世界発展の現段階の分析にふさわしい理論の発展を開始したのである。

ジョンソン少数派、トロツキーの誤ったソ連論を、我々の時代のレーニン主義＝トロツキー主義的分析の言葉で修正することによって、それを成功的に正している。われわれにとっては、ロシアの経験は、解放されたプロレタリアートに基礎をおく経済を除いては、現代社会はどこにも、そしてこの言葉のいかなる意味においても、進歩的な経済たり得ないというマルクス主義の根本的真理を具体化したものであった。プロレタリア民主主義は労働者による生産の管理に根をおく経済的範疇である。労働者が賃金奴隷の鎖につながれている限り、資本主義の諸法則はまぬがれ難いのである。

第四インターナショナルは、奴隷化された労働をもった社会が進歩的たりうると教えるとき、社会主義の原理そのものに悲しむべき害毒をあたえるのである。それはヨーロッパ・プロレタリア運動の指導権を獲得するとい

う任務に、政治的にもまた組織的にも、自ら手かせをかけるものだ。

国有と労働者国家は等しいとなすことは、全第四インターナショナルをして方向を迷わしめた物神崇拝である。もしも、革命の衝動が赤軍の進軍からくるように思えた戦争初期の段階で、運動に方向を失わせ分裂に導いた自己の政治方針に、ちっとでも弁解できると言うのなら、今度は、スターリン主義がヨーロッパで最大の反革命的な勢力たることを立証したその時に、革命家は「赤軍の態度を大局に」見なければならぬ(33)と言う立場をとった第四インターナショナルは、一体どんな理屈を以って自己を正当化できると言うのか？ヨーロッパにおける赤軍の態度を大目にみるということは、ヨーロッパ革命に死滅を宣告することなのだ！

赤軍を含めた全占領軍の撤退を要求する第四インターナショナルの立場の最近の転向(34)は、正しい方向への必要な第一歩である。だが、それは第一歩にすぎないし、しかも、非常にためらいがちで、手おくれの一歩である。というのは、それはまさしくロシア国家の階級的性格の根本的理解を通じて到達されたのではなくして、経験的に到達されたものだからである。今こそ、ただ単にロシア国家の階級的性格についての誤った理論から導かれた政策ばかりでなく、その理論自体を吟味し再検討すべき時機である。第四インターナショナルを再武装し、世界革命勢力の前衛としての正当な役割を果たすことができるようにすることは、緊急な先要条件である。

(33) 官僚的集産主義についての党の公式の見解は、カーター・ギャレットの官僚的集産主義論や、ジョンソンの国家資本主義論とともにすべて、党教育部が発行した資料集「ロシア問題」に含まれている。シャハトマンが書いた党のテーゼは次のように述べている。――「官僚的集産主義は、その社会関係に関する限り、社会主義型の国家よりも資本主義に近い。だが、資本主義が私有財産という長い歴史的時代の一部であるように、官僚的集産主義は人類史の集産的時代の一部――予知できない雑種的な、反動的なものであるにもかかわらず、一部――である。

官僚的集産主義の社会秩序は資本主義の社会秩序と異なるが、それは主に前者が新しい、より進んだ所有の形態、すなわち国有に基礎をおいているからである。この新しい所有の形態――ボリシェビキ革命の獲得物――が、私有よりも進歩的、つまり歴史的に優位にあるということは、マルクス主義によって理論的にもまた実践のテストによっても表明されている。」(この決議「ニュー・インターナショナル」一九四

一年十月号にも発表されている。）

34 「労働者党通報」一九四六年四月二七日付。これは、国際情勢に関する党の公式見解にも入っている。

35 Los Revolucionarios ante Rusia Yel Stlinismo Mundial,
(Editorial Revolucion, Apartado 8942,Mexico .)

36 「第四インターナショナル」一九四六年六月号

37 同上、一九四六年八月号

ソ連経済と価値

三論文を「ソ連経済と価値」

久保田一郎